高松市埋蔵文化財調査報告 第104集

寿町二丁目テナントビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

高松城跡（寿町二丁目地区）

2007年5月

香川トヨタ自動車株式会社
高松市教育委員会

例　言

1．本書は，テナントビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で，高松市寿町二丁目に所在する高松城跡（寿町二丁目地区）調査報告及び試掘調査結果報告を収録した。

2．発掘調査及び整理作業については高松市教育委員会が実施した。

3．調査から報告書作成に至るまで，下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意としたい。
遠藤喜介・河野一隆・元永行英（九州国立博物館），片桐孝浩・森格也（香川県埋蔵文化財センター），佐藤竜馬（香川県歴史博物館），中島恒次郎（大宰府市教育委員会），信里芳紀・乗松真也（香川県教育委員会文化行政課），香川県教育委員会，香川県歴史博物館，鎌田共済会郷土博物館

（順不同，敬称略）

4．高松城跡（寿町二丁目地区）の調査は，小川賢（文化振興課文化財専門員），中西克也（文化振興課非常勤嘱託）が行った。

5．以下の業務については，委託業務として行った。
遺構測量及び図化：アジア航測株式会社
遺物保存処理：株式会社吉田生物研究所
遺物写真撮影：杉本和樹（西大寺フォト）

6．本書の執筆は，小川が行い，編集は小川，片桐節子で行った。

7．本文の挿図として，高松市都市計画図２千５百分の1「高松市街北部」を一部改変して使用した。

8．発掘調査で得られた資料は，高松市教育委員会で保管している。

9．本報告書の高度値は海抜高を表し，方位は座標北（世界測地系）を表す。

10．本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SA：柵列状遺構　SD：溝状遺構　SK：土坑　SP：柱穴　SX：性格不明遺構

11．土壌及び土器観察の色調表現は，新版 標準土色帖農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修）に拠る。

12．本書に掲載した古図の所蔵については，以下のとおりである。
『生駒家時代讃岐高松城屋敷御図』：高松市歴史資料館，『高松城下図屏風』：香川県歴史博物館，『享保年間高松城下図』：高松市歴史資料館，『讃岐国香川郡高松城図』：香川県歴史博物館，『寛政元年己酉年５月高松之図』：鎌田共済会郷土博物館，『高松市街古図』：高松市歴史資料館，『天保15年高松城之図』：鎌田共済会郷土博物館，『安政４年未年高松之図』：鎌田共済会郷土博物館，『明治五年作図高松旧城下町図』：高松市歴史資料館

13．本書で用いた陶磁器・土器類の分類及び編年は，概ね以下の論考に拠る。
・乗岡2002：「近世備前焼擂鉢の編年案」「岡山城三之曲輪跡―表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査―」
・堀内秀樹ほか東京大学埋蔵文化財調査室1997：「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（１）」『東京大学校内遺跡調査研究年報。 1996年度』
・藤澤1998：『瀬戸市史　陶磁史篇４，６』
・大橋2000：「九州陶磁の編年」『九州近世陶磁学会10周年記念』
・白神1992：「堺問鉢考」『東洋陶磁　第19号』
・松本2002，佐藤2003：「高松城編年」・『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ・第５冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』

目　　次

第1章　調査の経緯と経過

第1節　調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第2節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第2節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第3章 調査の成果

第1節　試掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第2節　調査区の設定と調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第3節　遺構の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第4節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第5節　南調査区第2面の遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第6節　南調査区第1面の遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第7節　北調査区の遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64

第4章 調査のまとめ

第1節　遺構の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
第2節　区画の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
第3節　調査地における屋敷拝領者の比定・・・・・・・・・・・・・・・95

挿 図 目 次

第1図　テナントビル建設予定地位置図 (1/2,500)
第2図　遺跡位置図 (1/50,000)
第3図　高松城跡周辺主要調査地位置図 (1/10,000)
第4図　試掘調査トレンチ・遺構配置図 (1/400)
第5図　試掘調査第1トレンチS1出土遺物 (1/3, 1/2)
第6図　試掘調査第3トレンチS14出土遺物 (1/3, 1/4)
第7図　南調査区第2遺構面　遺構平面図 (1/100)
第8図　南調査区第1遺構面　遺構平面図 (1/100)
第9図　北調査区　遺構平面図 (1/100)
第10図　南調査区層序図 (高さ1/40, 幅1/160)
第11図　北調査区層序図 (高さ1/40, 幅1/160)
第12図　E, F層出土遺物 (1/3, 1/4)
第13図　SES2001平・断面図 (1/40), 出上遺物 (1/3)
第14図　SES2002・2003平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3, 1/4)
第15図　SES2004・2005平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3, 1/4)
第16図　SKS2001・2002・2010平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3), SPS2110・2143出上遺物 (1/3)
第17図　SBS2001・2002平・断面図 (1/40)
第18図　SDS2001・SDN003平・断面図 (1/80, 1/40)
第19図　SDS2001・SDN003出土遺物 (1/3, 1/4, 1/2)
第20図　SDS2002平・断面図 (1/80, 1/40), 出土遺物 (1/3)
第21図　SDS1004・1005平・断面図 (1/80, 1/40), SDS1004出土遺物 (1/3)
第22図　南調査区中央部平面図 (1/100), 出土遺物 (1/3)
第23図　SDS1002・1003平・断面図 (1/80, 1/40), SDS1003出土遺物 (1/3)
第24図　SDS1001平・断面図 (1/80, 1/40), 出土遺物 (1/3)
第25図　SDS1006・1007平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3)
第26図　SXS1001, SDS1008平・断面図 (1/80)
第27図　SXS1001下層出上遺物 (1/3, 1/2)
第28図　SXS1001中層・上層出土遺物 (1/3)
第29図　SXS1001上層出上遺物 (1/3, 1/2)
第30図　SXS1001上層出土遺物 (1/3, 1/4, 1/2)
第31図　SDS1008下層・上層出上遺物 (1/3)
第32図　SES1001, SKS1007平・断面図 (1/40), 出上遺物 (1/3)
第33図　SES1002平・断面図 (1/40), 出上遺物 (1/3)
第34図　SES1002出上遺物 (1/3, 1/4, 1/2)
第35図　SES1003平・断面図 (1/40)
第36図　SKS1001平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3)
第37図　SKS1001出上遺物 (1/3, 1/4)
第38図　SKS1001出土遺物 (1/2, 1/4)
第39図　SKS1002・1004平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3, 1/4)
第40図　SKS1005・1006平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3, 1/4)
第41図　SKS1008・1011・1012・1014平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3)
第42図　SKS1016平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3, 1/2)
第43図　SKS1020平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3)
第44図　SKS1022平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3, 1/4, 1/2)
第45図　SKS1024平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3)
第46図　SKS1027・1028・1033平・断面図 (1/40), SKS1027・1033出土遺物 (1/3, 1/4)
第47図　SKS1035・1036・1039・1040平・断面図 (1/40), SKS1039・1040出上遺物 (1/3)
第48図　SPS1139平・断面図 (1/40), SPS1139・1108・1119出土遺物 (1/3)
第49図　SBS1001平・断面図 (1/80), SPS1007出土遺物 (1/3)
第50図　南調査区遺構外出土遺物 (1/3,1/2)
第51図　SEN001平・断面図 (1/40), 出土遺物 (1/3, 1/2, 1/4)
第52図　SEN002・003平・断面図 (1/40), 出上遺物 (1/3, 1/2)
第53図　SEN004, SKN020平・断面図 (1/40), SEN004出土遺物 (1/3, 1/4)
第54図　SXN001平・断面図 (1/40), 出上遺物 (1/3, 1/4)

第55図　SXN002，SKN001半・断面図(1/40)，SKN001出土遺物(1/3，1/2，1/4)
第56図　SXN003半・断面図(1/40)，出土遺物(1/3)
第57図　SXN003出土遺物(1/3，1/4)
第58図　SXN003出土瓦(1/4)
第59図　SXN006，SKN007半・断面図(1/40)，SKN007出土遺物(1/3)
第60図　SXN004・005半・断面図(1/40)
第61図　SXN007半・断面図(1/40)
第62図　SAN002半・断面図(1/80)，SPS1087出土遺物(1/4)
第63図　SXN008半・断面図(1/40)，出土遺物(1/3，1/4，1/2)
第64図　SXN009・010，SKN012半・断面図(1/40)，SKN012出土遺物(1/3，1/2)
第65図　SKN006半・断面図(1/40)，出土遺物(1/3，1/4)
第66図　SKN003・009・010・011・026，SPN051・055半・断面図(1/40)，SKN003・026出土遺物(1/3，1/2)
第67図　SKN013・016半・断面図(1/40)，出土遺物(1/3，1/2)
第68図　SKN014・021・025半・断面図(1/40)，SKN025出土遺物(1/3)
第69図　SDN001，SAN001，SDN001下層検出遺構平・断面図(1/40)，SDN001出土遺物(1/3)
第70図　SPN163・164半・断面図(1/40)，SPN163・011・064・138出土遺物(1/3，1/4)，北調査区遺構外出土遺物(1/3，1/4)
第71図　遺構変遷図①（1/250）
第72図　遺構変遷図②（1/250）
第73図　調査地周辺地割図（1/2,500）
第74図　調査地周辺屋敷地割図（1/2,500）
第75図『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』絵図①
第76図『高松城下図屏風』絵図②
第77図『享保年間高松城下図』絵図③
第78図『讃岐国香川郡高松城図』絵図④
第79図『寛政元年己酉年5月高松之図』絵図⑤
第80図『高松市街古図』絵図⑥
第81図『天保15年高松城之図』絵図⑦
第82図『安政4年未年高松之図』絵図⑧
第83図『明治五年作図高松旧城下町図』絵図⑨

写真図版目次

図版1
南調査区第2面全景（東から）
南調査区第1面全景（東から）
図版2
SXS1001（北から）
南調査区南壁（東部）
南調査区南壁（西部）
南調査区東壁
南調査区西壁
図版3
第1トレンチ東壁（SDN003）
第2トレンチ西壁（北端部）
第2トレンチ西壁（SXN003）
第3トレンチ西壁（SXN007）
第4トレンチ西壁（北部）
第5トレンチ北壁（西部）
第5トレンチE層遺物出土状況
SXS1001南北断面（北部）
図版4
SDS2002検出状況（北から）
南調査区西部第2面完掘状況（北から）
SES2004検出状況（南から）
南調査区東部第2面完掘状況（北から）
図版5
SDS2001（北から）
SDS2001断面
SDS2002（南から）
SDS2002断面
図版6
SES2001断面
SES2001（西から）
SES2002（北から）
SES2003（東から）
図版7

SES2004断面
SES2004（東から）
SES2005（北から）
南調査区第１面中央部整地上面遺構検出状況（北から）
図版８
南調査区第１面西部遺構検出状況（北から）
南調査区第１面東部遺構検出状況（東から）
SDS1004（南から）
SDS1005（南から）
図版９
SBS1001（南から）
SDS1001（北から）
南調査区　SAN002（南から）
南調査区第１面中央部整地上遺構完掘状況（北から）
図版10
SXS1001断面（東西方向）
SXS1001（南部）断面（南北方向）
南調査区砂堆確認トレンチ
南調査区第１面西部完掘状況（東から）
図版11
SDS1008（南から）
SEN001断面
SEN001（西から）
SEN001（東から）
図版12
南調査区北端部（SDS1008）西壁土層
SDS1008北壁土層
SEN001・SDS1008（東から）
SDS1008・SEN001断面
図版13
SPS1037
SPS1048
SPS1139断面
SKS1035・1036（西から）
図版14
SKS1033（東から）
SPS1001
SPS1026
SPS1027
図版15
SKS1001（東から）
SKS1022断面
SKS1027（北から）
SKS1028（南から）
図版16
SDS1004・SDS1005断面
SDS1001断面
SES1001・SKS1007（東から）
SES1002断面
図版17
北調査区第5・6トレンチ（南から）
北調査区第１～４トレンチ（南西から）
第６トレンチ遺構検出状況（北から）
第６トレンチ完掘状況（南から）
図版18
第５トレンチ遺構検出状況（西から）
SDN001下層遺構
第５トレンチ完掘状況（東から）
第５トレンチ完掘状況（西から）
図版19
第４トレンチ完掘状況（南から）
第４トレンチ完掘状況（北から）
SXN008・009（西から）
第４トレンチ中央部西壁
図版20
第３トレンチ完掘状況（南から）
SXN007桶材出土状況
第４トレンチ遺構検出状況（南から）
第4トレンチ北端部遺構（北から）
図版21
SDN003（南から）
第２トレンチ遺構検出状況（北から）
SEN001・SXN004検出状況
第３トレンチ遺構検出状況（北から）
図版22
SXN007（南から）
SXN008断面
第１トレンチ遺構検出状況（北から）
第１トレンチ完掘状況（北から）
図版23
SKN013断面
SPN163
SXN003（西から）
SXN003断面（第２トレンチ東壁）
図版24
SKN016断面
SKN021断面

SKN021（東から）
SKN016（北から）
図版25
SEN004断面
SEN004・SKN020(南から)
SEN002断面
SKN006断面
図版26
SDN001断面　(第５トレンチ北壁)
SDN001(南から)
SDN001(西から)
SDN003断面
図版27
試掘第１トレンチ　東から
試掘第２トレンチ　東から
試掘第３トレンチ　南から
試掘第3トレンチS14　西から
図版28
SDS2002出土遺物
SDS1001出土遺物
SES2001出土遺物
SDS1007出土遺物
SES2004出土遺物
図版29
SKS1006出土遺物
SXS1001出土遺物
SKS1020出土遺物
SXS1001出土遺物
SXS1001出土遺物
図版30
SXS1001出土遺物
図版31
SXN003・SKN003出土遺物
Ｓ１出土遺物
SXN008出土遺物
E層出土遺物
図版32
SDS1004出土遺物
SES1001出土遺物
SES1002出土遺物
SES1002掘方出土遺物
図版33
SKS1016出土遺物
SKS1024出土遺物
SKS1022出土遺物
SKS1040出土遺物
図版34
SEN001出土遺物
SEN001出土遺物
SKN013出土遺物
SEN004出土遺物
SKN001出土遺物
図版35
SKN012出土遺物
SKN006出土遺物
SKN016出土遺物
SXN001出土遺物
図版36
SKS1002出土遺物
SKS1005出土遺物
SKS1001出土遺物
図版37
出土遺物
図版38
出土遺物
図版39
SDS1006出土遺物
SDN003出土遺物
出土瓦
図版40
SXS1001出土遺物
SDS1008出土遺物
出土瓦
図版41
出土遺物
図版42
出土遺物
図版43
出土遺物
図版44
出土遺物

第１章　調査の経緯と経過

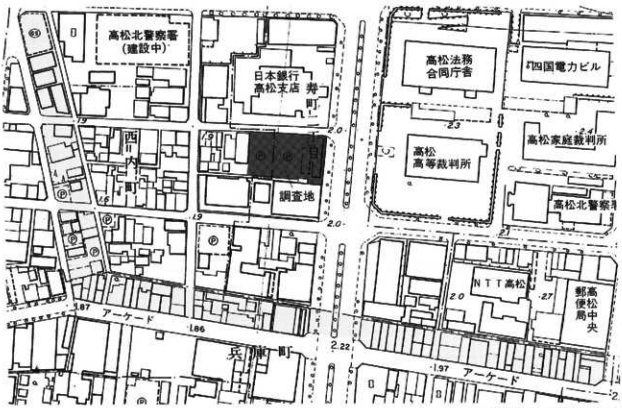
第１節　調査の経緯（第１図参照）

香川トヨタ自動車株式会社（以下，「香川トヨタ」と略称する）は寿町二丁目に所有する土地を譲渡し，テナントビルを建設する計画を立てた。当該地は絵地図によれば高松城外曲輪の武家地に相当することから，高松市教育委員会（以下，「市教委」と略称する）と香川トヨタは協議を行い，その結果，「現状では周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが，高松城跡に関係する遺構が存在する可能性が高く，工事着手後に遺跡が発見された場合は工事の進捗に重大な影響を及ぼす可能性もあるため，工事着手前に試掘調査を実施し，遺跡の有無を確認することが望ましい。」との内容で合意に達した。

これを受けて，香川トヨタから市教委に対し埋蔵文化財確認調査の依頼があり，平成17年10月23・24日に市教委が試掘調査を実施した。試掘調査は旧鉄筋コンクリート建物があった範囲を除くテナントビル建設予定地内でトレンチを３箇所設定して実施し，埋蔵文化財が確認された。市教委は試掘調査結果を香川県教育委員会（以下，「県教委」と略称する）に報告し，当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地となった。

そこで，香川トヨタは平成17年11月17日に県教委へ「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の届出」を提出し，事前に発掘調査を実施するよう県教委から指導があった。市教委と香川トヨタは再び協議を行い，テナントビル建設予定のうち約550㎡について工事着手前に発掘調査を実施することで合意し，平成17年12月１日に両者の間で埋蔵文化財調査協定書を締結した。業務名は「寿町二丁目テナントビル建設に伴う埋蔵文化財管理業務」とし，市教委は発掘調査・整理作業の実務を行い，その費用負担および契約・支払事務については香川トヨタが行うこととした。

発掘調査は平成18年１月12日から開始し，平成18年３月28日に予定どおり終了した。また整理作業については，平成18年３月１日～平成19年５月31日の期間で随時，市教委の円座整理事務所で実施した。



＊網掛部分は，高松城外堀位置を示す

第１図　テナントビル建設予定地位置図（1/2,500）

第２節　調査の経過

発掘作業及び整理作業の実施状況は，委託業務を含め下記の工程表のとおりである。

［発掘作業工程表］

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
1月作業項目		日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火
北半調査	重機掘削/廃土処理																															
	遺構検出/掘削																															
	遺構写真撮影/図化																															

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28			
2月作業項目		水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火			
北半調査	遺構検出/掘削																															
	遺構写真撮影/図化																															
南半第１面調査	重機掘削/廃土処理																															
	遺構検出/掘削																															
	遺構写真撮影/図化																															

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
3月作業項目		水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金
南半第１面調査	重機掘削/廃土処理																															
	遺構検出/掘削																															
	遺構写真撮影/図化																															
	写真測量																															
南半第２面調査	重機掘削/廃土処理																															
	遺構検出/掘削																															
	遺構写真撮影/図化																															
	写真測量																															
トレンチ掘削・調査																																
残務・撤収作業																																

［整理作業工程表］

	H18 3月	H18 4月	H18 5月	H18 6月	H18 7月	H18 8月	H18 9月	H18 10月	H18 11月	H18 12月	H19 1月	H19 2月	H19 3月	H19 4月	H19 5月
検合・復元															
遺物実測															
遺物トレース															
遺構トレース															
図版レイアウト															
遺物写真撮影															
遺物保存処理															
原稿執筆															
編集															
校正															
成果品・遺物収納															

第２章　地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境（第２図参照）

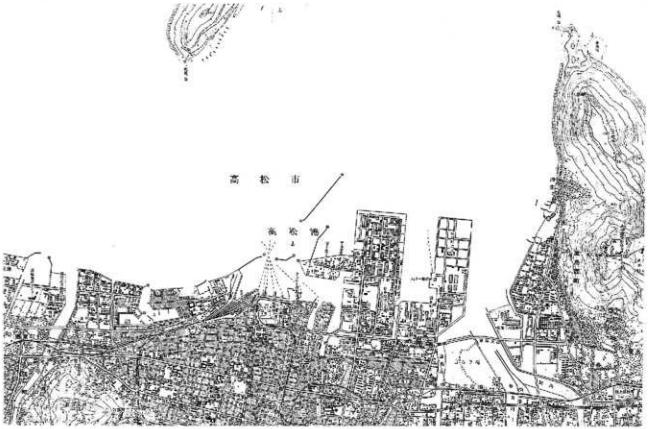
瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に，低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地，東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km，南北16kmの範囲に及ぶ。この平野は讃岐山脈から流下し，北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。高松城の城下町として発展した市街地は，香東川の東流路が瀬戸内海に注ぐ河口の中洲や砂堆上に立地している。香東川は，現在，石清尾山塊の西を直線に北流する西流路のみだが，17世紀初頃，高松藩に招かれた西嶋八兵衛の河川改修によって一本化されたものである。なお，17世紀の廃川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

第２節　歴史的環境（第３図参照）

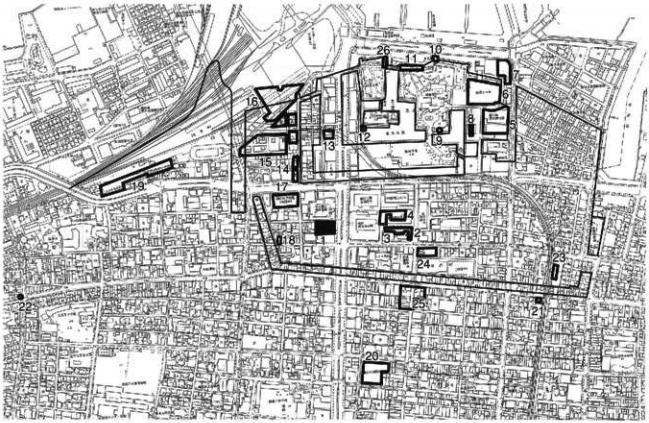
高松市街地の下に埋没する中洲や砂堆上に初めて人の活動が認められるのは，弥生時代後期である。

松平大蔵家上屋敷跡の発掘調査では，柱穴とともに弥生土器が出土し付近に集落が存在した可能性が指摘できる他，平安時代前期の溝も確認している。この地域の土地が安定し，人が恒常的に居住できるようになるのは平安時代後期と考えられる。当時，この地域は篦原郷と呼ばれ，安楽寿院領である野原庄が高松城跡の南方に所在していた。野原庄は，白河院の勅使出が忘徳年間頃（11世紀末葉）に立券荘号されたものである。康治２年（1143）８月19日の太政官符によれば野原庄の四至が条里により表記されており，条里地割または条里呼称がこの地まで普及していたと考えられる。さらに時代が下ると荘園以外にも，文安２年（1445）の「兵庫北関入船納帳」には船籍地として名前が記載されることから，中世には港町としての機能を有していたと考えられる。時代は遡るが，高松城跡西の丸地区の発掘調査で，11世紀後半～13世紀前半の護岸施設と搬入された土器が高い比率で出土している。加えて西の丸地区に隣接する浜ノ町遺跡では，白磁四耳壺を埋納した13世紀末～15世紀末の集落跡が確認されている。一方，高松城跡東の丸地区に目を転じると，16世紀後半以前の漁民の墓群が検出されており，またその南方向にある片原町遺跡では，15～16世紀代の居館跡が想定される区画溝が確認されている。このように高松市街地では古代末から中世の集落等が確認され，文献からもうかがえるように，かつて港町が栄えていたと考えられる。砂堆や中洲上に中世都市が立地する状況は，博多や草戸千軒町遺跡にも見られるように全国的な傾向であり，これらの都市をつなぐ交易が行われていたのであろう。このような時代背景のもとに，高松城がこの地に築かれたと考えられる。

さて，この高松城を築城したのは豊臣秀吉の家臣，生駒親正である。秀吉の四国征伐により，天正13年（1585）長宗我部元親が降伏し，讃岐国は仙石秀久・十河存保に与えられた。その後尾藤知宣の領国となったが，天正15年（1587）生駒親正が入封，讃岐17万石を領した。高松城は親正の居城として，翌天正16年から築城に着手し，数ヵ年を要し完成された水城である。水城と呼ばれる由縁は，北の守りを瀬戸内海にゆだねるだけでなく，堀に海水が導かれているからである。また，南方には大手（旧太鼓門）を構え，城の南側に城下町が展開する「後堅固」の城でもある。城の構造は，内堀・中堀・外堀といった三重の堀をめぐらし，内堀より内側には本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪を配する。天守閣と地久櫓を設けた本丸は，堀により他の曲輪と独立し，二ノ丸とをつなぐ鞘橋を落とすことで敵の侵入を防ぐ構造となっている。寛永17年（1640）御家騒動により生駒氏は出羽国矢島に転封，寛永19年に代わって松平（藤）頼重が高松城主となり，東讃岐12万石を領した。頼重は城の改修を度々行い，寛文11年（1671）頃の大規模な改修では，東ノ丸を造成するとともに月見櫓・続櫓・渡櫓などを造り，北に設けた水手御門より直接海から出入りができるようにした。その後も松平氏は，城主として明治維新を迎える。高松城は昭和29年（1954）に松平氏より高松市に譲渡，翌年玉藻公園として市民に開放され，史跡として国指定され文化財の保護が図られている。しかし，明治17年（1884）に天守閣が取り壊されてからは都市化の波により次第に堀は埋め立てられ，現在は本丸近くまで市街化が進んでいる。



第２図　遺跡位置図（1/50,000）



第３図　高松城跡周辺主要調査地位置図（1/10,000）

1.寿町二丁目地区　2.松平大膳家中屋敷跡　3.丸の内地区　4.松平大膳家上屋敷跡　5.原博地点　6.県民ホール地点　7.アクトホール地点　8.東の丸（作事丸）
9.三の丸（多目的トイレ）　10.水手御門　11.三の丸　12.地久櫓台　13.無量寿院跡　14.西の丸A地区　15.西の丸B地区　16.西の丸C地区　17.高松北署地区　18.県高等学校PTA会館地点　19.浜ノ町遺跡　20.紺屋町遺跡　21.片原町遺跡　22.扇町一丁目遺跡　23.東町奉行所跡　24.堀跡　25.丸亀町A街区　26.鉄門

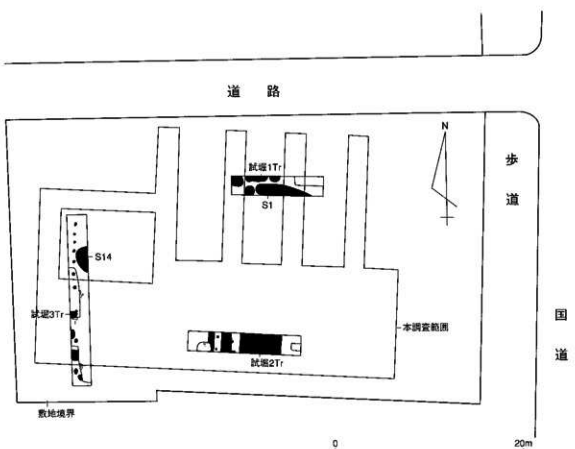
第３章　調査の成果

第１節　試掘調査（第４図参照）

先述のように試掘調査は，テナントビル建設予定地内で３箇所のトレンチを設定して実施した。大半の遺構検出は，平面形状が明確に確認できる現地表面から約1.7ｍ地下の砂堆上面で行い，土坑，溝状遺構，柵列状遺構，大型の性格不明遺構等多数の遺構が認められた。検出されたもののうち，その一部について掘削を行い，陶磁器類等，近世を中心とした遺物が出土している。以下では，掘削を行った遺構で本調査の結果に含まれなかったものについて報告する。

S1（第４図参照）

試掘調査第１トレンチで確認した遺構。検出長約５ｍ，検出幅約１ｍの溝状を呈する。東西方向を示すが，本調査の結果からも当トレンチ内にほぼ収まる規模と推定される。試掘調査では遺構の上層部を中心に掘削し，コンテナ約１箱分の遺物が出土した。所属時期については，出土遺物及び本調査部分の第２トレンチ西壁で認められる層序においてSXN003（18世紀前葉の埋没）より後出する点から，18世紀中葉頃の所産と考えられる。



第４図　試掘調査トレンチ・遺構配置図（1/400）

S1出土遺物（第５図参照）

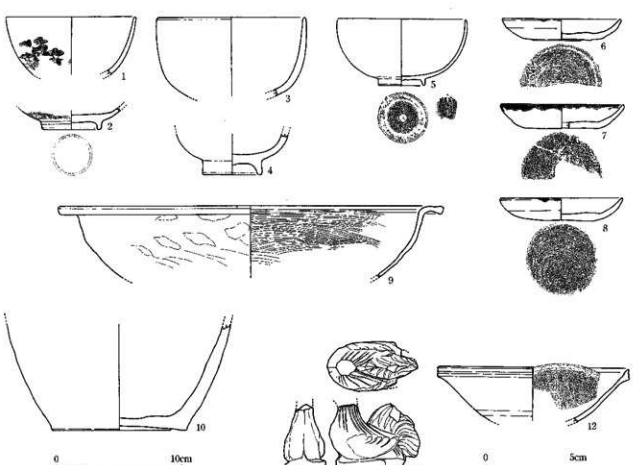
１・２は，肥前系磁器碗。３・４は，肥前系陶器碗。胎土は精良で，器面は浅黄色を呈する。５は京・信楽系陶器の丸碗。高台内の隅に，「清隠寺」の小判印が認められる。６～８は，土師質土器皿。何れも底部に回転糸切り痕を残し，胎土は鈍い橙色を呈する。また口縁部には煤の付着が見られる。高松城編年（佐藤2003）の皿AM形式に相当する。９は，在地御城系の土師質土器焙烙。口縁は断面三角形で，深手のもの。10は土師質土器，（鍋）帯の底部。11は土師質土器で，型合わせの鳥形。頭部が欠損する。器面には，キラコが塗布されている。12は，ミニチュアの備前系陶器擂鉢である。

S14（第４図参照）

試掘調査第３トレンチで確認した遺構で，径約2.5ｍの半円形に検出された。遺構の掘削は幅数十cmの筋掘りのみ行ったが，底面で湧水が認められる点や平面の形状から素掘りの井戸状遺構と想定される。埋土には一定量の平瓦が含まれ，出土遺物はコンテナ約1/2となった。遺構の埋没時期については，出土遺物から本調査の南区第２遺構面に相当する時期（16世紀末葉・17世紀初頭）と考えられる。

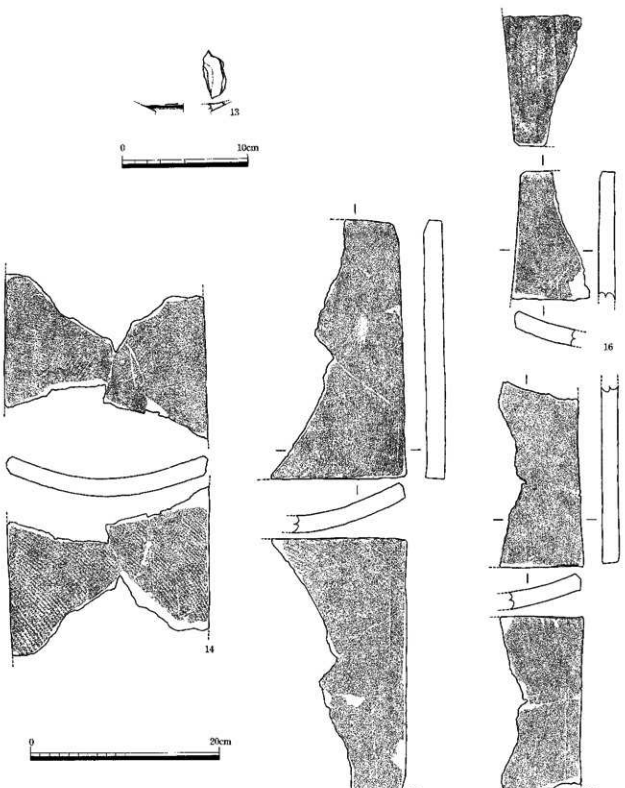
S14出土遺物（第６図参照）

13は青花の細片。見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施すもので，器面には貫入が認められる。14～17は，平瓦。何れも胎土には多くの砂粒を含んだものが用いられており，また凸面には明瞭な糸切り痕（コビキＡ）を残すものも多く認められる。完存するものはないが，14・15から幅22cm，長さ28cm，厚さ２cm程度の法量が推定される。瓦



第５図　試掘調査第１トレンチS1出土遺物（1/3，1/2）

の糸切りによる切り離し法については，周辺部では高松城編年様相1（佐藤2003）における時期のみに認められ，17世紀初頭がその下限とされる。本調査の南区第2遺構面（SDN003・SDS2001，SES2004）においても，同様の胎土と切り離し痕をもったものが認められる。



第6図　試掘調査第3トレンチS14出土遺物（1/3，1/4）

第2節　調査区の設定と調査方法（第4・8～10図参照）

先述のように，試掘調査を経て工事予定地内は周知の埋蔵文化財包蔵地となり，その調査範囲については，香川トヨタ側から提出された設計図面を基に協議を行った。その結果，ビル及び付随する立体駐車場の基礎部分について発掘調査を行うこととし，基礎の状況に応じ北半部は幅2ｍの筋掘り（第1～6トレンチ）調査，南半部については全面を発掘することになった。工事及び廃土処理の工程から，北半部と南半部の調査を分割して行っており，これに合わせ調査区も北調査区と南調査区とした。

掘削については，北調査区で遺構の地山と予想された砂堆上面，南調査区では更に上位での遺構確認面を追加し，各々の確認面まで重機掘削とした。重機掘削の後，随時遺構検出を行い，遺構番号を付け掘削を行った。遺構番号は，検出時に予想した性格の略称（SA，SE等）と，南北の調査区別（N・S）及び南調査区の遺構確認面（1・2）を加え，概ね検出順に番号（SAN001，SES1001等）を付けた。

測量については，南調査区を1/50縮尺の空中写真測量（委託業務）で行い，遺構等の細部及び断面は手書きにより1/20縮尺程度の図化を行った。また北調査区については南調査区に接して適宜，基準点を設け空中写真測量に取り込むとともに，手書きによる遺構等の図化を概ね1/20縮尺で行った。

第3節　遺構の概要（第4・8～10図参照）

当調査地は高松城外曲輪の武家地に相当する地区で，周辺の調査結果や古地図から現状の地割と合致することが予想された。調査地の北と南を画する東西方向の現道や境は，近世に遡りうることが既存の調査結果（松平大膳家上・中屋敷跡）から窺われ，また調査地の中央付近が現在の西内町と寿町とを東西に隔てる境になっており，七地の区割りについては一定の想定がなされる。

調査結果では敷地の北と南の境を示す遺構は確認できなかったが，調査地中央において南北方向の柵列を示すような柱穴が密集しており，その下層部でも複数の溝状遺構（SDS1002・1003，1004，1005，SDS2002）が確認され，概ね近世を通じた境の存在が想定される。この境の東と西側の敷地では遺構の集中部が異なり，東側の敷地は，南部（南調査区）において建物跡（SBS1001）とみられる柱穴群や井戸，廃棄土坑が集中し，一方，西側の敷地においては北部に偏って見られる。加えて東側の敷地には，南西隅に大型の水溜あるいは堀状の遺構（SXS1001）がある等，各々の敷地の特色となっている。

この他，高松城築城期を前後する時期において，南北方向の区画溝（SDN003）や井戸跡（SES2001～2005）等，主に南調査区の第2遺構面において遺構が確認された。

第4節　基本層序（第7・11・12図参照）

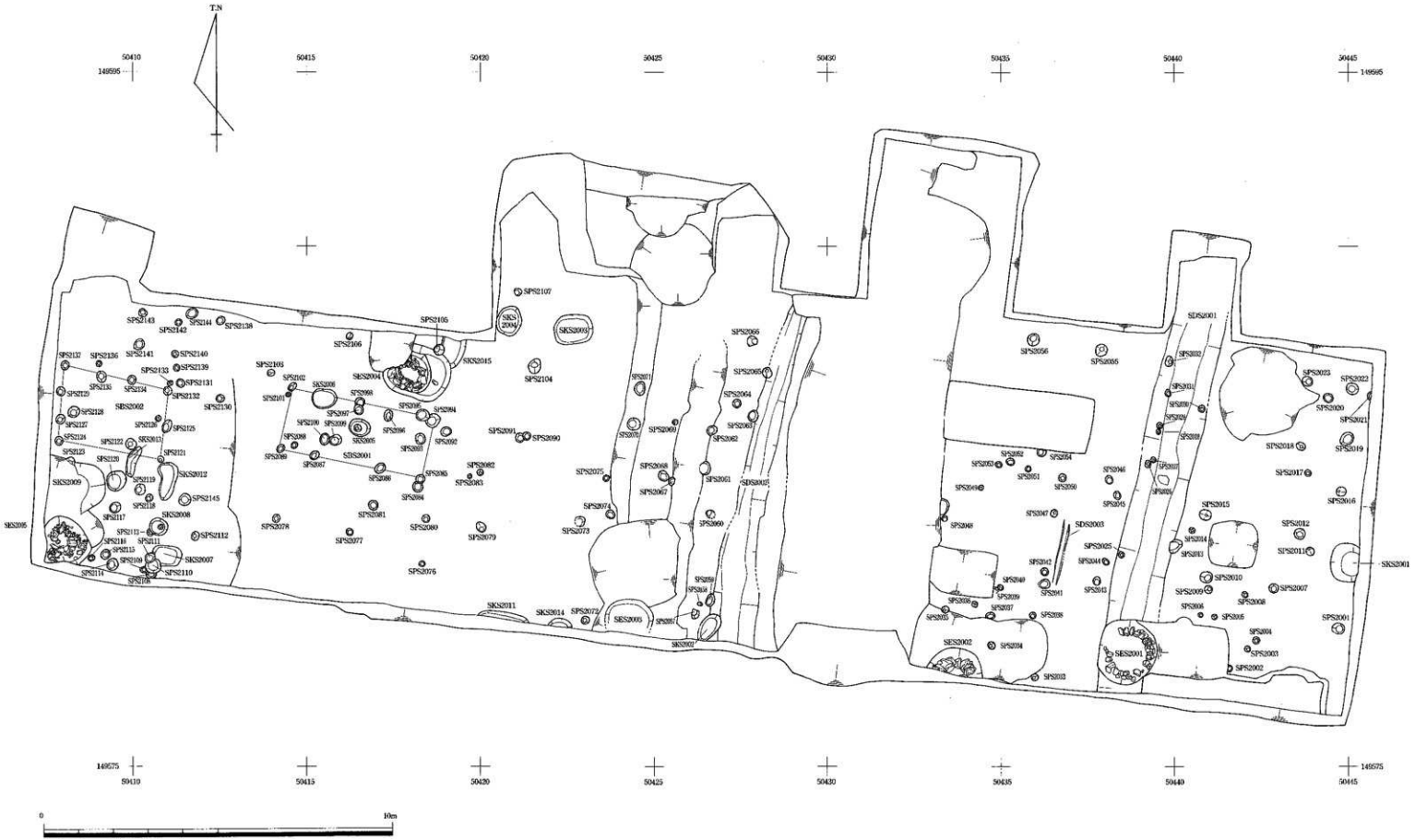
トレンチ調査である北調査区では，砂堆上面に残る遺構を検出し，その掘り込みの層序を可能な限りトレンチ壁面で確認した。その結果，時期不明の整地も幾つか存在するが，概ね，以下に示すようなA～F層の層序が想定された。この内，BとE層が広範に認められ，比較的容易に判別できる堆積層であった。B層は，幕末・明治期の整地層，E層については中世期の遺物を含む自然堆積であることから，高松城の整備以前の層位を示すものと考えられた。この間にいくつかの整地が存在するが，南調査区の調査にあたり，概ねE層の上面で様々な埋土をもつ遺構を検出し，E層と同系の埋土をもつ遺構やこれに先行するものは，直下のF層上面で検出する方針とした。なお，近世の生活面が推定できるものに，石組みのSDN001（17世紀中葉以前）が辛うじて挙げられるが，調査地全体の状況からは，これ以上の標高に想定される生活面が残存する余地はほぼ無いものと考えられる。

A～F層の分類については，概ね次のように設定した。

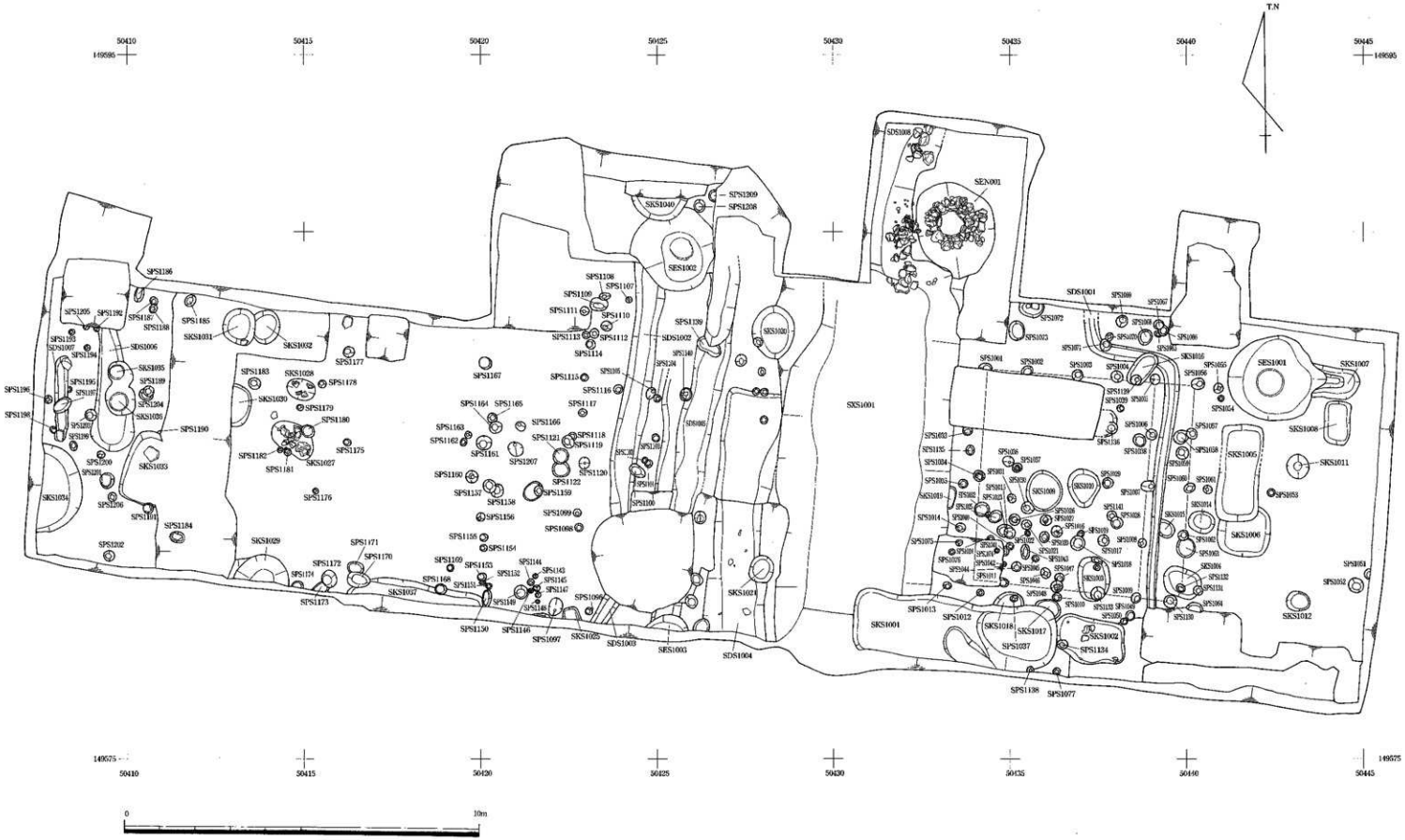
A層：現代の攪乱や戦災痕及び下位のB層から近代以降の所産が明白なもの。なお，この上位に数十cm程の地盤改良土と現地表のアスファルト敷きが存在したが，事前に除去を行っている。

B層：黒褐色のシルト質粘土で，炭・焼土粒を含む。北調査区ではSKN001・007等の埋土に連続し，南調査区ではSXS1001，SKS1001等を覆う。出土遺物から，19世紀中葉の所産と推定される。

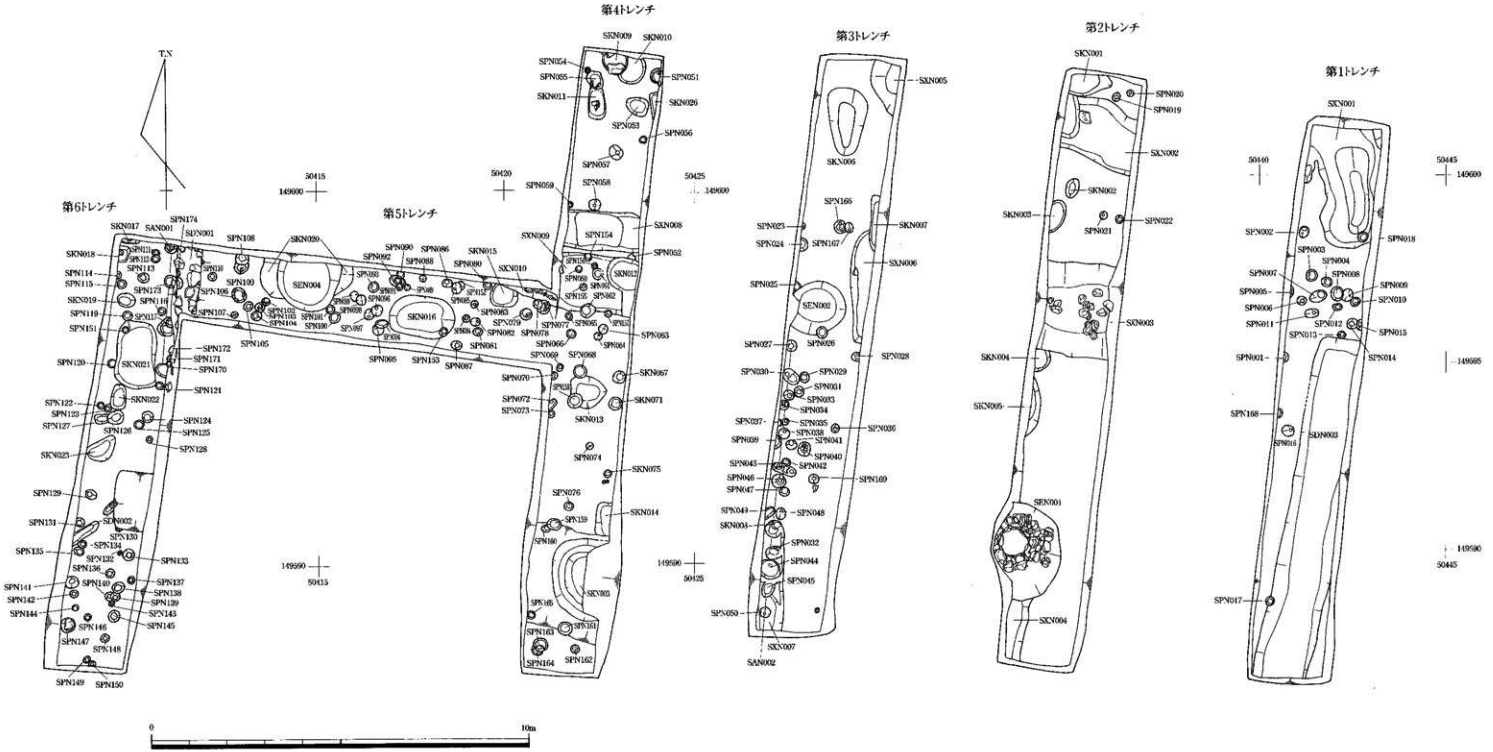
C層：D層と同系を呈するが，炭や焼土粒等を含み，均一さに欠けるもの。SXN001・003等の出土遺物から18世紀前葉以降の所産と推定される。



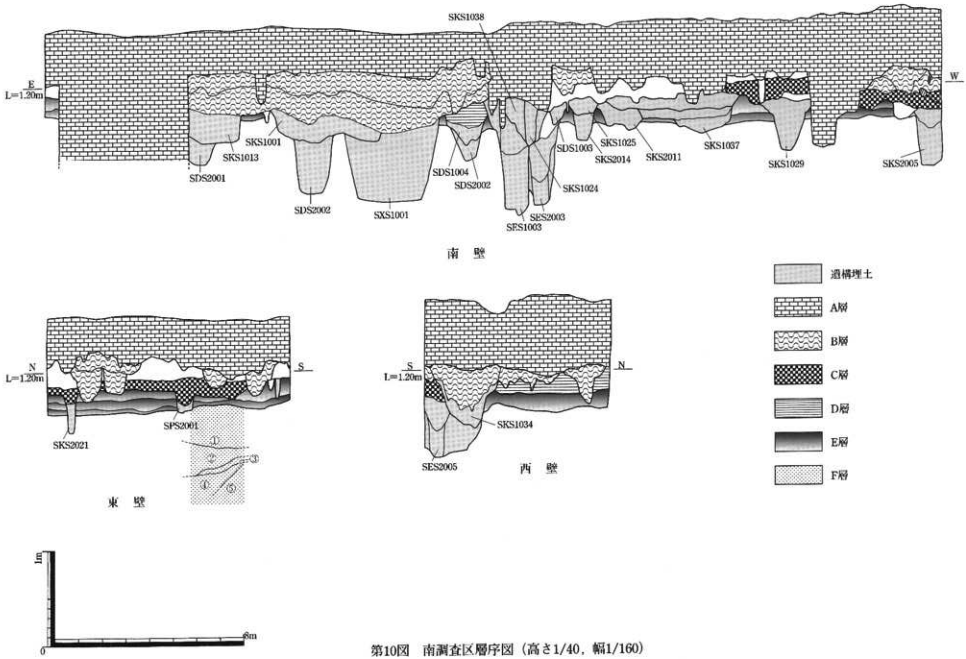
第７図　南調査区第２遺構面　遺構平面図（1/100）



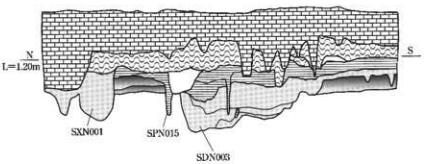
第８図　南調査区第１遺構面　遺構平面図（1/100）



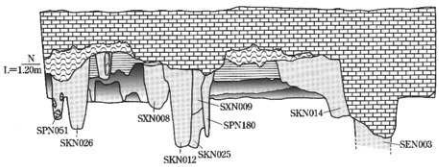
第９図　北調査区　遺構平面図（1/100）



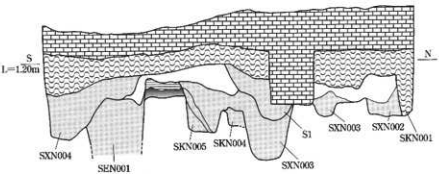
第10図　南調査区層序図（高さ1/40，幅1/160）



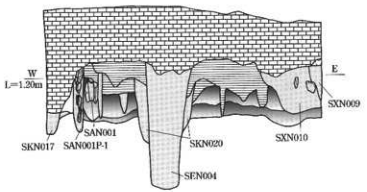
第1トレンチ東壁



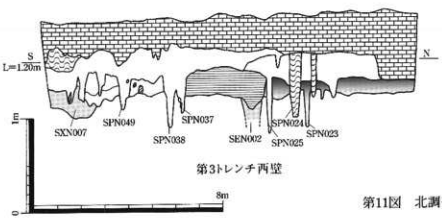
第4トレンチ東壁



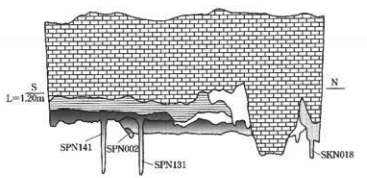
第2トレンチ西壁



第5トレンチ北壁

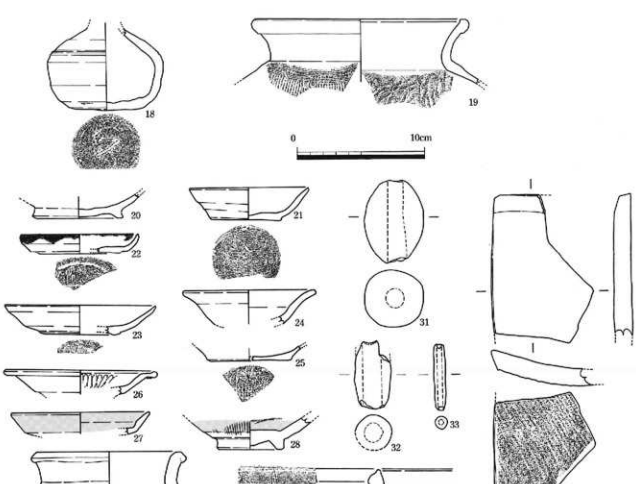


第3トレンチ西壁



第6トレンチ西壁

第11図　北調査区層序図（高さ1/40，幅1/160）



第12図　E，F層出土遺物（1/3，1/4）

D層：砂礫や浅黄色土を含む黄灰色のシルト質土で，E層の上位に堆積するもの。SEN004，SXN008他，南調査区中央部のSDS1004・1005の覆土からの出土遺物より17世紀中葉以前の所産と推定される。

E層：F層の上位に堆積するシルト質土。下部は灰白色，上部は土壌化し褐灰色を呈する。下位に伸びる褐鉄鋼が認められ，湿地状の環境が窺われる。図化したような中世全般の遺物を包含している。

F層：遺構の地山とした砂堆。海抜高まで掘削した南調査区のトレンチで，上部から浅黄色極細砂（第11図東壁参照①），灰黄褐色シルト（②），明黄褐色粗砂（③），灰色粘土（④），灰色砂礫（⑤）の堆積が認められた。図化した須恵器が下層の砂礫より出土し，概ね7世紀代以降の沖積層と考えられる。

E，F層出土遺物（第7図参照）

18・19は，F層出土の須恵器である。18は壺（ハソウ）で，扁平な底部をもちヘラ記号が認められる。19は甕で，体部外面に平行叩き後カキ目を施し，内面には同心円状の当て具痕が残る。

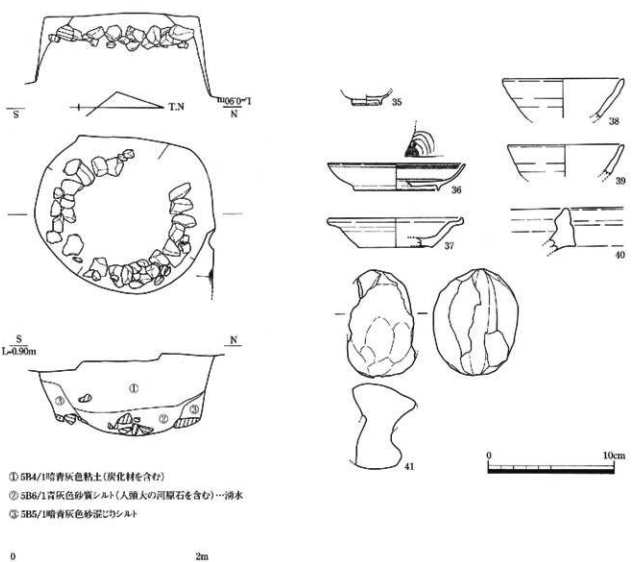
20～34は，E層の出土遺物である。20～22は，北調査区第5トレンチ人力掘削時の出土。20は黒色土器椀で，下部の非土壌化層より出土した。21・22は上部の土壌化層よりの出土で，底部回転糸切りの土師質土器坏・皿である。23～34は，南調査区機械掘削時の出土である。23～25は土師質土器坏・皿で，23・25は底部静止糸切りである。26は瀬戸・美濃系陶器で，折縁ソギ皿。27は龍泉窯系青磁皿。28は同安系青磁碗。29・30は，備前系陶器壺・擂鉢。31～33は，管状土錘。34は平瓦。砂粒の多い胎土が用いられ，凸面に糸切り痕（コビキA）が残る。

第５節　南調査区第２面の遺構・遺物（第８・13～20図参照）

確認した遺構に井戸（SES2001～2005），土坑（SKS2001～2015），柱穴（SPS2001～2145），溝状遺構（SDS2001～2003）がある他，柱穴群の一部から２棟の掘立柱建物跡（SBS2001・2002）を復元した。全体的に遺構の遺存状態が悪く出土遺物についても限られるが，所属時期については主に井戸の出土遺物から17世紀初頭の廃棄時期が考えられる。一方で，これに先行する区画溝SDS2001・SDN003の存在から，高松城築城以前（16世紀末葉）のものも含まれると考えられる。

SES2001（第13図参照）

南調査区東部南端，標高0.79ｍで検出した石組み井戸で，SDS2001に後出する。掘り方の平面は，南北方向に1.88ｍ，東西方向に1.64ｍを測る円形を呈するが，遺構面の遺存状態が良い北と西面では直線的になり隅丸方形状に見られる。石組みは1段相当しか残らず，ほぼ人頭大となる河原石の小口を内に向け，径１ｍ程の円形状に並べる。深度は約0.5ｍを測り，掘り方の断面は台形状を呈する。埋土はグライ化しているが，３層に分層できた。上層部は粘質土で炭化材を含み，以下，砂質土となり底面で湧水が認められる。出土遺物はコンテナ1/4箱程あり，埋土からは図化した景徳鎮窯系青花，瀬戸・美濃系陶器，備前系陶器，土師質土器，土錘等がある他，石組み裏土の出土遺物に須恵器甕がある。



第13図　SES2001平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

SES2001出土遺物（第13図参照）

35・36は景徳鎮窯系青花で，小坏及び皿。37は瀬戸・美濃系陶器で，鉄釉を施す折縁の皿。38・39は，土師質土器坏。40は，備前系陶器擂鉢の口縁部片。41は有溝土錘である。

SES2002（第14図参照）

南調査区東部南端，標高0.68ｍで検出した石組み井戸。南半部が未調査であるため詳細不明だが，掘り方の平面は，径２ｍ足らずの円形を呈するものと推定される。石組みは４段相当認められ，断面で底部へと緩やかに窄まるように，主に河原石を用い小口積みにしている。石材に花崗岩系のものも認められ，上２段に人頭大を超える大振りのものが用いられている。深度は約0.9ｍを測り，ほぼ底面より湧水が認められる。出土遺物はコンテナ1/4箱程あり，埋土からは図化した瓦の他，備前系陶器甕・鉢類の細片と，石組み裏上の出土遺物に備前系陶器瓶とみられる細片がある。

SES2002出土遺物（第14図参照）

42は丸瓦で，凹面にコビキ痕（コビキＢ）が残る。

SES2003（第14図参照）

南調査区中央部南端，標高0.21ｍで検出した素掘りの井戸状遺構。南半部が未調査であるため詳細不明だが，平面が径1.5ｍ足らずの円形を呈するものと推定される。深度は約0.７ｍを測り，断面は台形を呈する。埋土は３分割されるが，両肩部のものは他のグライ化したシルト質の埋土と明確に異なる砂礫であり，本来は石組み等，井側設置のための裏込め土層であった可能性も考えられる。湧水は最下層の上面付近で認められ，木質遺物，炭化物等有機物が多く含まれる。出土遺物はコンテナ1/4箱程あり，図化した備前系陶器，漆器の他，曲物，蓋，板材，瓦片がある。

SES2003出土遺物（第14図参照）

43は，備前系陶器大平鉢。口縁は内側に折れ，端部を丸く収める。Ｗ１は漆器椀。下地は黒塗りで表面は内外とも赤塗りである。

SES2004（第15図参照）

南調査区西部，標高0.74ｍで検出した石組み井戸。掘り方の平面は東西方向に1.8ｍ，南北方向に1.5ｍ程の隅丸方形を呈する。西よりに石組みが設置され，東部には段が付く。石組みは人頭大の河原石が１段相当で見られるのみだが，この下位に裏込め石とみられる拳大の礫が集中し，中央には曲物とみられる木質遺物が認められることから，基底においても井筒を固定する石組みが存在したものと考えられる。深度は検出面より約0.64ｍを測り，湧水は底面付近で認められる。出土遺物は少量で，図化したものの他，備前系陶器平鉢，土師質土器足釜等とみられる細片が埋土より出土している。

SES2004出土遺物（第15図参照）

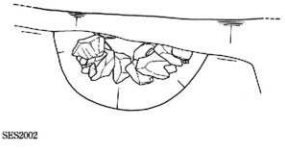
44・45は，青花碗・皿。44は，見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す。46は瀬戸・美濃系陶器で，天目碗の口縁部。鉄釉を施す。47は肥前系陶器で，絵唐津。48は備前系陶器で，擂鉢の口縁部。49は土師質土器擂鉢。50は平瓦。砂粒の多い胎土が用いられ，凸面に糸切り痕（コビキＡ）が残る。

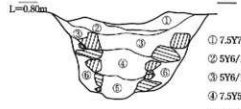
SES2005（第15図参照）

南調査区南西隅，標高0.44ｍで検出した石組み井戸。掘り方の平面は，未調査部分等のため詳細不明だが，1.3ｍ程の円形に見られる。石組みは基底部のみ残り，人頭大の河原石が円形に設置されている。この中央にはSES2004と同様，井筒とみられる木質遺物が遺存しており，湧水が認められる。出土遺物は少量で，図化したものの他，土師質土器擂鉢，内耳付鍋類等が埋土より出土している。

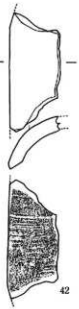
SES2005出土遺物（第15図参照）

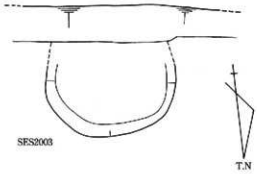
51は，土師質土器（焙烙）の把手部。基部は中空で，側面には焼成前に付けられた貫通孔をもつ。

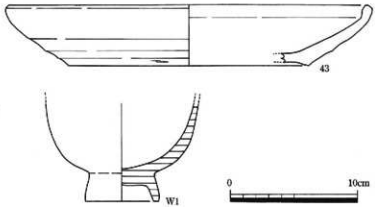


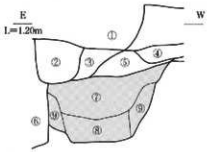


① 7.5Y7/2・5Y7/1灰白色シルト質細砂
② 5Y6/1灰色シルト質細砂（灰白色細砂を含む）
③ 5Y6/1灰色・5Y8/3淡黄色シルト質細砂（地山を塊状に含む）
④ 7.5Y5/1灰色シルト質極細砂
⑤ 5Y6/1灰色細砂+④
⑥ 5B5/1青灰色砂混じりシルト質粘土（拳大の安山岩・砂岩を含む）



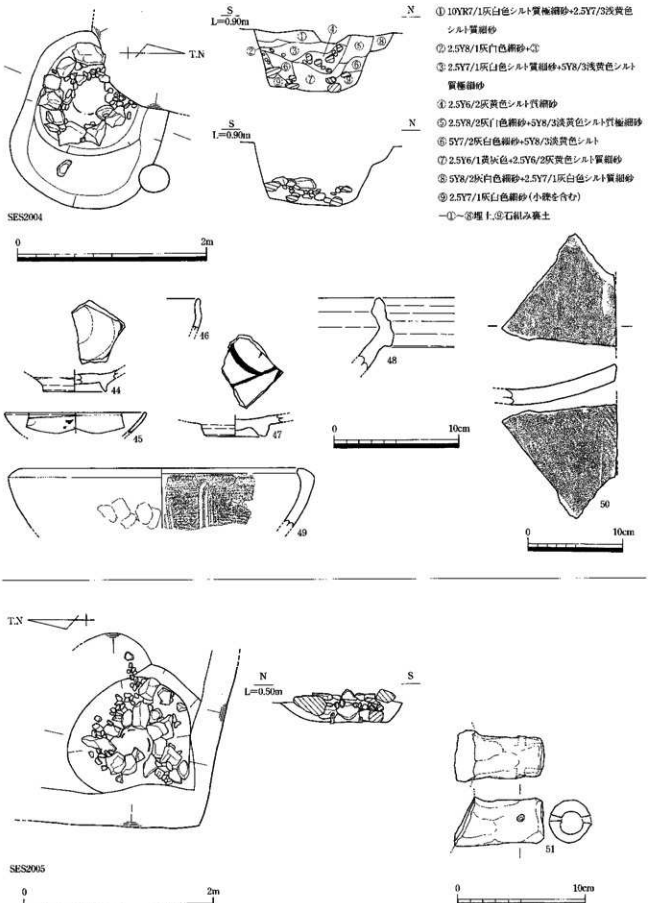






南調査区南壁土層図
① A層
② 2.5Y4/1黄灰色シルト（炭を若干含む，角礫混じる）－SKS1024埋土
③ 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質極細砂（炭を含む）－SKS1038埋土
④ 5Y6/3オリーブ黄色細砂（小円礫混じる）－SDS1003埋土
⑤ 2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土
⑥ 2.5Y3/1黒褐色砂混じりシルト質粘土（炭・有機物を含む）－SES1003埋土
⑦ 5B4/1暗灰色シルト質粘土
⑧ 5B6/1青灰色砂質シルト（炭・有機物・木質遺物を含む）
⑨ 5Y7/1灰白色砂礫
－⑦－⑧SES2003埋土

第14図　SES2002・2003平・断面図（1/40），出土遺物（1/3，1/4）



第15図　SES2004・2005平・断面図（1/40），出土遺物（1/3，1/4）

SKS2001（第16図参照）

南調査区東端部，標高0.89ｍで検出した土坑。平面については，東部が未確認だが，南北方向に1.08ｍ，東西方向に0.80ｍ以上の隅丸方形を呈するものと推定される。深度は0.25ｍを測り，断面は舟底形を呈する。埋土は，褐灰色系シルト質土の単層である。出土した遺物は少量だが，図化したような備前系陶器や土師質土器等がある。

SKS2001出土遺物（第16図参照）

52は備前系陶器で，擂鉢の口縁部片。53は土師質土器擂鉢。内面はハケ調整後，擂目を施す。

SKS2002（第16図参照）

南調査区南端部，標高0.73ｍで検出した土坑。南北方向に0.86ｍ，東西方向に0.50ｍの楕円形を呈し，深度は0.20ｍを測る。断面は舟底形を呈し，埋土は２分割される。出土した遺物は少量だが，図化したような青磁や土師質土器等がある。

SKS2002出土遺物（第16図参照）

54は龍泉窯系青磁碗で，外面に片彫りの蓮弁文，見込みに草花文を施す。高台内は，円形に釉を剥ぐ。55は土師質土器擂鉢。36と同様，内面にハケ目を残す。

SKS2010（第16図参照）

南調査区西端部，標高0.81ｍで検出した土坑。北部を欠くが，南北方向に0.92ｍ以上，東西方向に0.80ｍの隅丸方形を呈するものと推定される。深度は0.50ｍを測り，断面はＵ字形を呈する。埋土は褐灰色を呈し第２遺構面で検出しているが，SES2005に後出することや図化した遺物が17世紀中葉まで下る可能性があり，第２遺構面より後出する遺構と考えられる。

SKS2010出土遺物（第16図参照）

56は土師質土器皿。灰白色の胎土，底部には回転糸切り後の板状圧痕が残り，高松城編年（佐藤2003）では皿ＡＶ形式に相当する。

SPS2110・2143出土遺物（第16図参照）

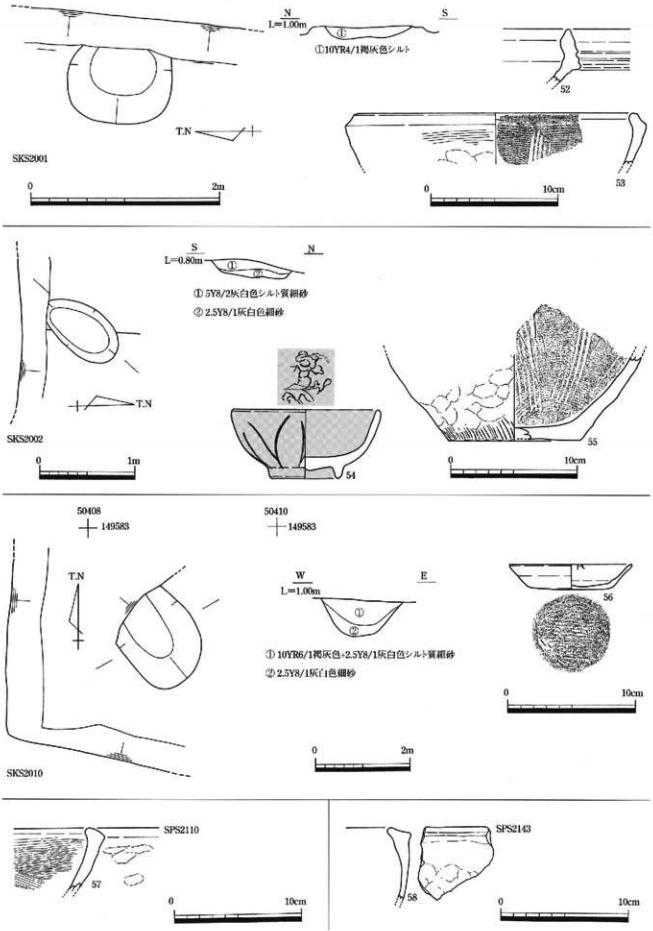
南調査区第２遺構面の柱穴より出土した遺物は少量に過ぎないが，瀬戸・美濃系陶器，備前系陶器，土師質土器，瓦器類等の細片が認められる。この内，器種の推定できるものでは，図化したような土師質土器擂鉢（57）・鍋（58）の類が多い。

SBS2001（第17図参照）

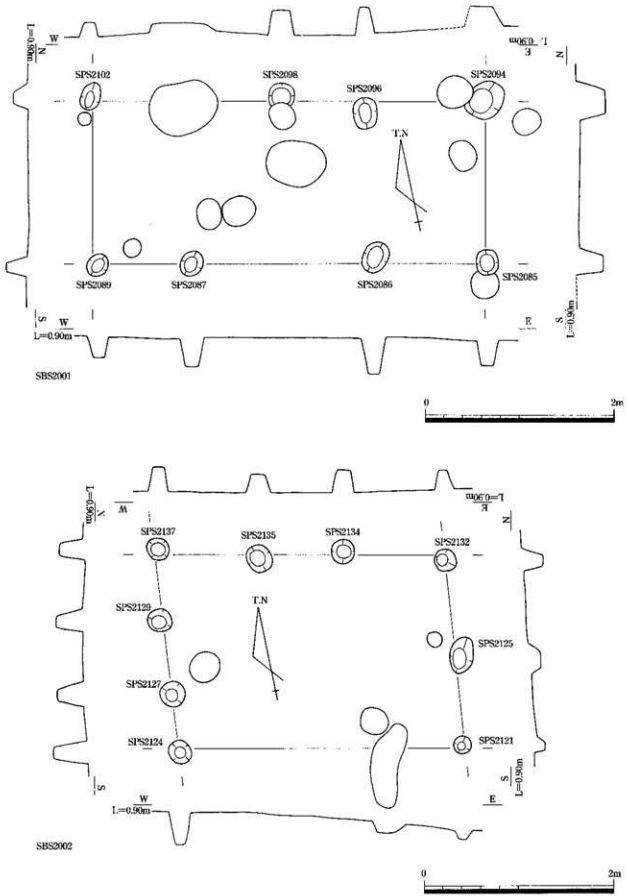
南調査区西部で検出した柱穴（SPS2102，2098，2096，2094，2085，2086，2087，2089）を用い，復元した掘立柱建物跡。１×３間（柱芯距離で桁行4.15ｍ，梁行1.74ｍ，面積7.221㎡）の側柱建物で，主軸はN-102°-Eの方位になる。柱穴は標高0.75～0.82ｍで，平面0.25～0.41ｍ前後の円形あるいは楕円形に検出されており，深度は0.15～0.39ｍを測る。桁行の柱間距離は不揃だが，概ね１ｍ前後を測り，南面の中央では２ｍとなる。出土遺物は少量の細片のみで，図化していないがSPS2094で平鉢とみられる備前系陶器他，SPS2086で土師質土器が出土している。

SBS2002（第17図参照）

南調査区西部で検出した柱穴（SPS2137，2135，2134，2132，2125，2121，2124，2127，2127，2129）を用い，復元した掘立柱建物跡。３×３間（柱芯距離で桁行3.05ｍ，梁行2.08ｍ，面積6.344㎡）の側柱建物で，主軸はN-12°-Eの方位になる。柱穴は標高0.65～0.83ｍで検出されており南東部で削平が大きいが，概ね平面0.25ｍ前後の円形で，深度0.25ｍ前後のものが多い。柱間距離は不揃だが柱筋はよく通り，建物の平面は平行四辺形を呈する。柱穴からの出土遺物は無い。



第16図　SKS2001・2002・2010平・断面図（1/40），出土遺物（1/3），SPS2110・2143出土遺物（1/3）



第17図　SBS2001・2002半・断面図（1/40）

SDS2001・SDN003（第18図参照）

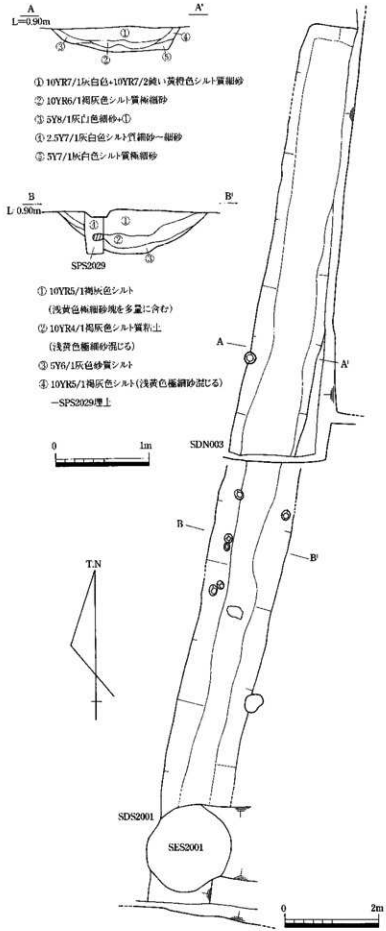
南調査区東部及び北調査区第１トレンチで，検出した溝。同一の溝であるが，調査区に応じ，南調査区ではSDS2001，北調査区ではSDN003の遺構番号で調査を行った。

検出高は標高0.84ｍで，幅1.6ｍ前後，深度0.4～0.5ｍの規模をもち，北と南調査区を合わせ，20ｍ以上にわたり確認した。N-12°-Eの方向で直線的に伸びており，北調査区の北部において止まるが，第１トレンチ東壁（第12図参照）の観察によると，溝埋土の北端部が台形状に落ち込むことから，L字に折れて東方向へと伸びることが推定される。一方，排水の方向は明瞭でないが，底面の状況については屈曲部となる北端でやや深くなり，これ以南では標高0.34～0.44mの高低差で，緩やかではあるが地形とは逆方向の南へと下っている。溝の断面は台形を呈し，埋土の大半部で，地山が塊状に混じることから，人為的に埋め戻されたことが窺われる。出土遺物は，総じて少なく，図化したような平瓦が中心でコンテナ１箱にも満たない。また中世土器の細片も含まれているが，明確な時期を示すものに欠ける。

SDS2001・SDN003出土遺物（第19図参照）

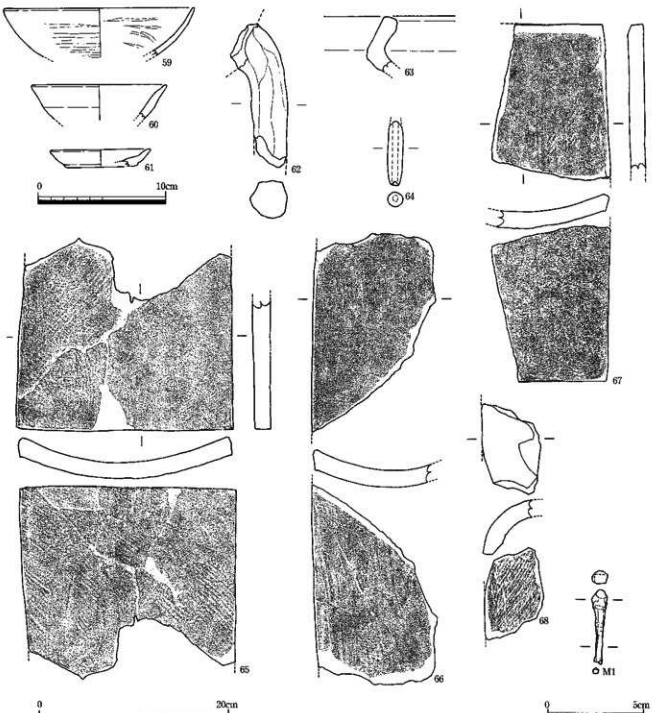
67・68がSDS2001の出土遺物で，これ以外は，SDN003の出土遺物である。

59は，十瓶山産とみられる黒色土器椀。外面にはヘラケズリ後，回転方向のヘラ磨きを加えている。60は備前系陶器の坏。この種の坏は，近隣に位置する片原町遺跡でまとまって認められ，出土した遺構SD01についても当SDS2001・SDN003と同様の規模をもって確認されている。61は土師質土器皿で，短く外傾するL1縁部をもつ。62は，土師質土器鍋類の脚部。63は土師質土器で，甕のL1縁部片。64は管状土錘。65～67は，平瓦。何れも砂粒を多く含む胎土で，凸面を中心に糸切り痕（コビキA）が残る。65は凹面，凸面ともに糸切りによる切り離し痕が認められる。凸面は無調整，凹面には



第18図　SDS2001・SDN003平・断面図（1/80，1/40）

ナデ調整を施す。66は凸面に糸切り痕，凹面には布目状の圧痕が残る。67も凸面に糸切り痕が残り，凹面はナデ調整を施す。68は丸瓦の細片で，凹面に糸切り痕が認められる。M1は，鉄釘である。



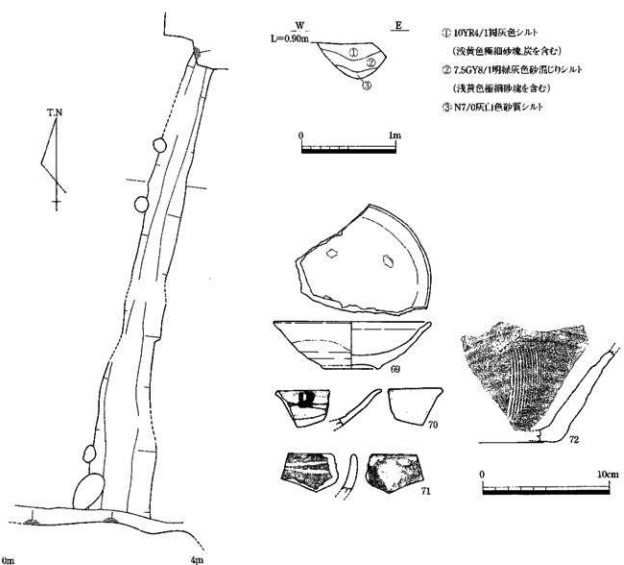
第19図　SDS2001・SDN003出土遺物（1/3，1/4，1/2）

SDS2002（第20図参照）

南調査区中央部で検出した溝状遺構。検出高は標高0.74ｍで，幅1.3ｍ，深度0.3ｍ前後の規模をもつ。検出長は約9.6ｍにわたり，N-12°-Eの方向を直進して認められる。底面は標高0.33～0.43ｍを測り，北方向へと下る。断面は台形，あるいはU字形を呈しており，埋土については上部で地山を塊状に含む褐灰色シルト，下部では灰白色を呈する砂質になって認められる。出土遺物は少量で，図化した肥前系陶器Ⅲ，瀬戸・美濃系陶器，備前系陶器擂鉢の他，土師質土器足釜脚部，瓦片がある。所属時期については，後述のように第１面からの窪みの下端に位置し，17世紀中葉までの所産となるSDS1004の底面に取り付いて認められる（第21図参照）が，出土遺物から当該期，17世紀初頭に埋没する遺構と考えられる。

SDS2002出土遺物（第20図参照）

69は，肥前系陶器Ⅲ。口縁が僅かに外傾し，灰釉を施すもの。見込みには，胎土目が残る。70も肥前系陶器で，絵唐津の細片。白色釉（藁灰釉か）を施す。71は瀬戸・美濃系陶器で，鼠志野釉付とみられる細片。鼠色に発色した化粧土と，白色を呈する掻き落しによる下地文様が認められる。72は備前系陶器の擂鉢体部で，斜め方向の擂目をもつ。



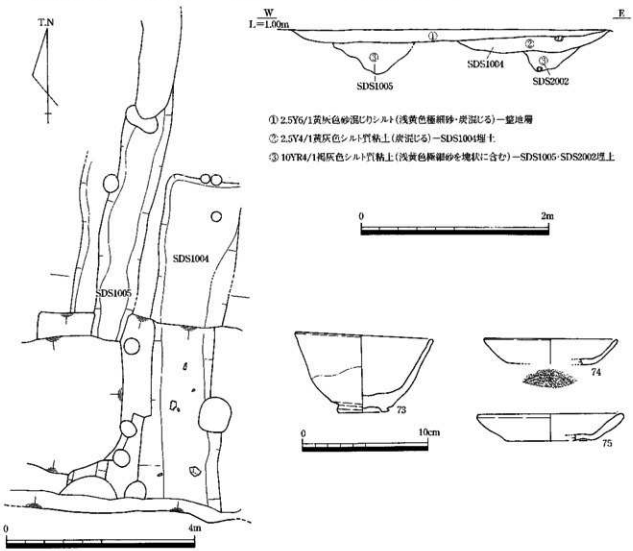
第20図　SDS2002半・断面図（1/80，1/40），出土遺物（1/3）

第6節　南調査区第1面の遺構・遺物（第9・21～50図参照）

確認した遺構に井戸（SES1001～1003），土坑（SKS1001～1040），柱穴（SPS1001～1209），溝状遺構（SDS1001～1008），性格不明遺構（SXS1001）がある。調査区の中央部では，敷地の境を示すと考えられる南北方向の溝状遺構（SDS1002～1005）を認め，これに後出する時期には，北調査区より延びる南北方向の柵列（SAN002）を構成する柱穴群を確認した。この境より東側では大型の性格不明遺構（SXS1001），井戸（SES1001）の他，多数の土坑，柱穴を確認し，柱穴群から掘立柱建物跡（SBS1001）を復元した。一方，境より西側では遺構の密度は希薄で，出土遺物についても総じて少ない。所属時期については第2面から17世紀前葉以降で，各遺構の出土遺物から大概では19世紀中葉の廃絶時期が考えられる。

SDS1004（第21図参照）

南調査区中央部で検出した溝状遺構。後述する整地（第22図参照）の下位に存在するもので，且つSDS2002より後出する。検出高は標高0.88mで，幅1.7m，深度0.3m前後の規模をもつ。検出長は約6.8mにわたり，N-8°-Eの方向でほぼ直線的に認められるが，北方向へ延びず途切れる。東へと折れL字形，あるいは鍵状に延びる可能性があるが，北端の東肩部以東をSXS1001に壊されており明確ではない。底面は標高0.51～0.66mを測り，南方向へと下る。断面は舟底形を呈しており，埋土は黄灰色シルト質粘土の単層である。出土遺物は少量で，図化した肥前系陶器碗，土師質土器皿の他，備前系陶器擂鉢，土師質土器足釜脚部，瓦片の細片がある。所属時期は，これらの出土遺物に加えて，前後関係のある遺構及び整地から17世紀前半の所産と考えられる。



第21図　SDS1004・1005半・断面図（1/80，1/40），SDS1004出土遺物（1/3）

SDS1004出土遺物（第21図参照）

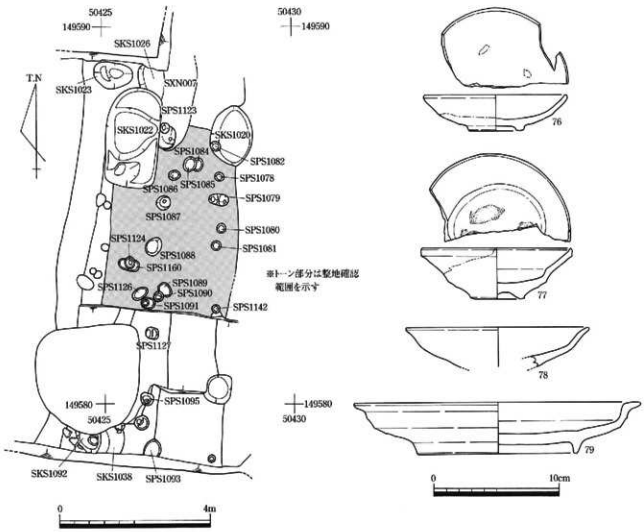
73は肥前系陶器で，灰釉の碗。74・75は土師質土器皿。74は灰白色の胎土をもち，底部に回転糸切り痕及び板状圧痕が認められるもので，高松城編年（佐藤2003）の皿ＡＶ形式に相当する。75は橙色の胎土で，肥厚した口縁を持つ。

SDS1005（第21図参照）

調査区中央部で検出した溝状遺構で，後述する整地（第22図参照）の下位に存在することから，第２面と同様の砂堆上面で確認した。検出高は標高0.80ｍで，幅1ｍ，深度0.36ｍ前後の規模をもつ。検出長は約7.7ｍにわたり，N-10°-E前後の方向でほぼ直線的に認められるが，北端をSXN007，南端部をSES1003に壊される。底面は標高0.48～0.57ｍを測り，南方向へと下る。断面は台形を呈しており，埋土は地山を塊状に含んだ褐灰色シルトの単層。出土遺物は，土師質土器鍋の細片のみである。所属時期については，上位に堆積する整地から17世紀中葉以前となるが，併走する位置関係にあり，断面の形状及び埋土が類似するSDS2002と同時期の所産と想定される。

南調査区中央部整地（第22図参照）

溝状遺構が集中する南調査区中央部の落込みを覆う整地で，SDS1004・1005を被覆する。東及び南部は後出する遺構SXS1001等や撹乱層によって判然としないが，落ち込みは溝状遺構と同様，南北方向に認められ，北に向かって浅くなり途切れ，東西方向の断面形態では舟底形を呈する。落込みを覆う整地はSDS1004の埋土に類似す



第22図　南調査区中央部平面図（1/100），出土遺物（1/3）

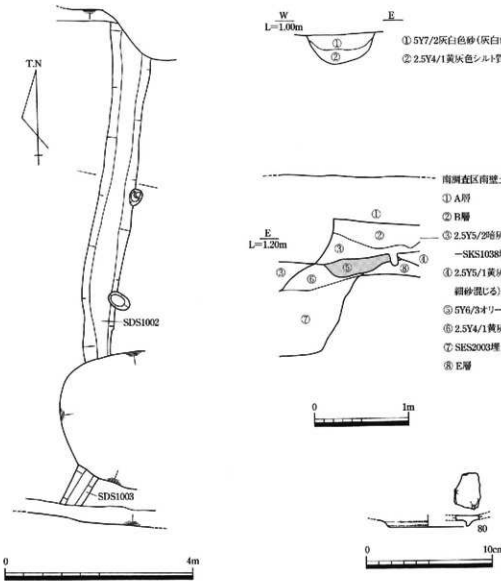
るが，砂堆の地山を塊状に含み，砂質が強くなっている。当整地の上面で確認できる遺構として，後述するSKS1020・1022，SXN007の他，敷地の境となるSAN002を構成するSPS1087・1088・1091・1123等の柱穴がある。出土遺物はコンテナ1/2程度あり，図化したものの他，肥前系陶器，土師質土器の細片等があるが，SDS1004の出土遺物を考慮し17世紀中葉までの所産と考えられる。

南調査区中央部整地出土遺物（第22図参照）

76～78は肥前系陶器で，灰釉皿。76は見込みに胎土目，77は砂目痕が認められる。79は瀬戸・美濃系陶器で，長石釉の皿。体部は中位で屈曲し，口縁は折縁となる。全面に施釉され，貫入が著しい。

SDS1002・1003（第23図参照）

調査区中央部で検出した溝状遺構。SDS1002は検出高が標高0.91mで，幅0.8m，深度0.25m前後の規模で，検出長は約7.2mにわたり，N-10°-E前後の方向で直進する。SDS1003は検出高が標高0.93mで，幅0.5m，深度0.25m前後を測り，N-32°-E前後の方向を示す。両遺構の間に撹乱坑があることと，方位が大きく異なることから別の遺構番号で調査を行ったが，平面の対応関係を見る限りでは，同一の溝が屈曲したものと考えられる。底面は標高0.61～0.69mを測り，北方向へと下る。断面はU字形，あるいは台形を呈しており，埋土はSDS1002・1003でやや異なり，SDS1002の上層及びSDS1003では砂土が充填し，底部が低くなるSDS1002の下層ではシルト質粘土の堆



第23図　SDS1002・1003平・断面図（1/80，1/40），SDS1003出土遺物（1/3）

積が認められる。出土遺物は，SDS1002・1003共に少量で青花，土師質土器細片，瓦片のみである。所属時期については，出土遺物に加えて，SDS1002がSES1002に先行し，SDS1003がSES2003に後出する前後関係から，概ね17世紀前半を中心とした時期が考えられる。

SDS1003出土遺物（第23図参照）

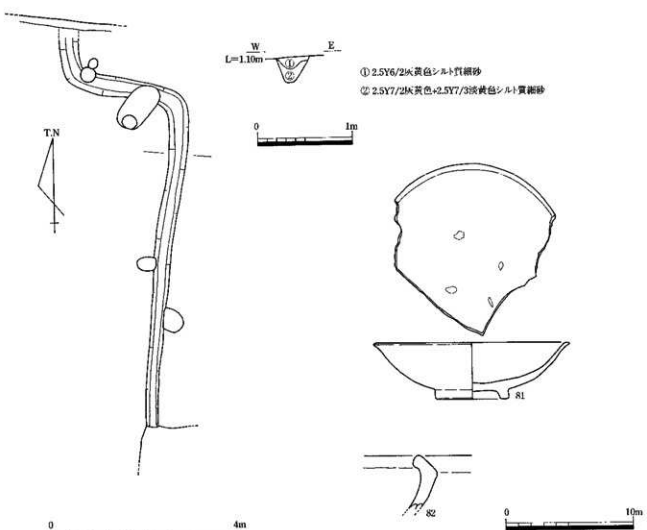
80はSDS1003の出土遺物で，青花皿の底部。畳付に砂粒が熔着する。

SDS1001（第24図参照）

調査区東部で検出した溝状遺構。検出高は標高1.05mで，幅0.41m，深度0.3m前後の規模をもつ。検出長は約8.3mにわたり，N-6°-E前後の方位を直進するが，北部が鍵状に折れる。底面は標高0.70～0.78mを測り，南方向へと下る。断面はU字形を呈し，埋土は基本的にシルト質細砂で充填される。出土遺物はコンテナ1/4程度で，図化したものの他に肥前系磁器青磁・瑠璃釉碗，肥前系陶器碗，瀬戸・美濃系陶器皿，土師質土器足釜脚部がある。所属時期については，後出するSKS1016及び出土遺物から17世紀後半を中心とした時期が考えられる。

SDS1001出土遺物（第24図参照）

81は肥前系陶器の灰釉皿で，見込みに胎土目が4箇所残る。施釉は高台内を含む全面に及び，器面の貫入が目立つ。82は土師質土器で，鍋類の口縁部である。



第24図　SDS1001平・断面図（1/80，1/40），出土遺物（1/3）

SDS1006（第25図参照）

調査区西端部で検出した溝状遺構。検出高は標高1.05ｍで，幅0.50～1.22ｍ，深度0.21ｍ前後の規模をもつ。検出長は約3.48ｍで，N-3°-W前後の方位を示す。底面は標高0.84～0.93ｍ，南方向へと下り，南端で幅広になり水溜り状を呈する。断面は舟底形で，埋土はシルト質細砂で充填される。出土遺物はコンテナ1/4程度で，図化したように中世土器片が占めるが，所属時期は検出高と調査区西壁に見える層序より，17世紀中葉以降で19世紀中葉までの所産と考えられる。

SDS1006出土遺物（第25図参照）

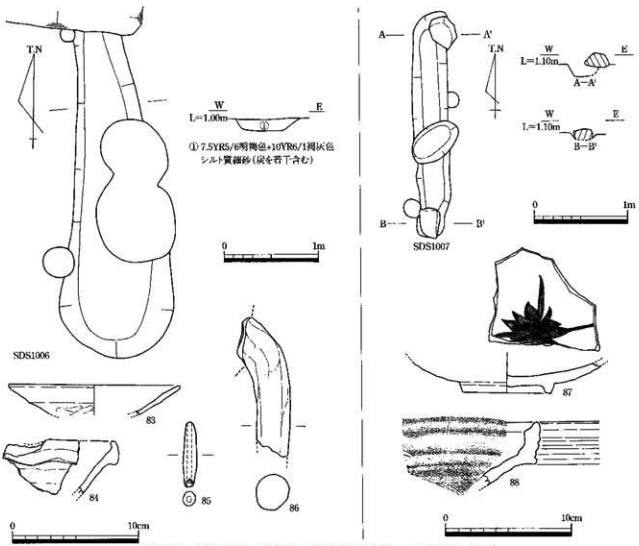
83は，京系土師質土器皿。口縁は大きく開き，体部外面に押圧痕が残る。84は東播系須恵質土器で，片口付の鉢。口縁の外面に重ね焼痕が残る。85は管状土錘。86は土師質土器足釜の脚部である。

SDS1007（第25図参照）

調査区西端部で検出した溝状遺構。検出高は標高1.08ｍで，幅0.38ｍ，深度0.13ｍ前後の規模をもつ。検出長は約2.38ｍで，N-1°-W前後の方位を示す。溝両端部において，人頭大の扁平な石が設置されていたと判断でき，その間隔が1間分に相当することから建物等の構造物の基礎と考えられる。出土遺物は少量で，図化した肥前系陶器皿，備前系陶器擂鉢がある。所属時期については，検出高と調査区西壁に見える層序より17世紀中葉以降で19世紀中葉までの所産と考えられる。

SDS1007出土遺物（第25図参照）

87は肥前系陶器で，絵唐津。88は備前系陶器擂鉢である。



第25図　SDS1006，1007平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

SXS1001（第26図参照）

調査区中央部で検出した大型の性格不明遺構。検出高は標高0.98mで，幅4.96m，深度1m前後の規模をもつ。検出長は約9.9mを測り，北端はSDS1008と繋がり南部は調査区外へと延びるもので，平面は南北方向，N-6°-E前後の方位で直進する。底面は標高-0.08～-0.00mを測り，中央部から北方向へとやや下り気味になっている。断面は東西方向で台形を呈し，南北方向ではSDS1008に接して段が付く。土層の堆積状況から東西方向では，東からの埋没が先行し，南北方向ではSDS1008から連続する堆積層が認められ，同満及び北方向からの堆積により充填されている。更に，埋土は灰黄色系の細砂～シルト質細砂を基本とするが，南北方向の土層では湧水を得る下部のみならず中位までに複数の泥炭層が認められる。埋没過程において暫時滞水した状況であった可能性も考えられ，遺存する遺構の標高からの検証は不可能ではあるが，SDS1008からの排水が埋没に大きく影響したことが想定される。遺物の取り上げについては東西方向の断面土層A－A´により，中位の泥炭層部を中層とし，これより上位を上層，下位を下層，最下位の灰色粘質土層を最下層とし，他の区間においてもこの標高を基準としたため，結果，南北方向に大きく異なる層序により厳密さに欠ける結果となった。出土遺物量は上層でコンテナ10箱，中層でコンテナ1/2箱，下層でコンテナ3箱，最下層では皆無となっている。遺物の時期は17世紀～19世紀中葉までのものが認められるが。下層出土のもので若干数を除けば17世紀中葉にまとまること，SDS1008がこの時期より埋没が始まると考えられることから，当該期より存在していた可能性がある。但し，17世紀中葉～19世紀中葉といった存続時期ついては，確認した状況では砂堆を基盤とした素掘りのものであることから，その維持・管理の点から疑問も残る。

SXS1001出土遺物（第26～30図参照）

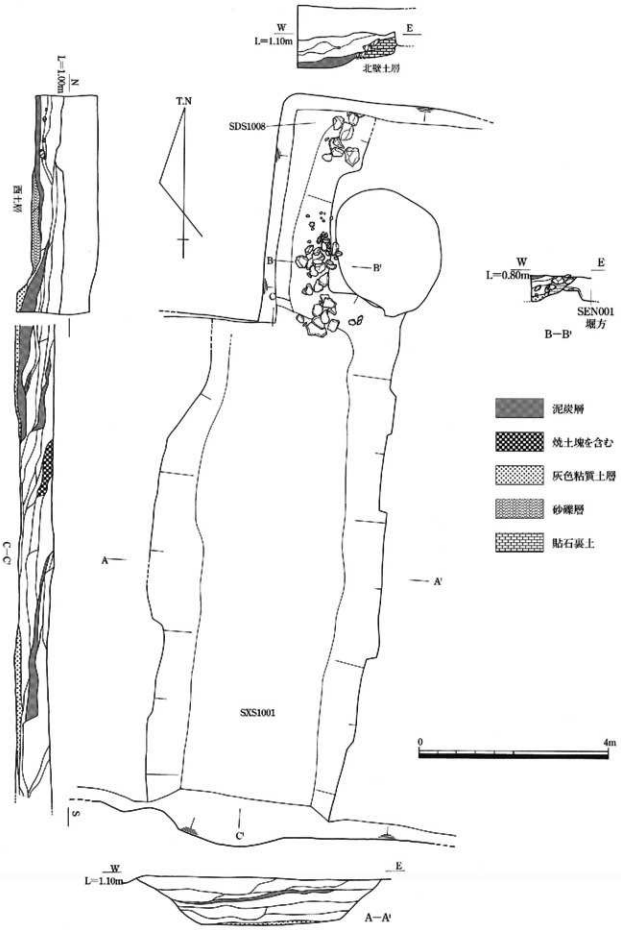
89～96，W1～5，S1は下層の出土遺物である。図化したものの他に，板材，加工木といった木質遺物を中心に，瀬戸・美濃系陶器志野，備前系陶器擂鉢，土師質土器皿，茶釜，骨片等がある。

89は肥前系磁器で，高台無釉の小坏。90は，肥前系磁器皿。91は肥前系陶器で，溝縁皿。92も肥前系陶器で，鉄絵の皿。見込みに砂目痕が残る。93も肥前系陶器で，二彩手の皿。斜縁釉と鉄釉で松を描く。94は瀬戸・美濃系陶器で，植木鉢。95は土師質土器皿。胎土は灰白色を呈し，高松城編年（佐藤2003）の皿AV形式に相当する器形のもの。96は土師質土器擂鉢。W2・3は，漆器椀。W2は，内外面が赤塗りのもので，外面に引掻き技法による加飾を施す。W3は内面が赤，外面は黒塗りのもの。W4は，荷札とみられる木簡。板材の下半部を尖らせたもので，片面には「[石州阿立]」の墨書が残る。W5は，一木造りで丸型の連歯下駄。W6は差歯下駄の一部とみられる部材で，表裏面にハート型と楕円形の焼印が認められる。S1は砥石。

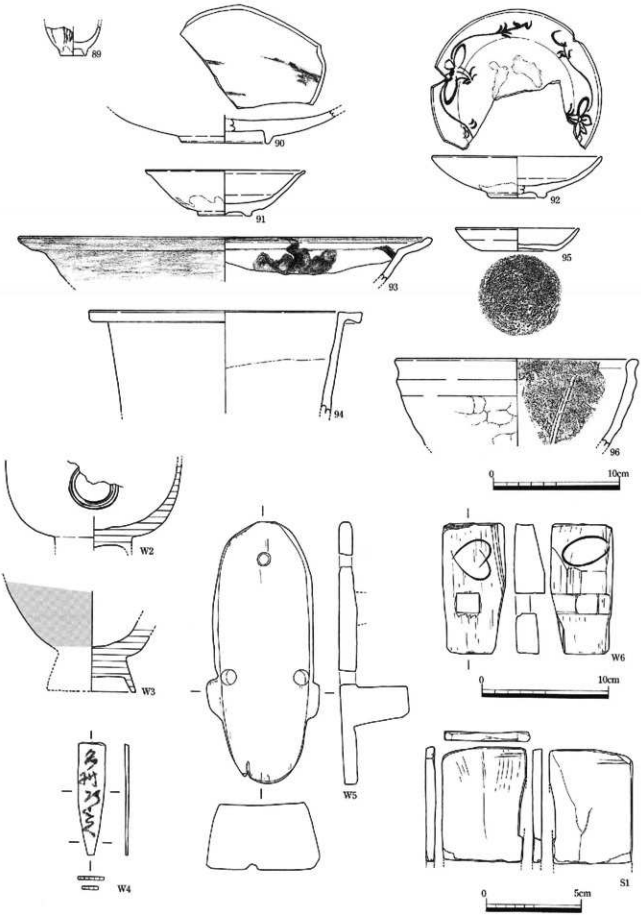
97・98は，中層の出土遺物である。図化したものの他に，肥前系磁器碗・皿，肥前系陶器碗・鉢，土師質土器，瓦片，鉄滓がある。97は瀬戸・美濃系陶器壺で，鉄釉を施す。98は施釉陶器（富田・理兵衛焼か）土瓶で，底部には墨書が認められる。

99～133，M2は，上層の出土遺物である。図化したものの他に，漳州窯系赤絵，龍泉窯系青磁細片，肥前系磁器紅猪口・瓶，肥前系陶器碗，京・信楽系色絵碗・鉢・灯明皿，備前系陶器擂鉢，軟質施釉陶器鉢・土瓶・鍋，焼締陶器甕，土師質土器皿・鍋・甕・火鉢・焙烙・茶釜，羽口，瓦等がある。

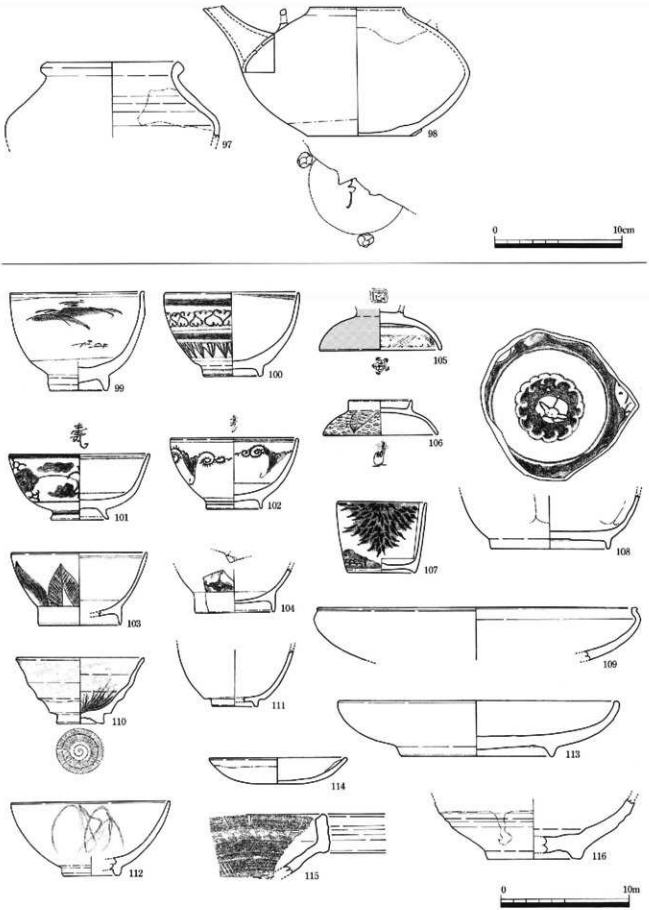
99～104は肥前系磁器碗。99・100・102は丸碗。101は，高台が撥形に開く。102と共に「寿」の見込み文様をもつ。103・104は広東碗。105は肥前系磁器で，青磁染付碗蓋。天井部に手書きの五弁花と摘みの内面に二重枠に崩れ渦福が認められる。106は肥前系磁器で，広東碗蓋。107は肥前系磁器で，猪口。108は肥前系磁器皿。型打ち成形のもので，蛇ノ目凹形高台をもつ。109は肥前系の白磁，あるいは色絵素地の鉢で如意状の口縁をもつ。110は，施釉陶器（富田・理兵衛焼か）碗。平杉形のもので，白色釉に鉄釉を重ねる。111は京・信楽系陶器で，小杉碗。112は瀬戸・美濃系陶器で，柳茶碗。113は瀬戸・美濃系陶器皿。釉は浅黄色を呈し，高台内は無釉でケズリ調整が認められる。114は京・信楽系陶器で，灯明皿。口縁部の内側にボタン状の貼花をもつ。115は備前系陶器擂鉢。116は，肥前系陶器壺の底部。117は，施釉陶器（富田・理兵衛焼か）鉢。内外面に白色釉を施し，高台無釉。見込みに目跡が残る。118・119は肥前系陶器皿で，絵唐津。119は，見込みに砂目痕が残る。120は肥前系陶器で，



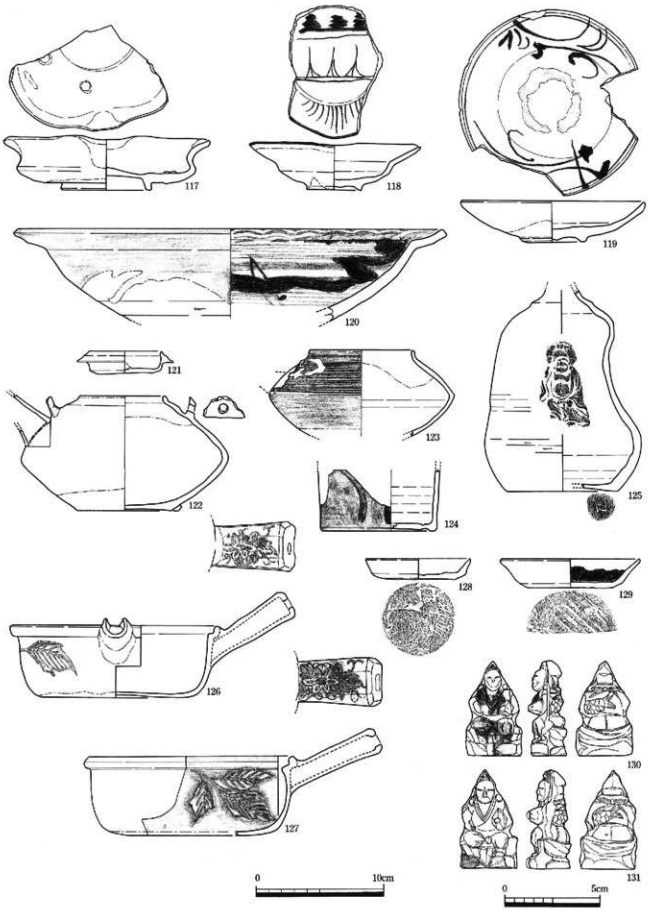
第26図　SXS1001，SDS1008平・断面図（1/80）



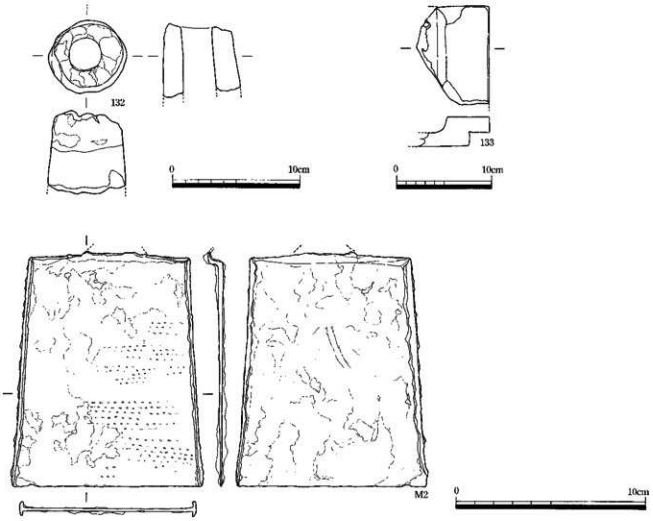
第27図　SXS1001下層出土遺物（1/3、1/2）



第28図　SXS1001中層・上層出土遺物（1/3）



第29図　SXS1001上層出土遺物（1/3，1/2）

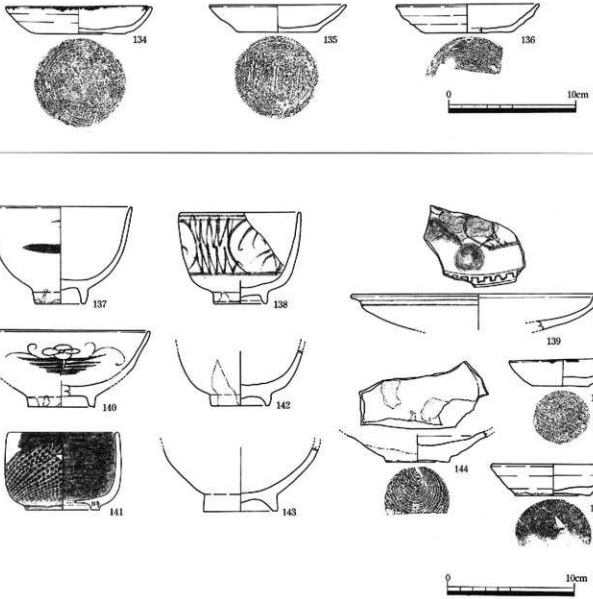


第30図　SXS1001上層出土遺物（1/3，1/4，1/2）

二彩手の皿。白土による刷毛目装飾を施す。121・122は施釉陶器（富田・埋兵衛焼か？）で，鉄釉を施す土瓶・蓋。123も施釉陶器（富田・埋兵衛焼か）土瓶で，体部にイッチン描きの施文が認められる。124は，軟質施釉陶器瓶底部。黄・緑・褐色の三彩を施す。125は備前系陶器で，人形徳利。塗土を施し，底部に刻印をもつ。126・127は施釉陶器で，行平鍋。陽刻文及び緑・黄釉を施す。128・129は，土師質土器皿。128は底部に回転糸切り痕を残し，胎土は浅黄橙色を呈する。高松城編年（佐藤2003）の皿ＡⅢあるいはⅥ形式に相当する器形。129は底部に回転糸切り痕と板目状圧痕を残し，高松城編年（佐藤2003）の皿ＡⅤ形式に相当する。内面に墨もしくは煤の付着が認められる。130・131は軟質施釉陶器で，型合わせの恵比寿人形。132は，鞴の羽口。先端に被熱，熔着痕が認められる。133は桟瓦。釘穴が認められる。Ｍ２は金属製品で，鉚金である。

SDS1008（第26図参照）

調査区中央部でSXS1001に付随して検出した溝状遺構。検出高は標高0.75ｍで，深度0.5ｍ前後で確認した。検出長は約４ｍ，検出幅は1.7ｍ前後を測り，N-6°-E前後の方位で直進する。底面は標高0.08～0.25ｍを測り，南方向のSXS1001へと下る。東肩部及びSXS1001と繋がる北面に人頭大の河原石が散在しており，土層断面で裏込め土層を確認できることから，貼石あるいは石組みを伴っていたと考えられる。断面は台形を呈するものと推定され，南北方向ではSXS1001に接して段が付く。土層の堆積状況は，SDS1001から連続する灰黄色系の細砂～シルト質細砂及び泥炭層が認められ，その下位は泥炭層，砂礫層となっている。遺物の取り上げは，下位の泥炭層以下を下



第31図　SDS1008下層・上層出土遺物（1/3）

層とし，これより上位を上層とした。出土遺物はコンテナ1/2箱程度の主に上層部からのもので，図化したものの他，肥前系磁器皿，瀬戸・美濃系陶器天目碗，土師質土器鍋・足釜・焼塩壺の細片，種等が認められる。所属時期は，先行するSEN001及び下層の出土遺物から17世紀中葉以降の所産で，SXS1001と同時期となる19世紀中葉の埋没時期が考えられる。

SDS1008出土遺物（第31図参照）

134～136は下層出土遺物で，土師質土器皿。何れも灰白色の胎土で，高松城編年（佐藤2003）のⅢＡⅤ形式に相当する器形をもつ。

137～146は，上層の出土遺物である。137・138は肥前系磁器碗で，高台内が無釉のもの。139は肥前系磁器皿で，鋼状の折縁口縁のもの。140は陶質の平碗で，白化粧の上に呉須の絵付けを施す。141は，施釉陶器（富田・理兵衛焼か）碗。体部は飛鉋により施文し，鉄釉に灰釉を重ねる。142・143は，肥前系陶器碗。144は，肥前系陶器の灰釉皿。底部に回転糸切り痕，見込みに砂目痕が残る。145・146は，土師質土器皿。145は灰白色を呈する胎土をもち，底部に静止糸切り痕を残す。146は鈍い橙色を呈する胎土をもち，底部に回転糸切り痕を残すもので，高松

城編年（佐藤2003）のⅢＡⅢ形式に相当する。

SES1001・SKS1007（第32図参照）

南調査区東端部，標高0.95ｍで検出した井戸。掘り方は，平面で径2.4～2.7ｍ程の円形を呈し，断面は台形で深度1.2ｍ以上を測る。東面で隅丸方形を呈するSKS1007が付随して認められ，東壁は井戸の中央部へ向かって階段状に落ち込む。中央部の底面付近では，上師質製の井側が遺存しており，井側の内側で湧水が認められる。埋土は，黄色粘土を塊状に含む灰色シルトである。SES1001の出土遺物はコンテナ1/2箱程度で，図化した他に瀬戸・美濃系磁器端反碗，瀬戸・美濃系陶器水甕，備前系陶器擂鉢，堺・明石系陶器擂鉢，軟質施釉陶器瓶，土師質土器皿，木質遺物の細片がある。SKS1007については少量で，図化した他には土師質土器，須恵器細片のみである。所属時期は，出土遺物より19世紀中葉と考えられる。

SES1001・SKS1007出土遺物（第32図参照）

147～152は，SES1001の出土遺物である。147は肥前系磁器で，端反碗。148は肥前系磁器皿。高台内に「乾」の銘款をもつ。149は京・信楽系陶器で，端反碗。150・151は備前系陶器で，灯明皿及び受皿。152は，土師質製の井側口縁部。外面にタガ状の押圧文を施す。

153はSKS1007の出土遺物で，肥前系磁器皿。型打ち成形のもので，高さのある蛇ノ目凹型高台をもつ。

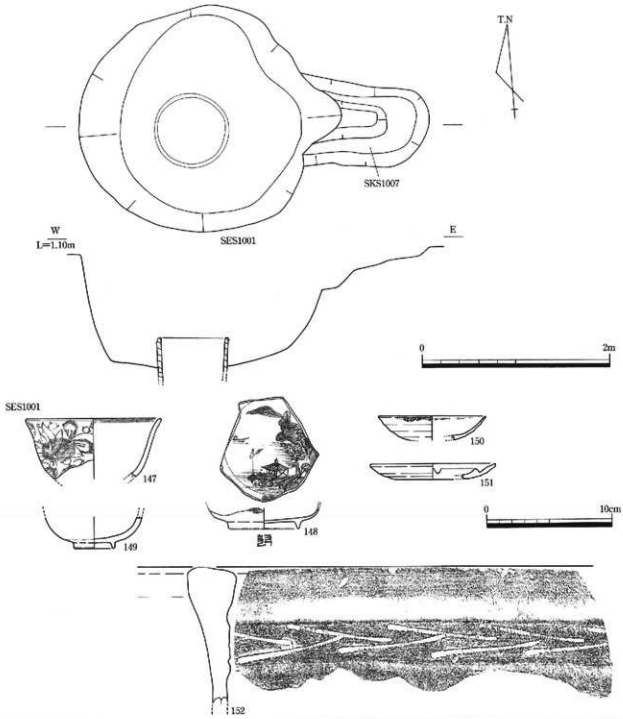
SES1002（第33図参照）

南調査区中央部北端，標高0.86ｍで検出した井戸。掘り方は，平面で径2.4ｍ前後の円形を呈し，断面は中位に段が付く台形で深度約1.4ｍを測る。中央部で桶製の井側が一段相当遺存しており，井側の内側で湧水が認められる。井側内の出土遺物はコンテナ４箱程度で，図化した他に肥前系磁器碗・皿・瓶，京・信楽系陶器碗，備前系陶器瓶・擂鉢，堺・明石系陶器擂鉢，土師質土器皿，瓦片，桶材，加工木，自然木等がある。掘り方の出土遺物は少量で，図化した他は瓦片のみである。所属時期は出土遺物から，17世紀中葉以降の所産で18世紀前半に廃棄されたと考えられる。

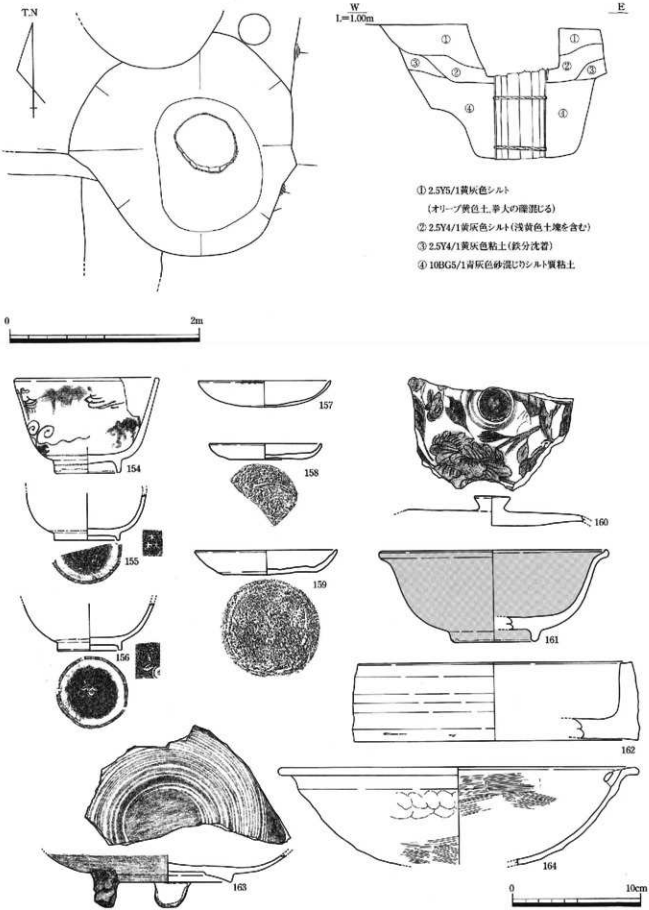
SES1002出土遺物（第33・34図参照）

154～165，Ｗ７，Ｓ２～４は，井側内の出土遺物である。154は肥前系陶器で，陶胎染付の碗。器面の貫入が著しい。155は肥前系陶器で，京焼風陶器碗。高台内に「森」の刻印が認められる。156は京・信楽系陶器碗で，高台内に「清水」の刻印をもつ。157は備前系陶器で，灯明皿。内面から外面上半部に塗土を施し，底部には回転ヘラケズリ痕が認められる。158・159は，土師質土器皿。158は鈍い橙色の胎土をもち，底部に回転糸切り痕を残す。高松城編年（佐藤2003）のⅢＡⅤ形式に相当する器形。159は灰白色の胎土をもち，底部に回転糸切り痕，板目状圧痕を残す。高松城編年（佐藤2003）のⅢＡⅥ形式に相当する器形。160は肥前系磁器の蓋で，牡丹の絵を染付けている。161は肥前系磁器で，青磁鉢。162は備前系陶器鉢。163は施釉陶器で，鉢の底部。灰釉を施し，見込みには白土による刷毛目装飾が認められる。蛇ノ目凹型高台になる底部は無釉で，畝面をあしらった脚が付いている。164は土師質土器焼焔で，貫通する内耳をもつ。体部の外面上半に横ナデあるいは横方向に連続する指押さえ，下半には粗いハケの調整痕が認められる。内面は上半にハケの調整痕が残る。165は備前系陶器甕。体部の幟幅口が顕著で，上端部に環状の貼花をもつ。口縁に向け内傾し，端部は内外に拡張している。器面は灰赤色に焼き締まる。Ｗ７は，荷札とみられる木簡。上部に左右の抉りをもち，下部には釘あるいは紐穴とみられる穿孔が４箇所認められる。両面に墨書が見られるが，何れも判読しがたい。Ｓ２～４は石製品で，硯。何れも破損が著しいが，Ｓ４の硯背には「龍腦麝香　南都油煙」の刻書が認められる。墨についての産地（奈良の地名），原料，香料を記したものと考えられる。

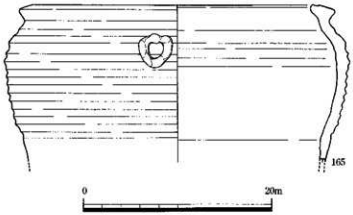
166～170は，掘り方の出土遺物である。166は肥前系磁器で，筒形の碗。167は肥前系陶器で，灰釉の皿。見込みに砂目痕が残る。168は瀬戸・美濃系陶器で，志野向付。169は土師質土器皿。底部は磨滅しており切り離し法は不明だが，灰白色の胎土で高松城編年（佐藤2003）のⅢＡⅤ形式に相当する器形をもつ。170は土師質土器で，内耳付鍋である。

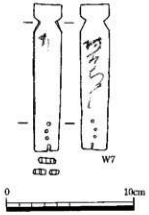


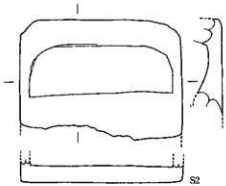
第32図　SES1001，SKS1007半・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

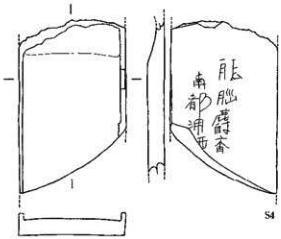


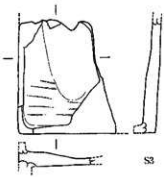
第33図　SES1002半・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

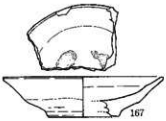


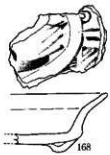


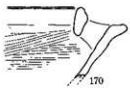








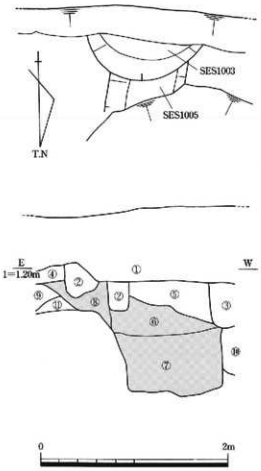




第34図　SES1002出土遺物（1/3，1/4，1/2）

SES1003（第33図参照）

南調査区中央部南端，標高0.73ｍで検出した井戸状遺構。確認できた範囲は少ないが，平面が径1.2ｍ程の円形を呈するものと推定される。断面は台形を呈し，埋土は上位に地山を塊状に含んだ黄灰色シルト質粘土，下位には炭・有機物を含んだ黒褐色シルト質粘土が堆積している。また調査区南壁の土層観察から，東面の上位に段が付く可能性も考えられる。深度は検出面からで約0.9ｍを測り，下層部では湧水を確認できる。また複数の遺構とに前後関係が認められ，SDS1005，SES2003より後出し，SKS1038より先行している。出土遺物は少量で，青花，肥前系磁器Ⅲ，備前系陶器瓶の細片，及び加工木，白木箸，瓦片がある。所属時期については出土遺物，及びD層より後出する点や遺構の重複関係から17世紀中葉を中心に考えられる。



南調査区南壁土層図
① A層
② 2.5Y4/1黄灰色シルト（炭を若干含む,礫混じる）
③ SKS1024埋土
④ B層
⑤ SKS1038埋土
⑥ 2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土（浅黄色斑細砂塊を含む）
⑦ 2.5Y3/1黒褐色砂混じりシルト質粘土（炭・有機物を含む）
⑧ 2.5Y4/1黄灰色砂混じりシルト（オリーブ黄色土混じる,炭を若干含む）
⑨～⑧－SES1003埋土
⑩ D層
⑪ SES2003埋土
⑫ E層

第35図　SES1003平・断面図（1/40）

SKS1001（第36図参照）

南調査区東部南端，標高0.92ｍで検出した土坑。平面は東西方向に5.7ｍ，南北方向に２ｍ程の長方形を呈し，主軸はN-96°-E前後の方位を示す。深度は0.34ｍ前後を測るが，底面は凹凸をもち西方向へと下ってSXS1001の東肩部を切り込んでいる。断面は舟底形を呈し，埋土は炭・瓦等を含む黄灰色シルトの単層である。瓦の取り上げについては最小限とし，取り上げた出土遺物はコンテナ４箱となった。図化したものの他に，肥前系磁器鉢，肥前系陶器鉢，京・信楽系陶器急須・植木鉢，備前系陶器瓶，堺・明石系陶器擂鉢，施釉陶器上瓶，土師質土器焙烙・甕があり，概ね18世紀中葉から19世紀中葉までのものが認められる。所属時期については，SXS1001の上層部より後出していること，及び出土遺物から19世紀中葉の所産と考えられる。

SKS1001出土遺物（第36～38図参照）

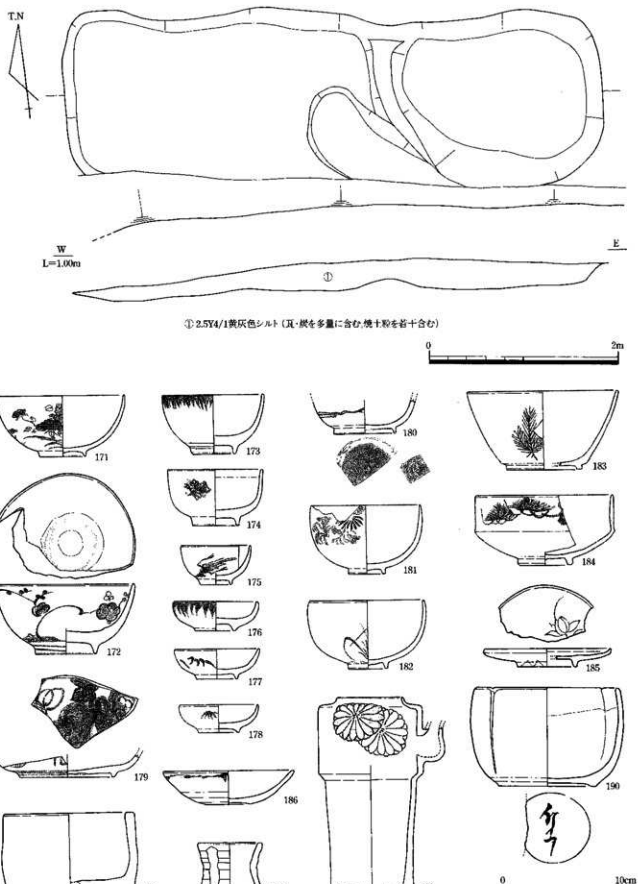
171は肥前系磁器で，色絵の碗。薄手で半球形の器形。172は肥前系磁器で，梅樹文の碗。見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施し，砂粒を塗布している。173も肥前系磁器で，雨降り文の碗。174は肥前系磁器で，印判手の蓋物。175は肥前系磁器小坏で，海老の染付文様を施す。176～178は，肥前系磁器の紅猪口。雨降り文と笹葉文とが見られる。179は肥前系磁器で，蛇ノ目凹型高台をもつ色絵の皿。180は肥前系陶器で，京焼風陶器碗。鉄絵を施すもので，高台内に「清水」の銘款が認められる。181・182は，京・信楽系陶器丸碗。181は色絵，182は呉須と銹絵による染付文様が認められる。183は京・信楽系陶器で，大振りの小杉碗。184は京・信楽系陶器で，銹絵を施した半筒形の碗。185は京・信楽系陶器皿で，呉須で染付文様を施す。186は京・信楽系陶器灯明皿。見込みに円錐状のピン痕が残る。187は備前系陶器鉢。口縁端部に焼着痕が残る。188は，器種不明の京・信楽系陶器。器台状の器形を呈し，鎬文と透明色の釉を施す。189は京・信楽系陶器で，ちろり。段筒形の器形を呈し，菊花の染付文様を施す。190は京・信楽系陶器火入れで，底部に「行郎」と判読される墨書が認められる。191は肥前系磁器で，花鳥文の大皿。192・193は，備前系陶器擂鉢。193は16世紀末葉頃の所産であることから，あるいは下位に存在するSES2002からの混入品とも考えられる。194～199は，土師質土器皿。194は橙色の胎土をもち，底部に回転糸切り痕を残すもので，器形と対応して高松城編年（佐藤2003）のⅢＡⅦ形式に相当する。195～199は橙色の胎土をもち，底部に回転糸切り痕を残すもので，器形と対応して高松城編年（佐藤2003）のⅢＡⅦ形式に相当する。200は土師質土器で，陽刻文を施す外型成形の焜炉。五徳・さな・風口が一体化した二重の構造をもつ。201は，土師質製の観音像。キラコが塗布され，型合わせによって成形されている。台座の一部が破損しているが，ほぼ完存する。202は，土師質製の人形（内行か）。中空で，型合わせによって成形されている。203は，軟質施釉の人形。緑釉と透明色の釉を施す。204も土師質製の人形。手捻り製とみられ，体部には貫通孔と貼付け痕が残る。胎土は精良で，灰白色を呈する。205は軒丸瓦。Ｍ３は，用途不明の金属製品。断面が角形で，円状になる溝部をもつ。

SKS1002（第39図参照）

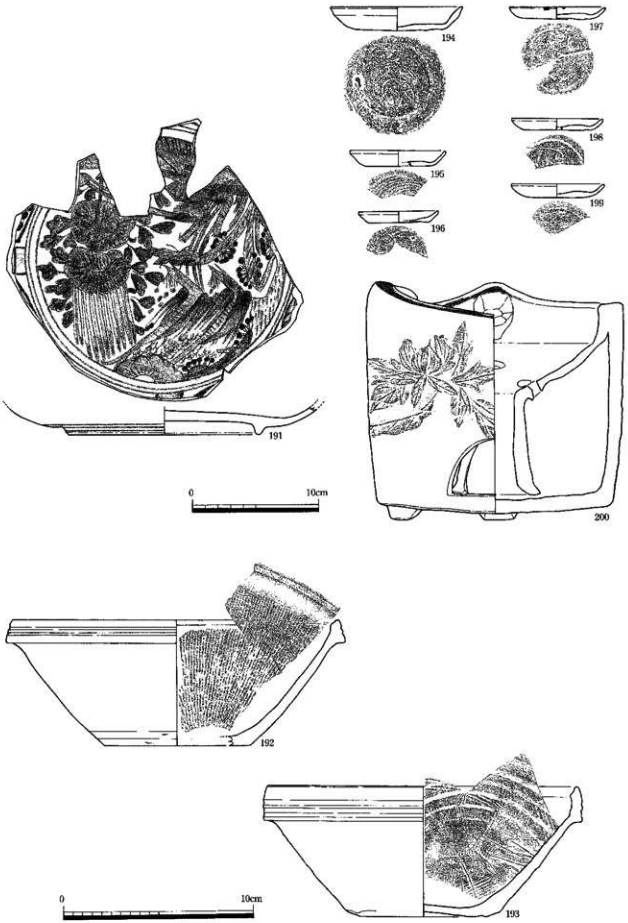
南調査区東部南端，標高0.90ｍで検出した土坑。平面は東西方向に1.93ｍ，南北方向に1.31ｍ程のやや不整形な隅丸方形を呈する。深度は0.2ｍ前後を測り，断面は舟底形を呈する。埋土は基本層序のＢ層と同様であるが，掘削時には礫，瓦片が多量に見られた。出土遺物はコンテナ２箱あり，図化したものの他，肥前系磁器鉢，瀬戸・美濃系磁器端反碗，備前系陶器鉢，軟質施釉陶器鉢・土瓶，瓦質土器羽釜，土師質土器細片，瓦片，炭化木等がある。所属時期は，出土遺物より19世紀中葉の所産と考えられる。

SKS1002（第39図参照）

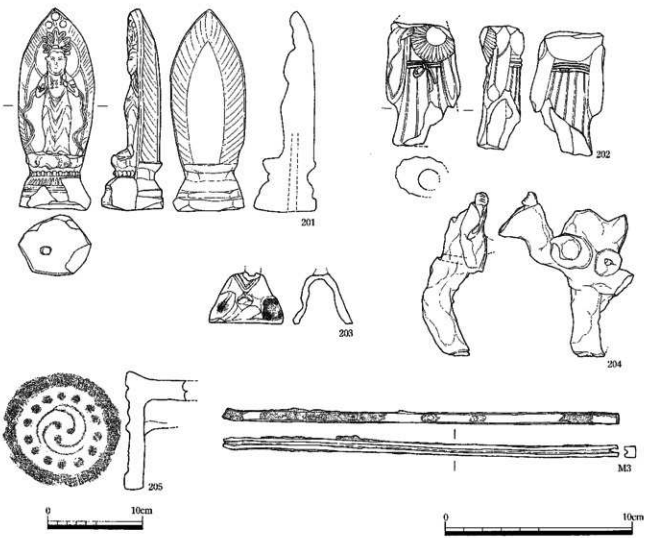
206は京・信楽系陶器で，カンテラ。透明色の釉を施す。207は肥前系磁器の大皿で，蛤弾きによる白抜きの意匠が見られる。高台内にハリ支え痕が残る。208は備前系陶器擂鉢。内外面に塗土を施す。Ｓ５は，花崗岩製の石臼。



第36図　SKS1001平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）



第37図　SKS1001出土遺物（1/3，1/4）



第38図　SKS1001出土遺物（1/2，1/4）

SKS1004（第39図参照）

南調査区東部南端，標高0.93mで検出した土坑。平面は東西方向に1.23m，南北方向に0.82mを測る隅丸方形を呈する。深度は0.15m前後を測り，底面で柱穴が認められる。埋土は基本層序のB層と同様で，炭・焼土粒を含む黒褐色シルト質粘土である。出土遺物は少量で，図化したものの他は肥前系磁器蓋のみである。所属時期は，埋土の特徴から19世紀中葉の埋没が考えられる。

SKS1004出土遺物（第39図参照）

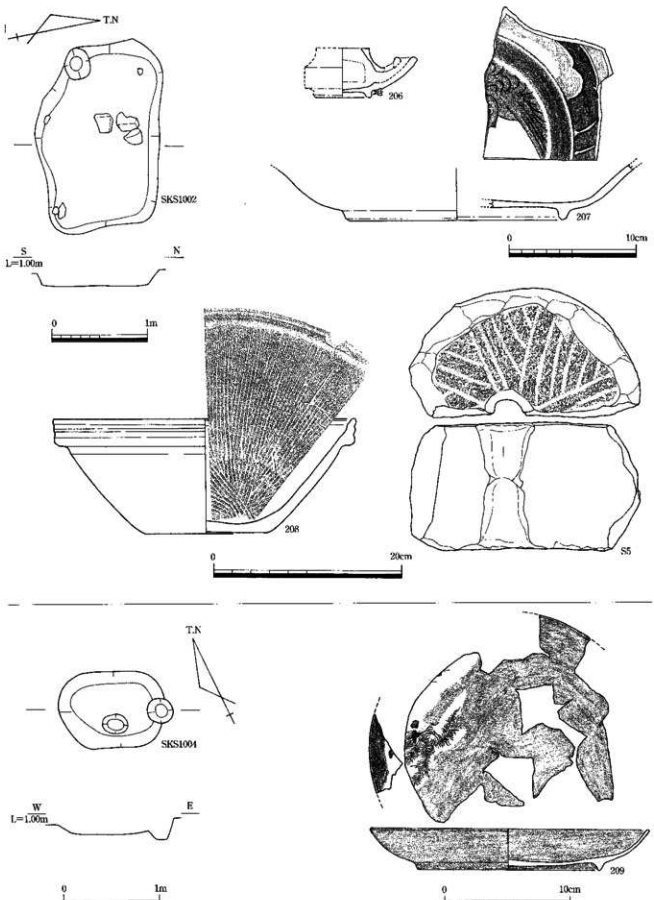
209は肥前系磁器の染付皿で，銹釉を掛け分ける。高台内にハリ支え痕が残る。

SKS1005（第40図参照）

南調査区東端部，標高0.96mで検出した土坑。平面は南北方向に2.48m，東西方向に1.19mを測る長方形を呈し，N-6°-E前後の主軸方位を示す。深度は0.18m前後を測り，断面は舟底形を呈する。埋土は基本層序のB層と同様で，炭・焼土粒を含む黒褐色シルト質粘土である。出土遺物はコンテナ1箱あり，図化したものの他，肥前系磁器端反碗，軟質施釉陶器蓋，土師質土器焜炉，瓦片等がある。所属時期は，埋土の特徴及び出土遺物から19世紀中葉の所産と考えられる。

SKS1005出土遺物（第40図参照）

210は，肥前系磁器広東碗。211は，京・信楽系陶器端反碗。212は京・信楽系陶器で，銹絵を染付した皿。213は京・信楽系陶器灯明皿で，内面に櫛目を施す。214は備前系陶器灯明皿。215は施釉陶器蓋で，飛鉋による施文が見られる。胎土は橙色を呈し，屋島焼と推定される。216は瓦質土器羽釜。



第39図　SKS1002・1004平・断面図（1/40），出土遺物（1/3，1/4）

SKS1006（第40図参照）

南調査区東端部，標高0.93mで検出した土坑。平面は南北方向に1.39m，東西方向に1.47mを測る隅丸方形を呈し，北端部をSKS1005に切られる。深度は0.30m前後を測り，断面は舟底形を呈する。埋土は瓦片を多量に含むシルト質粘土で，暗青灰色にグライ化して認められる。出土遺物はコンテナ2箱あり，図化したものの他，肥前系磁器皿，瀬戸・美濃系陶器水甕，備前系陶器擂鉢，施釉陶器行平鍋，軟質施釉陶器人形，土師質土器鉢・焙烙・甕，瓦等がある。所属時期は，出土遺物から19世紀中葉頃の所産と考えられる。

SKS1006出土遺物（第40図参照）

217は肥前系磁器で，端反碗。218は肥前系磁器で，白磁あるいは色絵素地の猪口。219も肥前系磁器の猪口で，蛇ノ目凹形高台をもつ。220は瀬戸・美濃系陶器で，植木鉢。底部に墨書が見られる。221は軒丸瓦。瓦当面にキラコの塗布が認められる。222は軒平瓦で，菊花文の中心飾りをもつ。

SKS1008（第41図参照）

南調査区東端部，標高0.98mで井戸SES1001に隣接して検出した土坑。平面は南北方向に1.23m，東西方向に0.71mを測る隅丸方形を呈し，N-6°-E前後の主軸方位を示す。深度は0.08m前後を測り，断面は舟底形を呈する。埋土は青灰色にグライ化した砂土である。出土遺物はコンテナ1/4箱あり，図化したものの他，備前系陶器擂鉢，施釉陶器土瓶・鍋，土師質土器皿・鉢・外型成形の焼ひ等がある。所属時期は，出土遺物から19世紀中葉頃の所産と考えられる。

SKS1008（第41図参照）

223・224は，備前系陶器鉢。共に，口縁端部と底部外縁に焼着痕が残る。

SKS1011（第41図参照）

南調査区東端部，標高0.96mで検出した。平面は0.7m前後を測る円形で，深度0.72mの規模をもつ。断面は段が付き，底面には人頭大の扁平な河原石が認められる。一定の規模をもつ構造物の基礎と考えられるが，確認した範囲においては単独で存在し建物等の柱穴として対応するものがない。出土遺物は少量で，図化した青花碗のみである。詳細な時期は不明だが，出土遺物から17世紀中葉頃の所産と考えられる。

SKS1011出土遺物（第41図参照）

225は，景徳鎮窯系青花碗の底部。高台内に放射状の釉痕が認められる。

SKS1012（第41図参照）

南調査区東端部，標高0.94mで検出した土坑。平面は0.6m前後を測る円形を呈し，深度は0.11m前後を測る。埋土はややグライ化し，オリーブ灰色を呈するシルト質細砂である。出土遺物は少量で，図化した土師質土器と加工木の細片のみである。詳細な時期は不明だが，出土遺物から17世紀中葉頃の所産と考えられる。

SKS1012出土遺物（第41図参照）

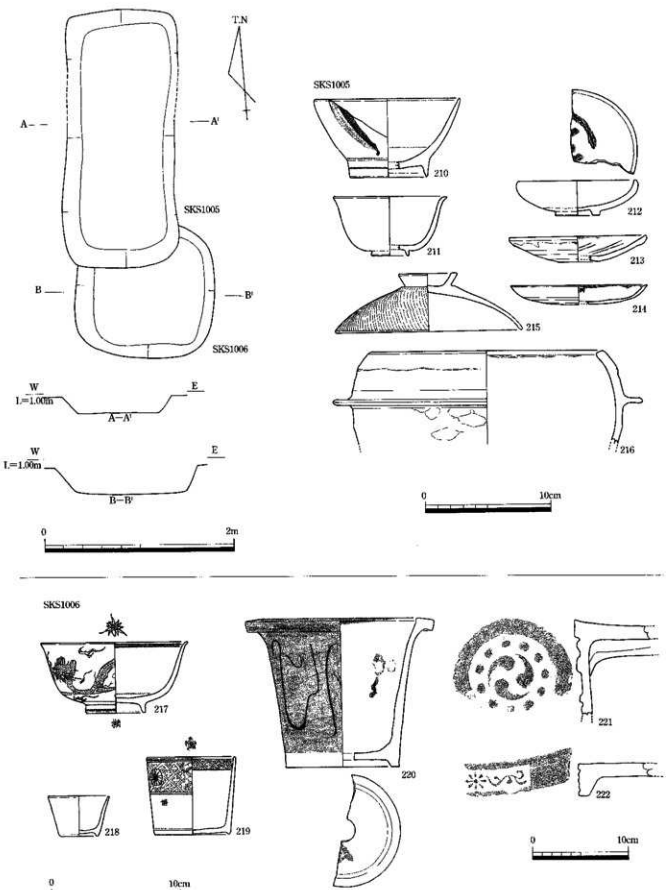
226は土師質土器で，把手付鍋。内面及び外面体部下半が煤化している。

SKS1014（第41図参照）

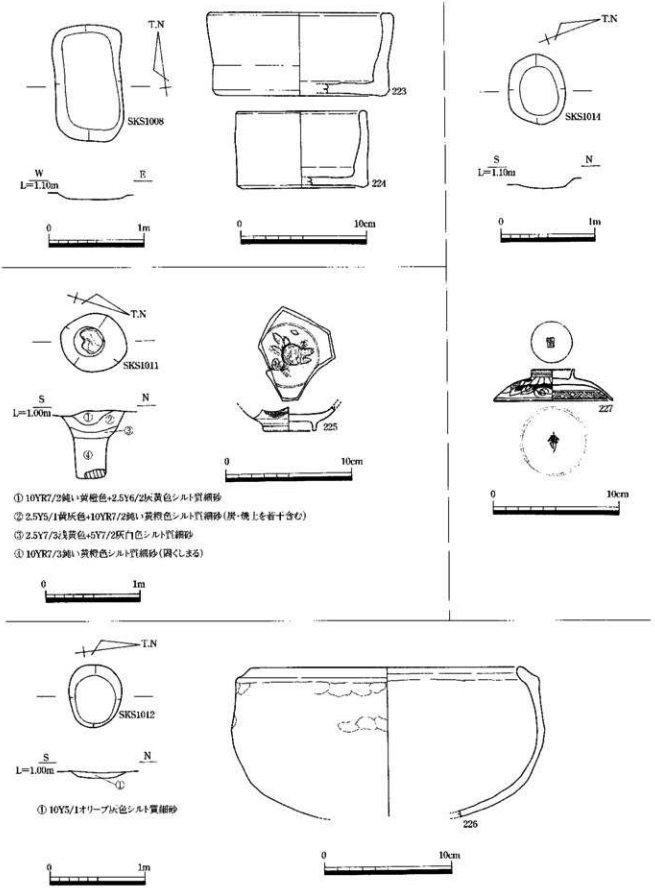
南調査区東部，標高0.97mで検出した土坑。平面は0.7m前後を測る円形を呈し，深度は0.10m前後を測る。埋土は，青灰色にグライ化した砂土である。出土遺物はコンテナ1/4箱あり，図化したものの他，肥前系磁器皿・蓋，肥前系陶器皿，土師質土器皿の細片等がある。所属時期は，出土遺物から19世紀中葉の所産と考えられる。

SKS1014出土遺物（第41図参照）

227は，瀬戸・美濃系磁器の碗蓋である。



第40図　SKS1005・1006平・断面図（1/40），出土遺物（1/3，1/4）



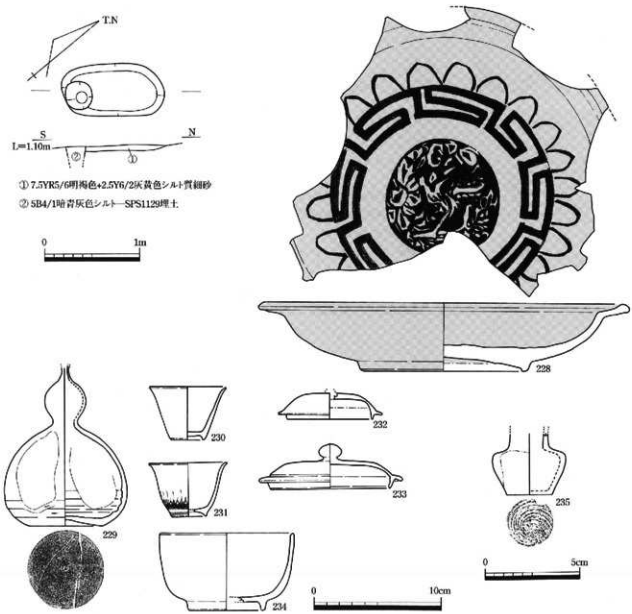
第41図　SKS1008・1011・1012・1014平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

SKS1016（第42図参照）

南調査区東部，標高1.03mで検出した土坑。平面は南北方向に1.10m，東西方向に0.56mを測る隅丸方形を呈し，N-40°-E前後の主軸方位を示す。深度は0.06m前後を測り，断面は舟底形を呈する。埋土は明褐色～灰黄色シルト質細砂の単層である。SDS1001に後出するもので，南端部はSPS1129によって切られる。出土遺物はコンテナ1/4箱あり，図化したもののの他，肥前系磁器碗，京・信楽系陶器碗，備前系擂鉢，土師質土器皿・焙烙がある。所属時期は，出土遺物から18世紀前半の所産と考えられる。

SKS1016出土遺物（第42図参照）

228は肥前系磁器で、波佐見産青磁の大皿。見込には，印花による陰刻文を施している。高台は蛇ノ目釉剥ぎにして，鉄錆を塗布する。229は備前系陶器瓶。器面全体に塗土を行い，底部に扇形の刻印が認められる。230・231は，肥前系磁器小坏。230は白磁，あるいは色絵素地のもの。232は，灰釉の陶器蓋。233は京・信楽系陶器の蓋で，透明色の釉を施す。器面の貫入が著しい。234は肥前系陶器碗。235は，軟質施釉のミニチュア玩具類。橙色を呈する胎土に，透明色の釉を掛ける。底部には回転糸切り痕が残る。



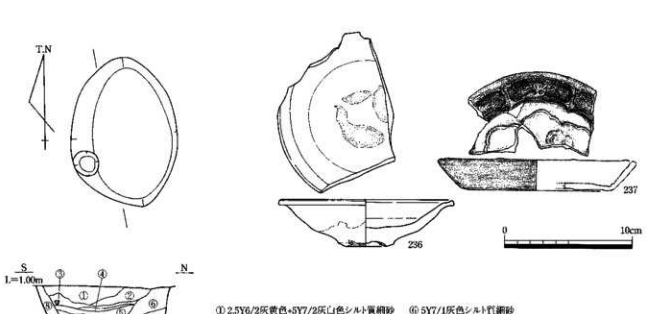
第42図　SKS1016平・断面図（1/40），出土遺物（1/3，1/2）

SKS1020（第43図参照）

南調査区中央部，標高0.86mで検出した土坑。平面は東半部が削平されており，楕円形状となるが，本来は径1.5m前後の円形を呈するものと推定される。深度は0.46mを測り，断面は台形を呈する。埋土は細分されているが，大概すると中位まで炭層を含むシルト質土が充填し，下位に粗砂の堆積が認められる。出土遺物は少量で，図化したものの他，肥前系陶器，土師質土器の細片がある。出土遺物より18世紀末葉以降の埋没時期が考えられる。

SKS1020出土遺物（第43図参照）

236は肥前系陶器で，灰釉皿。溝縁口縁で，見込に砂目痕が認められる。237は，源内系軟質施釉陶器。型成形による陽刻文に，緑・黄褐色の釉を施す。高台部は，蛇ノ目凹形となっている。



第43図　SKS1020平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

SKS1022（第44図参照）

南調査区中央部，標高0.88mで検出した土坑。平面は南北2.66m，東西方向に1.43mを測り，隅丸方形を呈する。深度は0.46mを測り，断面は段が付き，中央が窪んで認められる。埋土の上位には基本層序でB層に相当する炭・焼土粒を含む黒褐色シルト質粘土が堆積し，中位は粘土を塊状に含む層や炭層が認められる。出土遺物はコンテナ1箱程度あり，図化したものの他，肥前系磁器大皿，京・信楽系陶器色絵碗・端反碗，備前系陶器灯明皿，堺・明石系陶器擂鉢，施釉陶器上瓶，土師質土器焙烙，鉢，瓦，炭化木等がある。出土遺物から，19世紀中葉の廃棄土坑と考えられる。

SKS1022出土遺物（第44図参照）

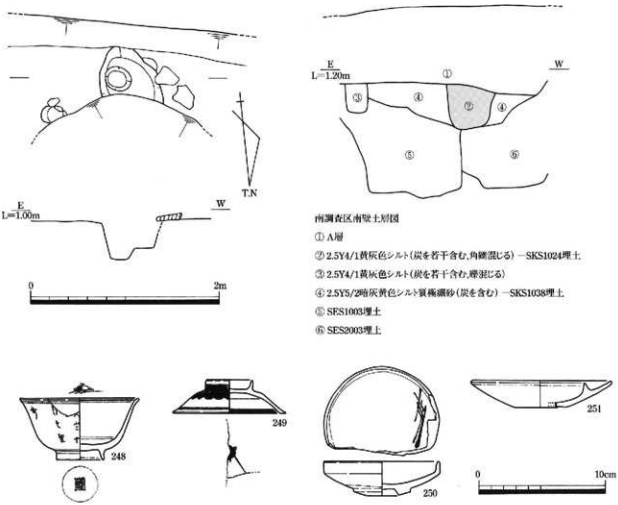
238・239は，肥前系磁器碗蓋・碗。240は肥前系陶器で，灰釉の碗。241は京・信楽系陶器で，髪水入れ。鉄釉を掛け，掻き取りによる加飾と緑釉を施す。242は，軟質施釉陶器の灯火具。243・244は源内系軟質施釉陶器で，緑，黄，褐色の釉を施す皿及び香炉。243は内面に微細な陽刻文を施し，底部は碁笥底に削られる。245は肥前系陶器鉢。口縁直下に，垂下する突帯を貼付ける。白泥による刷毛目装飾を施し，鉄釉と緑釉で竹を描く。246は器種不明の土師質土器。煤の付着が著しく，あるいは加熱具の付属品か。247は土師質土器人形で，虚無僧である。

第44図　SKS1022平・断面図（1/40），出土遺物（1/3，1/4，1/2）

SKS1024（第45図参照）

南調査区中央部南端，標高0.85mで検出した。調査範囲は少ないが，平面は0.6m前後の円形状を呈するものと推定される。底面に柱穴が認められ，深度は0.45m前後を測る。よって柱掘り方の可能性も考えられるが，周辺でこれに対応する柱穴はない。埋土は角礫の混じる黄灰色シルトである。SKS1038より後出し，近代以降の所産とした基本層序のA層直下で認められる。出土遺物はコンテナ1/2箱あり，図化したものの他，肥前系磁器端反碗，京・信楽系陶器端反碗・色絵皿・鉢，備前系陶器灯明皿，軟質施釉陶器鍋・土瓶，土師質土器蓋・焙烙，瓦がある。所属時期は，出土遺物から19世紀中葉頃の所産と考えられる。

248・249は瀬戸・美濃系磁器端反碗，及び碗蓋。249は，焼継ぎ痕と金彩による傷隠しが見られる。250は瀬戸・美濃陶器で，鉄絵の皿。251は京・信楽系陶器で，灯明皿である。



第45図　SKS1024平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

SKS1027（第46図参照）

南調査区西部，標高1.04mで検出した土坑。平面は東西方向に1.38m，南北方向に0.84mを測る隅丸方形を呈し，N-50°-E前後の主軸方位を示す。深度は0.14m前後を測り，断面は舟底形を呈する。埋土は，炭を含む鈍い黄色～黄灰色シルト質細砂の単層である。遺構の上面で集石が確認されているが，当時の生活面を考慮すると露呈していたとは考えにくく，本来は上方からの掘り込みの内部に埋没していた可能性が考えられる。集石には図化したような瓦や石造物の破片が含まれており，瓦礫の廃棄土坑と考えられる。出土遺物は少量で，図化したものの他は土師質土器細片のみである。詳細な時期は不明だが，出土遺物から18世紀前半を中心とした所属時期が考えられる。

SKS1027出土遺物（第46図参照）

252は備前系陶器灯明皿で，口縁端部にボタン状の摘みが付く。253は軒平瓦で，宝珠文を中心飾りとする。S6は，角礫凝灰岩製石造物の脚部である。

SKS1028（第46図参照）

南調査区西部，標高1.02mで検出した土坑。平面は東西方向に0.82m，南北方向に0.6mを測る円形状を呈する。深度は0.07m前後を測り，断面は舟底形を呈する。埋土は，炭を含む鈍い黄色～黄灰色シルト質細砂の単層である。SKS1027と同様に遺構の上面で集石が確認されているが，本来，当遺構に伴った廃棄物と推定される。出土遺物は土師質土器細片のみである，詳細な時期は不明だが，SKS1027と同様の18世紀前半を中心とした所属時期が考えられる。

SKS1033（第46図参照）

南調査区西部，標高1.03mで検出した土坑。平面は東西方向に1m以上，南北方向に2.05mの規模をもつ。東面を欠くが隅丸方形を呈するものとみられ，N-20°-E前後の主軸方位を示す。深度は0.23m前後を測り，断面は舟底形を呈する。埋土は灰黄色シルト質細砂を基本とし，拳大の角礫及び礫石等に用いられたとみられる大振りな石が混じる。出土遺物はコンテナ1/4箱程度で，図化したものの他，施釉陶器蓋，土師質土器細片，瓦片がある。出土遺物から18世紀代前半の所産と考えられる。

SKS1033出土遺物（第46図参照）

254は京・信楽系陶器小杉碗で，緑，褐，白，青色の色絵を施す。255は備前系陶器灯明皿である。

SKS1035・1036（第47図参照）

南調査区西端部，標高1.01mで検出した埋甕。埋甕は径0.4m（SKS1035）と0.5m（SKS1036）程の土師質製で，底部のみ遺存する。内面に石灰質の付着物を認め，便槽の類と考えられる。掘り方は連結しており，N-5°-Wの方位で2基並んで設置されていたと考えられる。埋甕内から出土遺物があり，19世紀代の陶磁器に加えて，磁器製タイル等も含み19世紀末葉以降の廃棄時期が考えられる。

SKS1039（第46図参照）

南調査区中央部北端，標高0.74mでSDS1008に後出して検出した土坑。平面は南北方向に1.65m，東西方向に0.95mを測る隅丸方形で，N-18°-E前後の主軸方位をボす。深度は0.18m前後，断面は舟底形を呈し，埋土は炭を含む黄灰色シルト質細砂である。出土遺物はコンテナ1/2箱程度で，図化したものの他，肥前系磁器色絵碗・瓶，施釉陶器土鍋・土瓶，土師質土器焙烙・玩具類がある。出土遺物から19世紀代中葉頃の所産と考えられる。

SKS1039出土遺物（第46図参照）

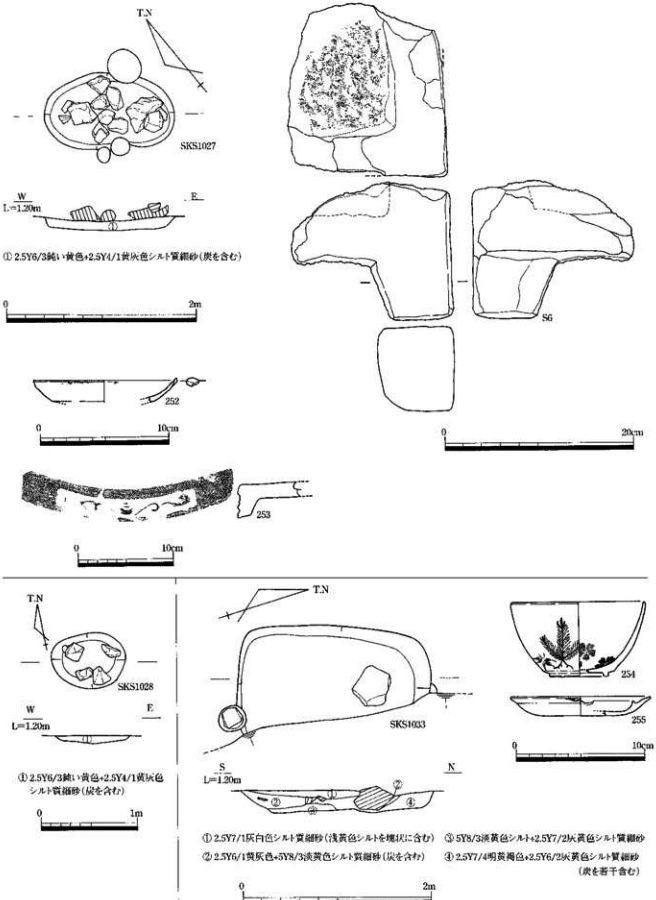
256は肥前系磁器碗蓋で，線描きの染付文様をもつ。257は肥前系磁器猪口で，蛇ノ目凹形高台をもつ。258は瀬戸・美濃系陶器で，天目碗。口縁に青灰色の釉を掛け，全面に透明色の釉を重ねる。

SKS1040（第46図参照）

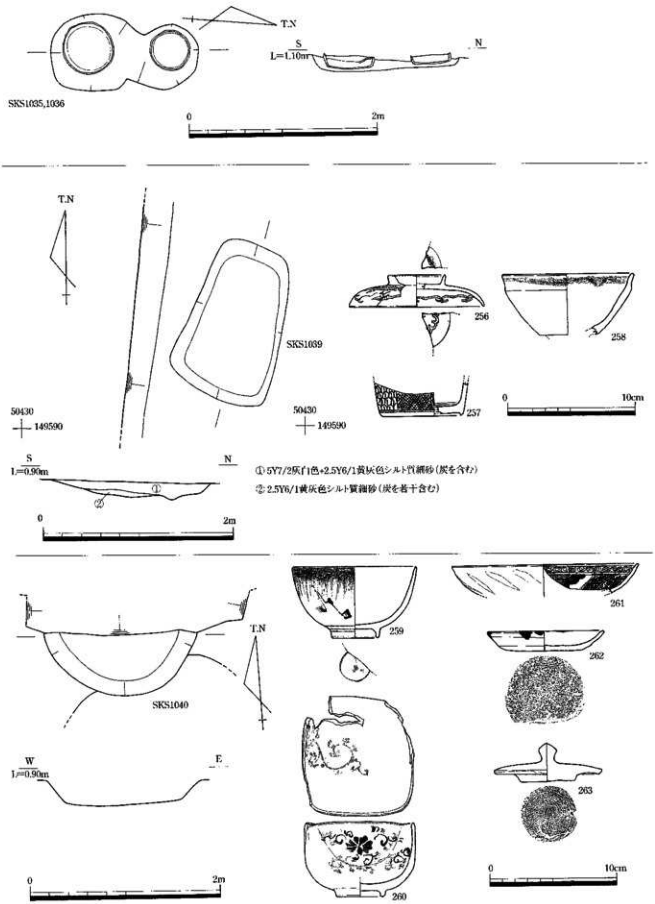
南調査区西部北端，標高0.81mで検出した土坑。平面は径1.6m程の円形と推定され，南端部で，SES1002の掘り方を切り込む。深度は0.30m前後，断面は舟底形を呈し，埋土は炭を含む黄灰色シルト質粘土である。出土遺物はコンテナ1/4箱程度で，図化したものの他，備前系陶器瓶，土師質土器鉢脚部，瓦片がある。遺構の前後関係，出土遺物から18世紀前半の所産と考えられる。

SKS1040出土遺物（第46図参照）

259は肥前系磁器碗で，雨降り文と口銹を施す。260は京・信楽系陶器碗で，隅入の口縁で青色の上絵と金彩を施す。261は肥前系磁器で，口錆を施した型打ち皿。262は土師質土器皿で，高松城編年（佐藤2003）のIIIAV形式に相当する。263は陶器蓋で，上半に鉄釉を施し底部には回転糸切り痕が残る。



第46図　SKS1027・1028・1033平・断面図（1/40），SKS1027・1033出土遺物（1/3，1/4）



第47図　SKS1035・1036・1039・1040半・断面図（1/40），SKS1039・1040出土遺物（1/3）

SPS1139（第48図参照）

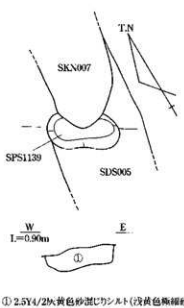
南調査区中央部，標高0.77mで検出した柱穴。平面は東西方向に0.75m，南北方向に0.37m程の規模をもち，楕円形を呈する。深度は0.24mを測り，底面で段が付き西半が深くなっている。埋土は，地山を塊状に含む灰黄色砂混じりシルトの単層である。北部をSXN007に切られ，SDS1005より後出して確認された。出土遺物は少量で図化した肥前系陶器皿のみであるが，先述の調査地中央部を覆う整地の直下で検出されている点と，出土遺物についてもこれに大きく矛盾しないことから概ね17世紀代中葉頃の所産と考えられる。

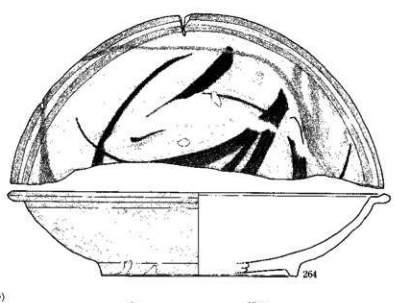
SPS1139出土遺物（第48図参照）

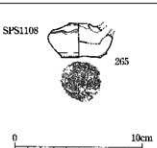
264は肥前系陶器皿で，溝縁の口縁をもつ。胎土は褐灰色を呈し，高台内を除き灰釉を掛けている。内面は白土を施し，鉄釉と銅緑釉の二彩で施文している。

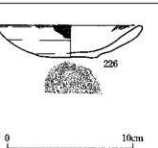
SPS1108・1119出土遺物（第48図参照）

南調査区第1遺構面では，多数の柱穴を確認した。陶磁器，土師質土器等の細片を含むものが散見できるが，詳細な時期決定は難しく，まとまりをもったものを見出し難い。下層面以下からの混入も推察できるなかで，全体的には図化したもの同様に古相を示すものが多い。265はSPS1108の出土遺物で，瀬戸・美濃系陶器水滴。体部に波状文をもち，灰釉を施している。底部には回転糸切り痕を残す。266はSPS1119の出土遺物で，土師質土器皿。灰白色を呈する胎土を用い，肥厚した口縁をもち底部には回転糸切り痕が残る。









第48図　SPS1139平・断面図（1/40），SPS1139・1108・1119出土遺物（1/3）

SBS1001（第49図参照）

南調査区東部においてSXS1001，SKS1001・1002・1005・1006，SES1001に囲まれた範囲で，多数の柱穴を確認した。柱穴は柱痕や根石を伴うもの，明瞭な掘り方と一定規模の深度を持ったものが多いことから建物が存在した可能性が高いと考えられ，掘立柱建物跡として復元を行なった。

復元に用いた柱穴は標高1.00m前後，平面0.3m前後の円形に検出されたもので，深度は約0.4m，根石を伴うものはやや浅く0.3m前後を測る。柱痕が確認されているものにSPS1002・1005・1006・1008・1009・1034・1055・1056・1057・1060・1061・1130・1133・1136があり，根石を伴うものにSPS1034・1048がある。この他，復元建物との関係が明確にできないが，南西部の柱穴群に根石を伴ったものが散見された。

復元した掘立柱建物跡は，東面に廂が付く5×4間（桁行6.1m，梁行4.8m，面積29.28㎡前後）の規模で，主軸方位はN-5°-Eになる。柱筋が通る北面の側柱A-A′及び東面の入側柱H-H′を基に，規模及び主軸を判断したが，西面F-F′については，対応する柱穴に未検出のものがありやや根拠に乏しい。東面の側柱Ⅰ－Ⅰ′については，北部の柱筋は通るものの南部の2箇所（SPS1062・1132）について対応するものを欠くことから下屋，廂部と判断した。また柱筋の通りがよいG-G′は，元来の東面の（入）側柱にも考えられ，下屋も含め東側へと拡張された可能性が考えられる。柱穴の分布において，北部とは対照的に南西部で建物の内側に柱穴が多数認められる。北部に未調査範囲があること，南西部の柱穴について建物との対応関係が不詳であることから根拠が薄いものの，一応上間と床間の存在が想定に加えられる。この他，東・西面の半間分外側に規模の小さな柱穴が並んでおり（E-E′，J-J′），軒支柱の存在が示唆される。

柱間の距離については桁行で1.5m前後，梁行で1.2m前後となり，当該期の礎石建物に比べると間隔が狭くなる。この点については軒支柱の存在に加えて，周囲で瓦が多数廃棄されていることから考えると，軒部・蟇端のみものを含めた瓦葺の構造を支持するように思われる。

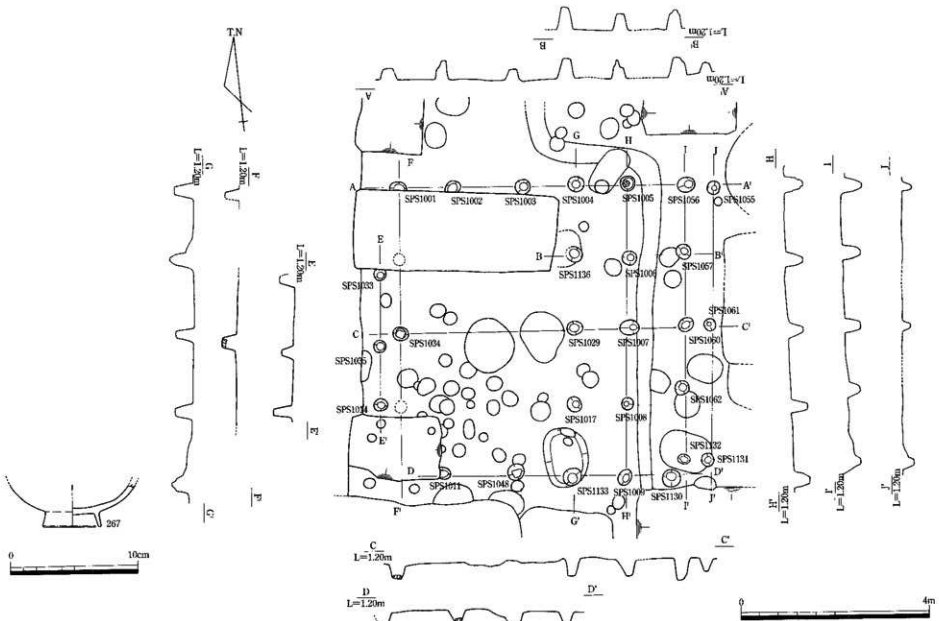
所属時期については，出土遺物に陶磁器，土師質土器，瓦等があるが何れも小片で少量であるため，時期決定が難しい。遺構面の上限から17世紀前葉に遡る可能性もあるが，上記の周囲で確認される遺構全てが19世紀中葉に廃棄されていることから，基本的には同時期の廃絶が考えられる。

SPS1007出土遺物（第49図参照）

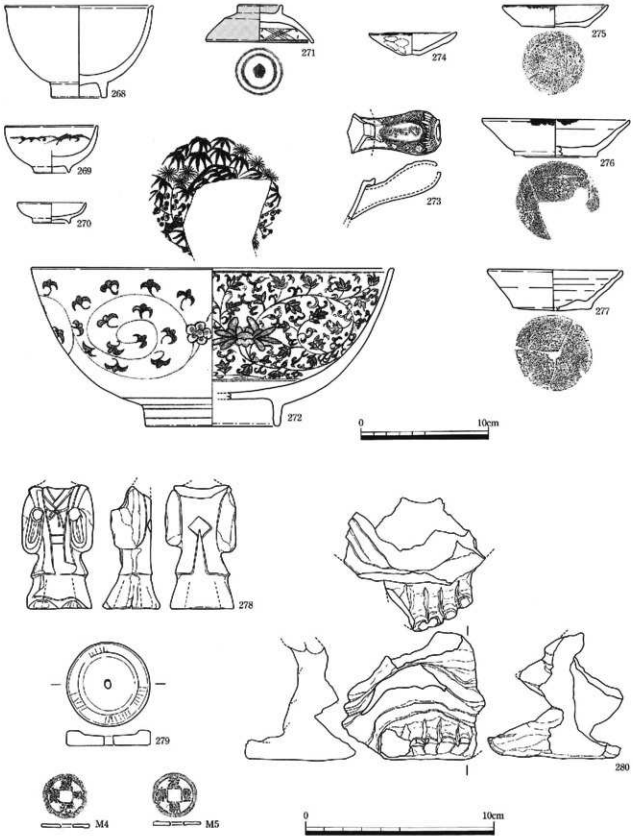
267はSBS1001を構成する柱穴SPS1007の出土遺物で，肥前系磁器の碗底部である。

南調査区遺構外出土遺物（第50図参照）

268～280，M4・5は，南調査区の機械掘削時等において，遺構外より出土した遺物である。268は肥前系磁器で，白磁碗。269は肥前系磁器で，筆葉文の猪口。270は肥前系磁器で，紅猪口。271は肥前系磁器で，青磁染付の碗蓋。272は肥前系磁器で，花唐草文様の鉢。見込み には，松竹梅文を施す。273は施釉陶器行平鍋の把手部で，カタカナ文字とみられる陽刻をもつ。274～277は，土師質土器皿。274は手捏ねで成形されており，胎土は灰白色を呈する。口縁部に煤の付着が認められる。275は浅黄橙色の胎土をもち，底部に静止糸切り痕を残す。内側全面に灰褐色を呈する顕著にしくは煤の付着が認められる。276は，灰白色を呈する胎土をもつ。底部の切り離し痕は明確に残らない。277は浅黄橙色の胎土をもち，底部に回転糸切り痕を残す。278は土師質土器人形。型合わせにより成形されており，キラコの塗布が認められる。279は土師質土器の玩具で，独楽。型成形のもので，キラコの塗布が認められる。280は，中国産とみられる白磁製の仏像脚部。南調査区の中央部に設置したトレンチからの出土遺物で，設置箇所からSDS2002，SDS1004，SXS1001，あるいはこれらの基盤層である砂堆の何れかに帰属するものと考えられる。M4・5は，北宋銭。M4は「[咸]平元宝」で，初鋳年次は998年。M5は「元豊通宝」で，初鋳年次は1078年である。



第49図　SBS1001平・断面図（1/80），SPS1007出土遺物（1/3）



第50図　南調査区遺構外出土遺物出土遺物（1/3，1/2）

第7節　北調査区の遺構・遺物（第10・51～71図参照）

第1～6トレンチの調査を行ない，確認した遺構に井戸（SEN001～004），土坑（SKN001～026），柱穴（SPN001～180），溝状遺構（SDN001～003），性格不明遺構（SXN001～010），棚列状遺構（SAN001）がある。中央部にあたる第3トレンチでは柱穴が密集して認められ，南調査区検出のものと合わせ敷地境に相当する棚列（SAN002）を考えることができる。これより東側では性格不明遺構（SXN001・002・003・005・006）等比較的大型のものが目立ち，柱穴類は希薄となっている。一方，境より西側では遺構の密度が高く，柱穴が密集して認められる。また西部では，第4トレンチ北端，敷地の北境に相当する付近で門の跡とみられるSKN011・026，SPN055・051がある他，排水溝と考えられるSDN001が確認された。所属時期については各遺構の出土遺物，及び南調査区の結果から16世紀末・17世紀初頭以降で，19世紀中葉までの時期が考えられる。

SEN001（第51図参照）

北調査区第2トレンチ南部，標高0.72mで検出した石組み井戸で，西部は南調査区において確認した。掘り方の平面は径2.3m程を測る円形を呈しており，井側は底面の内法で0.7m程を測る円形状に石組みされたものとなっている。石組みは河原石を乱積みしたもので，緩やかに上方へと開くように積まれており，最大で1.3mの高さまで遺存している。また東部の上方では，足場状の平坦面が石組みされている。井側内の中位にまで湧水が及ぶことから埋上の詳細は不明だが，直上をSXN004・SXS1001に覆われる。掘り方・石組みの裏土は，拳大の角礫を伴う地山混じりの褐灰色シルトで，西端をSDS1008に切られる。出土遺物はコンテナ1/4箱程あり，埋土からは図化したものの他，土師質土器皿，木質遺物，骨片，石組み裏土の出土遺物に，須恵器甕，土師質土器皿・擂鉢，備前系陶器坏・甕，平瓦の細片が認められる。所属時期は遺構の前後関係及び出上遺物から，17世紀前半を中心とした時期が考えられる。

SEN001出土遺物（第51図参照）

281～285は，井側内の出上遺物である。281は肥前系陶器で，砂目の皿。被熱痕が認められる。282は肥前系陶器の底部。見込みに砂目痕が認められる。283は備前系陶器擂鉢。284は管状土錘。285は，土師質の泥面子。片面に磨き調整を施す。

286・287，S7は，石組み裏上の出上遺物である。286は須恵器坏身。287は肥前系陶器で，二彩手の皿。後出するSDS1008等からの混入品の可能性がある。S7は角礫凝灰岩製の石造物。風輪部とみられるが，内面が著しく緑化している。

SEN002（第52図参照）

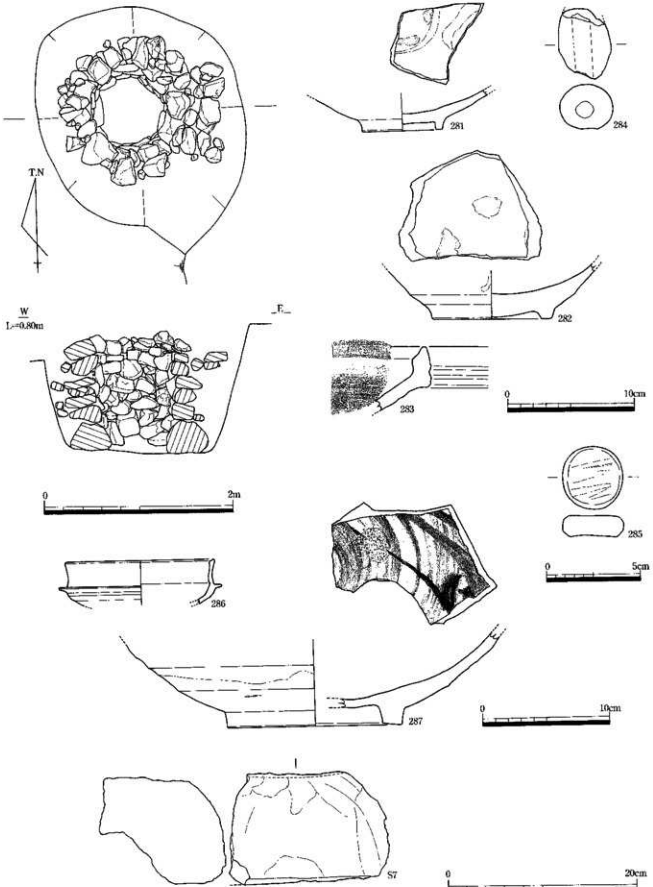
北調査区第3トレンチ中央部，標高0.78mで検出した井戸状遺構。平面は径1.4m程を測る円形状で，断面は台形を呈する。深度は0.94mを測り，埋上はシルト質細砂層を基本とする。中位には地山とみられる上塊を含み，以下でグライ化を示す色調となり最下層において湧水が認められる。出土遺物は少量で，図化したものの他，備前系陶器細片，土師質土器擂鉢細片，木質遺物がある。出上遺物が限られることから詳細な時期は不明だが，トレンチ西壁の層序から少なくとも17世紀中葉までには埋没していたと考えられる。

SEN002出上遺物（第52図参照）

288は，土師質土器足釜の口縁部。鍔部の退化が著しい。

SEN003（第52図参照）

北調査区第4トレンチ南端部，標高0.57mで検出した井戸状遺構。東部及び上半部の破壊が激しいが，平面は径2.15m程の円形状を呈するものと推定される。中位には段が付いており，断面は台形状を呈する。深度は0.63mを測り，埋上は2分割できる。下層は有機物を含んだ黒褐色のシルト質土で，開削中に湧水が認められた。出上遺物は建材，板材等の木質遺物を中心にコンテナ1箱分ある他，肥前系陶磁器細片，瓦等が認められる。詳細な

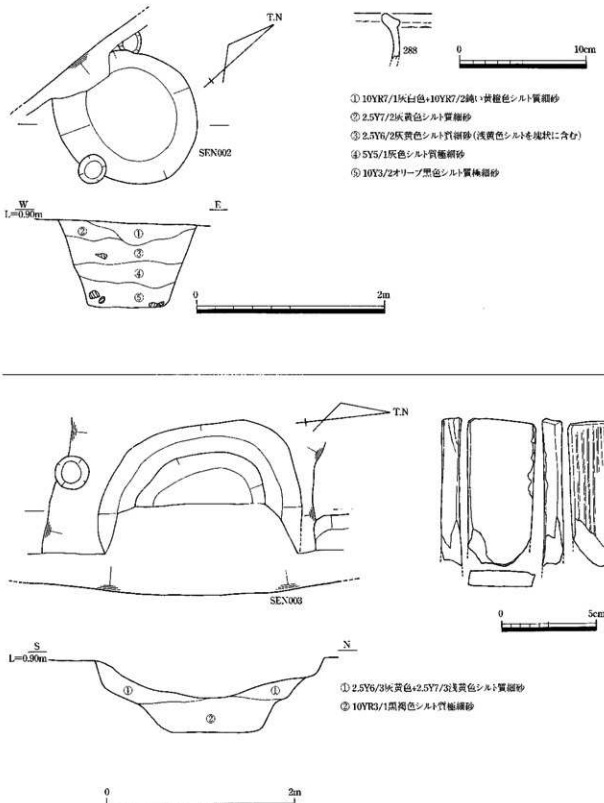


第51図　SEN001平・断面図（1/40），出土遺物（1/3，1/2，1/4）

所属時期は不明だが，基本層序から17世紀中葉以降の所座と考えられる。

SEN003出土遺物（第52図参照）

Ｓ８は砥石で，背面及び側面に切断痕とみられる条痕が残る。



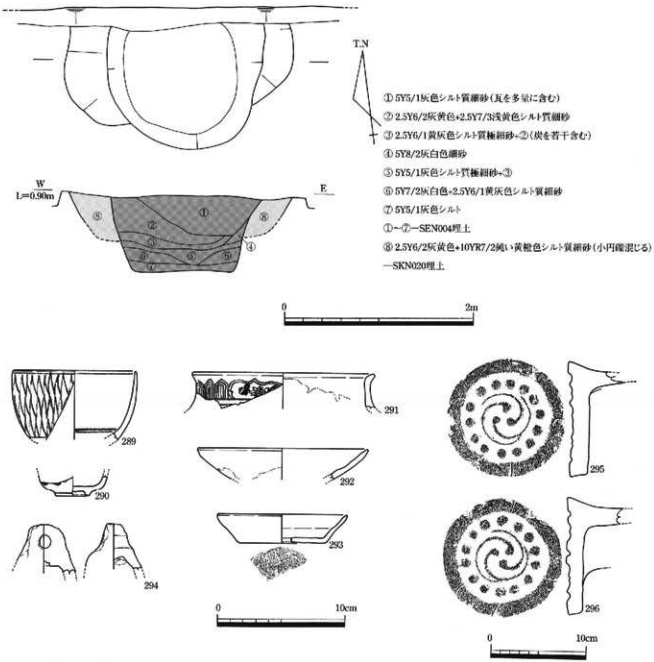
第52図　SEN002・003平・断面図（1/40），出土遺物（1/3，1/2）

SEN004（第53図参照）

北調査区第５トレンチ中央部，標高0.87ｍで検出した井戸状遺構。北部が未調査だが，平面は径1.6ｍ程の円形状を呈する。深度は0.86ｍを測り，外周部のSKN020を基盤として断面が台形を呈する。埋土は最上層に多量の瓦片を詰めた堆積層，最下層は湧水を得て，ややグライ化したシルト層となっている。出土遺物はコンテナ1/4箱程で，図化したものの他は，建材，貝殻がある。所属時期は，出土遺物及び基本層序から17世紀中葉頃の所産と考えられる。

SEN004出土遺物（第53図参照）

289は肥前系磁器碗で，鋸歯状の網目文をもつ。290は肥前系磁器小坏で，高台無釉のもの。291は，青花香炉。292は肥前系陶器で，灰釉皿。293は土師質土器皿。胎土は鈍い黄橙色を呈し，底部には回転糸切り痕が残る。高松城編年（佐藤2003）のⅢＡⅢ形式に相当する。294は土師器鍋壺。295・296は，軒丸瓦である。



第53図　SEN004，SKN020平・断面図（1/40），SEN004出土遺物（1/3，1/4）

SXN001（第54図参照）

北調査区第１トレンチ北端，標高0.82ｍで検出した性格不明遺構。調査範囲外へと広がるが，南北方向に3.18ｍ，東西方向に1.88ｍの規模で確認した。平面は不整形を呈するが，北西方向から緩やかに底面が下り，南部は楕円形状に窪む。深度は最深部で0.49ｍを測り，埋土は炭・瓦礫を含んだシルト質細砂である。出土遺物はコンテナ1/4箱程度で，図化したものの他，備前系陶器擂鉢，土師質土器皿・焙烙，瓦片がある。出土遺物から18世紀前半の埋没時期が考えられる。

SXN001出土遺物（第54図参照）

297は肥前系磁器碗で，網目に魚の染付文様をもつ。298は肥前系磁器で，白磁の碗。299は肥前系陶器で，灰釉の碗。底部に回転糸切り痕を残す。300は京・信楽系陶器碗。301は肥前系磁器皿。淳瑠璃「松風」の草紙は，墨弾き技法による。高台内には，「太明成化年製」の銘款をもつ。302は肥前系陶器皿で，蔓彫りの陰刻をもつ。灰白色の精良な胎土を用い，透明色の釉を施す。見込みには日痕が残る。303は肥前系陶器で，見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施す皿。304は軒丸瓦である。

SXN002（第55図参照）

北調査区第２トレンチ北端，標高0.79ｍで検出した性格不明遺構。調査範囲外へと広がるが，東西方向に２ｍ，南北方向に1.62ｍの規模で確認した。東西方向へと延び，位置関係と埋土の特徴からSXN001に繋がる可能性が高い。深度は0.24ｍを測り，東方向のSXN001へと下るものと推定される。断面は舟底形を呈し，底面に人頭大の石が認められる。出土遺物はコンテナ1/2箱程度で，肥前系磁器碗，瓦，釘がある。所属時期はSXN001と同様，18世紀前半の埋没時期が考えられる。

SKN001（第55図参照）

北調査区第２トレンチ北端，標高0.78ｍで検出した土坑。調査範囲外へと広がるが，東西方向に1.10ｍ，南北方向に0.57ｍの規模で確認した。埋土は基本層序のＢ層から連続し，SXN002の北端を切り込む。出土遺物はコンテナ1/4箱程度で，図化したものの他，肥前系磁器広東碗，京・信楽系陶器碗，備前系陶器灯明皿，堺・明石系擂鉢，軟質施釉陶器土鍋，瓦片がある。層序及び出土遺物から19世紀中葉の埋没時期が考えられる。

SKN001出土遺物（第55図参照）

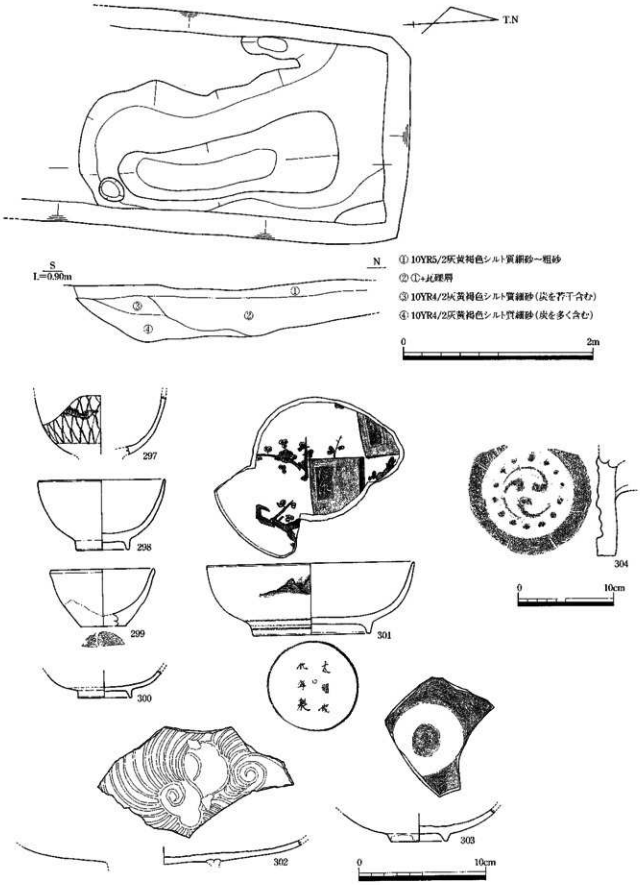
305～308は，肥前系磁器碗・碗蓋。305は，線描きによる染付文様を施す。306・307は共に「萬暦年製」の銘款，四方襷文，兎の意匠をもち，セットとなる碗・碗蓋。309は肥前系磁器皿。染付文様に加え，金彩及び赤色の上絵の痕跡が認められる。310は，土師質製の観音像。型合わせで成形され，器面にキラコが塗布されている。ほぼ完存している。311は土師質土器焙烙。312は土師質土器把手付鍋である。

SXN003（第56図参照）

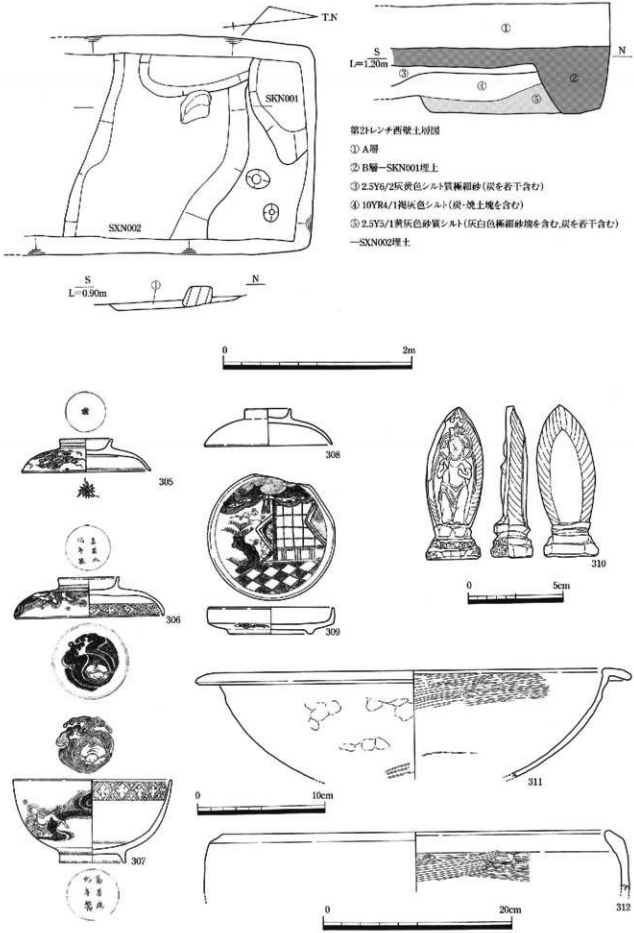
北調査区第２トレンチ中央部，標高0.75ｍで検出した性格不明遺構。東西方向に調査範囲外へと延び，幅2.5ｍの規模をもつ。平面は直線的で，N-96°-E前後の方位を示す。断面は台形を呈し，深度0.64ｍを測る。埋土は炭・焼土粒を含むシルトで，下層部は木質遺物等の有機物を含み褐色を呈する。底面では，河原石，石材片が廃棄された状態で認められた。出土遺物はコンテナ４箱程度で，図化したものの他，肥前系磁器皿，肥前系陶器火入れ，備前系陶器甕，瓦質火鉢，漆器・加工木製片，貝殻がある。出土遺物から，18世紀前半の埋没時期が考えられる。

SXN003出土遺物（第56～58図参照）

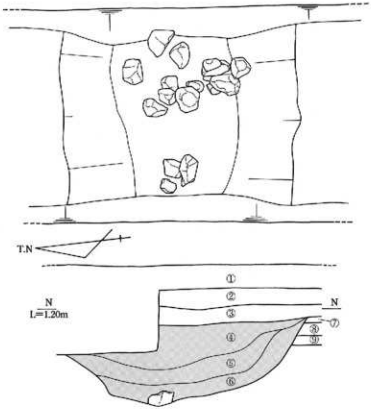
313～315は，肥前系磁器碗。316は肥前系磁器で，青磁の仏飯器。陰刻文と爪形の押圧文をもつ。317は肥前系磁器小坏。318は肥前系陶器碗。器面は，淡黄色を呈する。319・320は肥前系陶器で，京焼風陶器の碗・皿。319は口錆を施し，高台内に「清水」の刻印をもつ。321は産地不詳で，刷毛目装飾の陶器碗。322は土師質土器で，



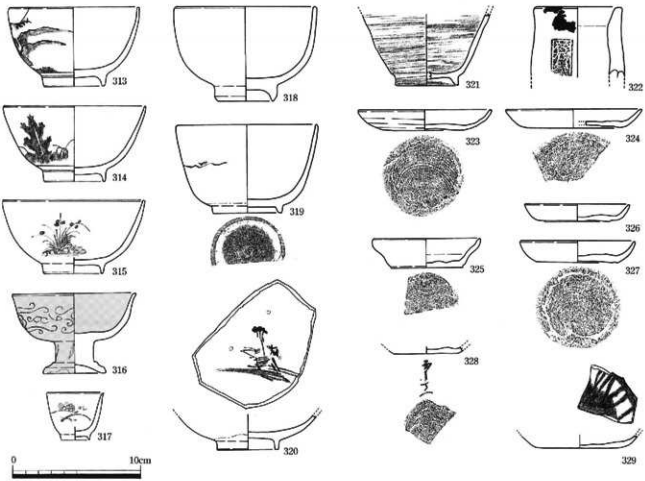
第54図　SXN001平・断面図（1/40），出土遺物（1/3，1/4）



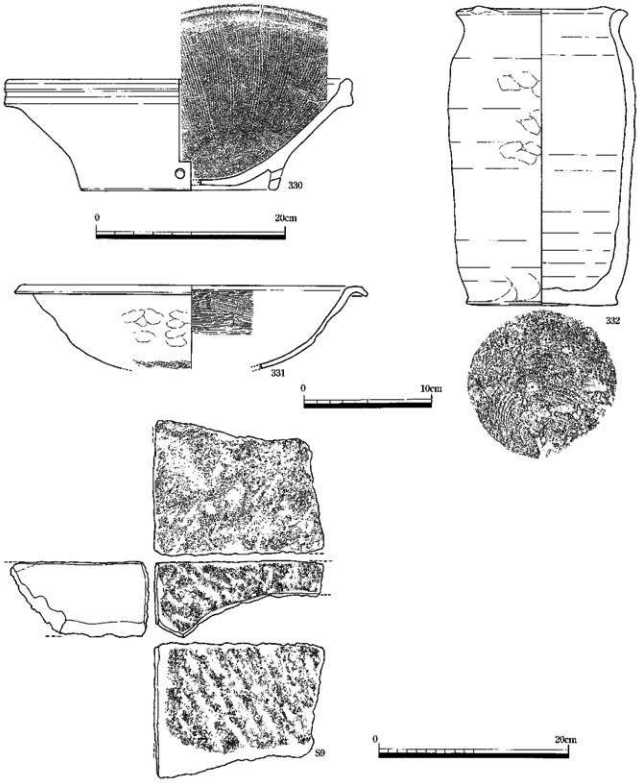
第55図　SXN002，SKN001平・断面図（1/40），SKN001出土遺物（1/3，1/4，1/2）



第2トレンチ東壁土層図
① A層
② B層
③ 2.5Y6/2灰黄色シルト質極細砂
④ 2.5YR5/1黄灰色シルト(炭・焼土粒を含む)
⑤ 2.5Y6/2灰黄色シルト(炭・焼土粒を含む)
⑥ 2.5Y4/1褐灰色シルト～シルト質粘土
(炭・焼土粒を含む,木質遺物・人頭大の石を含む)
④～⑥―SXN003埋土
⑦ 2.5Y6/1黄灰色砂質シルト(浅黄色極細砂混じる)
⑧ 7.5YR4/1褐灰色シルト(鉄分沈着)
⑨ 2.5Y7/1灰白色シルト(褐鉄鋼が認められる)
⑤⑨―E層

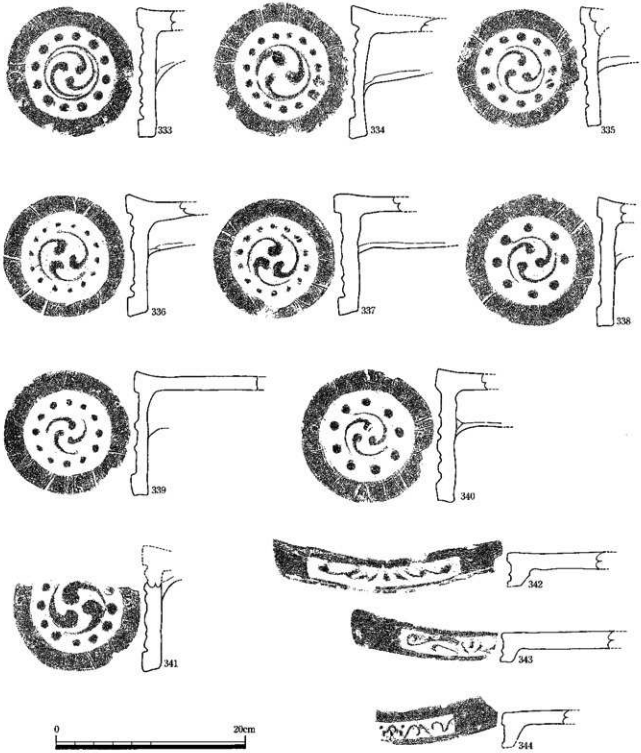


第56図　SXN003平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）



第57図　SXN003出土遺物（1/3，1/4）

一重枠に「大下 一堺ミなと藤左衛門」の刻印をもつ焼塩壷。口縁に煤の付着が認められる。323～329は，土師質土器皿。323・326・327は橙色の胎土で，高松城編年（佐藤2003）のⅢＡⅥ形式に相当する器形である。324は灰白色の胎土で，高松城編年（佐藤2003）のⅢＡⅤ形式に相当するもの。325は橙色の胎土で，高松城編年（佐藤2003）のⅢＡⅢ形式に相当するものである。328・329は墨書土器で，328は，底部に「不万天　｜の文字を記す。329は，兄込みに絵を描いたものである。330は備前系陶器擂鉢。高い高台部と焼成前に施された穿孔をもつ。331



第58図　SXN003出土瓦（1/4）

は土師質土器焙烙。深手のもので，断面三角形の口縁部をもつ。332は土師質土器（鉢）壺。底部に回転糸切り痕を残し，轆轤成形と考えられる。口縁部には，片口状の突起が認められる。Ｓ９は角礫凝灰岩で，断面がアーチ状に成形された石材。各面に加工痕が残る。333～341は軒丸瓦，342～344は軒平瓦。被熱を受けたものが多く明確ではないが，瓦当面にキラコが認められるものはない。軒丸瓦の巴文については，概ね高松城編年（佐藤2003）の様相４・５に相当するものとみられ，軒平瓦についても三葉文と四葉文を中心飾りとしたものであることから，この時期以降には下らないものと考えられる。

SXN006（第59図参照）

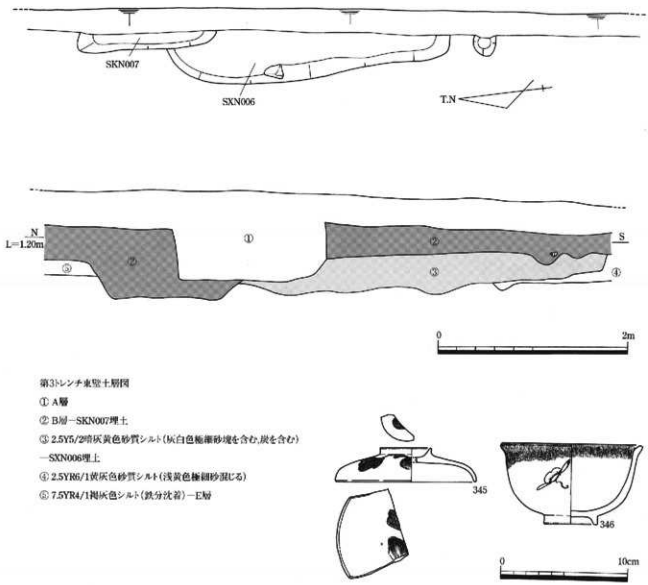
北調査区第３トレンチ中央部，標高0.77ｍで検出した性格不明遺構。調査範囲外へと広がるが，南北方向に2.93ｍの規模をもつ。東方向へと延びており，位置関係からSXN003に繋がる可能性が考えられる。深度は0.15ｍを測り，北端部はSKN001に切られる。出土遺物が無く詳細な時期は不明だが，SXN003と同様の18世紀前半を中心とした時期が考えられる。

SKN007（第59図参照）

北調査区第３トレンチ中央部，標高0.77ｍで検出した土坑。東部は調査範囲外へと広がるが，南北方向には1.45ｍの規模をもつ。埋土は基本層序のＢ層から連続し，SXN006の北端を切り込む。出土遺物は少量で，図化したものの他は瀬戸・美濃系磁器細片のみである。層序及び出土遺物から19世紀中葉の埋没時期が考えられる。

SKN007出土遺物（第59図参照）

345は肥前系磁器碗蓋。346は瀬戸・美濃陶器で，奈良茶碗。口縁部に青色の釉を掛け，体部に銹絵を描いている。



第59図　SXN006・SKN007平・断面図（1/40），SKN007出土遺物（1/3）

SXN004（第60図参照）

北調査区第２トレンチ南端，標高0.75ｍで検出した性格不明遺構。南北方向に1.52ｍ，東西方向に0.56ｍの規模で確認したもので，南調査区より広がるSXS1001の北東隅部に相当する。深度は0.23ｍを測り，埋土はSEN001を被覆して認められる。出土遺物はコンテナ1/4箱程度で，肥前系磁器端反碗，肥前系陶器碗・皿，瀬戸・美濃系磁器細片，上師質土器皿，瓦片，骨がある。所属時期についてはSXS1001と同様で，19世紀中葉の埋没時期が考えられる。

SXN005（第60図参照）

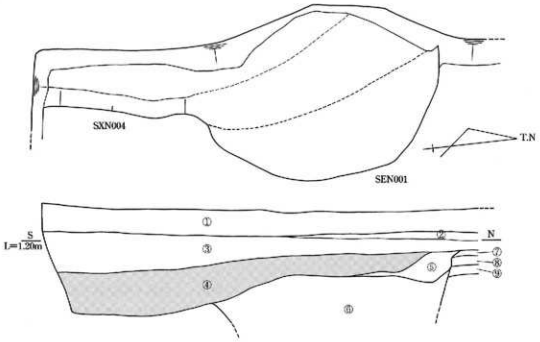
北調査区第３トレンチ北端，標高0.80ｍで検出した性格不明遺構。大半部が調査範囲外へと広がるが，位置関係と埋土の特徴からSXN002に繋がる可能性が高く，SXN001より延びる一連の遺構の西端に相当するものと考えられる。出土遺物は無いが，埋土が共通するSXN001・002と同様に18世紀前半の埋没時期が考えられる。

SXN007（第61図参照）

北調査区第３トレンチ南端から南調査区第１面にわたり，標高0.82ｍで検出した性格不明遺構である。南北方向へ溝状に延び，長さは4.20ｍを測り，幅は0.71ｍ以上の規模をもつ。深度は0.31ｍを測り，埋土上面から底面にかけて，SAN002を構成する柱穴が確認された。柱穴には腐食が著しいものの柱材が認められるものもあり，両端に認められる柱穴間の距離が２間相当となることから，柱の埋設に関連した布掘りの地業痕と考えられる。柱の埋設は基本的には布掘りを行ったうえで，柱位置を壺掘りしたものと考えられ，北調査区西壁には柱の抜き取り痕が認められる。但し，柱間が詰まっており後述のSAN002で検証する様に，柱穴は複数の時期にわたる可能性がある。屋敷境に相当するSAN002の中で，布掘りの地業が認められるのは当遺構の区間のみであり，次の２点が想定できる。西に隣接するSES1002の掘り方と重複することから，この区間における補強の可能性が考えられる。加えて，当初は柵列が当遺構の南端までであったことも考えられ，南端部で土部構造が異なっていたことが想定される。出土遺物は，瀬戸・美濃系陶器折縁ソギ皿，土師質土器皿・鍋の細片のみであるが，底面でSES1002の井側の可能性がある桶材が確認されている。所属時期については，南調査区で17世紀中葉の整地及びSPS1139を切り込むことから，これ以降の所産となり，SES1002に関わるものであれば18世紀前半を中心に考えられる。

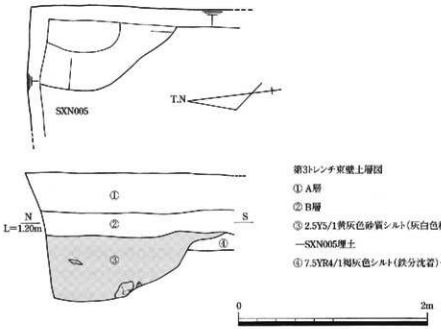
SAN002（第62図参照）

北調査区第３トレンチから南調査区第１面にわたり検出した柱穴で，屋敷地の境に相当する柵列として復元した。復元した柵列はN-6°-Eの方向となり，延長距離は16ｍを測る。柱穴は0.2～0.6ｍ程の円形，あるいは隅丸方形を呈し，深度は0.3～0.6ｍである。地業痕とみられるSXN007の区間以外においても柱材を留めたものがある他，根石あるいは根巻き石を伴うものも認められる。確認した状況においては，柱間距離が揃わず詰まっており，遺構確認面が異なる南北の調査区において密度が違って認められる。南調査区で確認されたものを基に柱間距離を精査した結果，概ね2.4ｍを基準としＡ～Ｃ，３種類に分類できる。Ａ類とＢ類は，南調査区から確認できるもので，何れも中央部の区間が2.9～3.0ｍ前後とやや広くなる。Ｃ類については北調査区のみで認められ，Ａ・Ｂ類の半間分になる1.2ｍを基準とし，南調査区の下層においても対応するものが認められないことから，SXN007の南部を未端としていると考えられる。Ａ～Ｃ類において時期差が想定されるが，明確な前後関係を示すものに欠ける。柱穴の出土遺物による時期決定も困難であることから根拠に乏しいが，Ａ及びＢ類の基盤層に連動して存在するＣ類を古相とし，SXN007の両端に位置するＡ・Ｂ類の柱穴の内で，Ａ類に属するSPS1123がSXN007に後出して確認されていることから，Ｃ→Ｂ→Ａ類の順を想定する。所属時期については，17世紀中葉以降で，19世紀中葉までの間と考えられる。



第2トレンチ西壁土層図

① A層
② B層
③ 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト(炭を若干含む)
④ 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト(炭を含む)－SXN004埋土
⑤ 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト(灰白色極細砂塊を含む,炭を含む)
⑥ SEN001埋土
⑦ 10GY6/1緑灰色砂質シルト
⑧ 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト(浅黄色極細砂混じる)
⑨ 7.5YR4/1褐灰色シルト(鉄分沈着)－E層



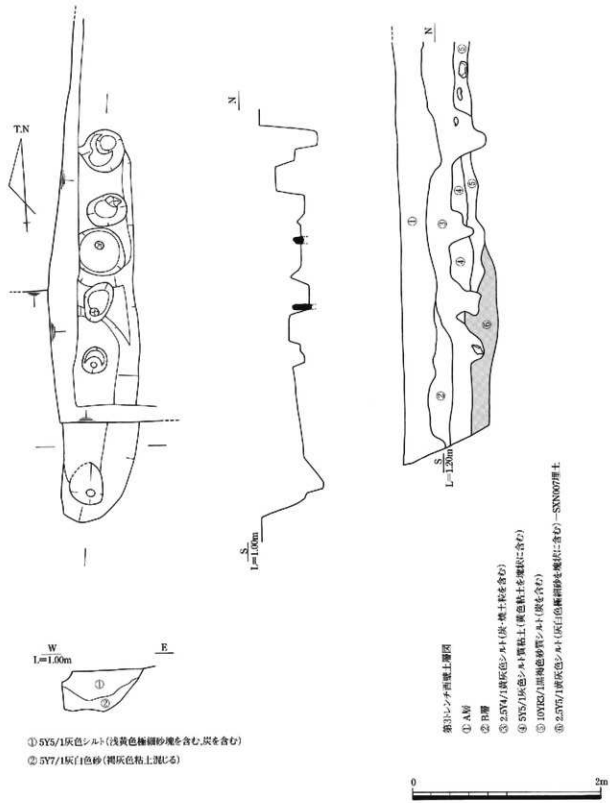
第3トレンチ東壁土層図

① A層
② B層
③ 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト(灰白色極細砂塊を含む,炭を含む)
－SXN005埋土
④ 7.5YR4/1褐灰色シルト(鉄分沈着)－E層

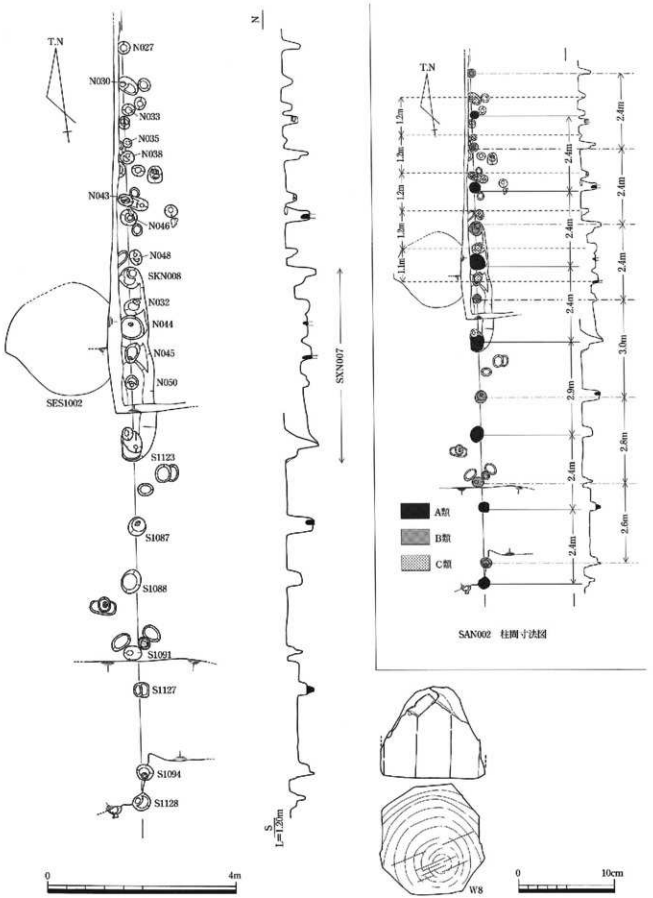
第60図　SXN004・005平・断面図（1/40）

SPN1087出土遺物（第62図参照）

W８は，SAN002を構成するSPN1087で認められた柱材。丸太材を12cm幅の八角形に加工したもので，底面は平坦で切断痕が残る。



第61図　SXN007平・断面図（1/40）



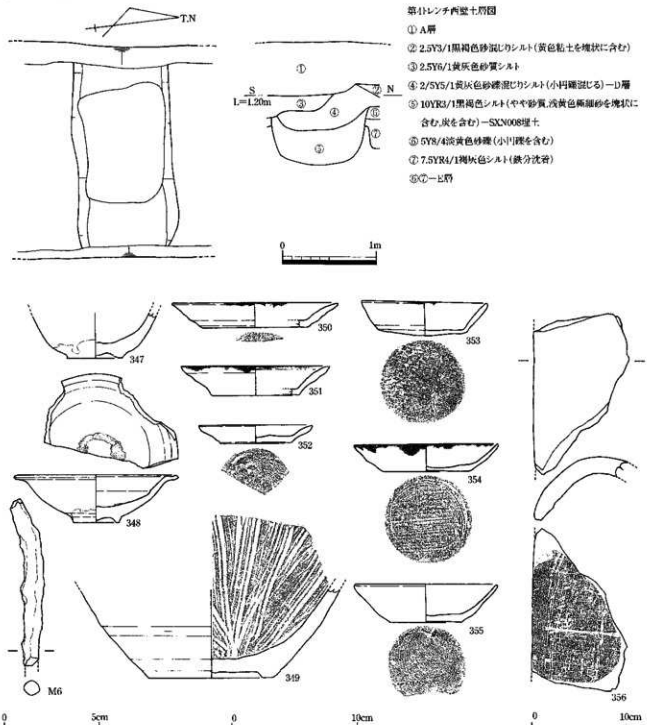
第62図　SAN002半・断面図（1/80），SPS1087出土遺物（1/4）

SXN008（第63図参照）

北調査区第４トレンチ北部，標高0.82ｍで検出した性格不明遺構。東西方向に調査範囲外へと延び，幅1.05ｍの規模をもつ。平面は直線的で，N-94°-E前後の方位を示す。断面は台形を呈し，深度0.42ｍを測る。埋土は地山を塊状に含むシルトで，炭・有機物により黒褐色を呈する。底面は標高0.31～0.50ｍを測り，中央部が方形状に窪む。出土遺物はコンテナ1/2箱程度で，図化したような肥前系陶器，土師質土器，瓦，釘がある。陶片及び出土遺物から，17世紀前半の埋没時期が考えられる。

SXN008出土遺物（第63図参照）

347は肥前系陶器で，鉄釉を施す碗。348は肥前系陶器で，溝縁の皿。透明色の釉を施し，見込みに砂目痕が残る。349は肥前系陶器擂鉢。内面及び底部無釉。350～355は，土師質土器皿。350～352は，鈍い橙色の胎土をもち，



第63図　SXN008平・断面図（1/40），出土遺物（1/3，1/4，1/2）

中位で屈曲し口縁が外反するもので高松城編年（佐藤2003）のⅢＡⅣ形式に相当する。353は赤褐色粒を含む鈍い橙色の胎土をもち，高松城編年（佐藤2003）のⅢＡⅢ形式に相当する。354は灰白色の胎土をもち，底部に板目状の圧痕が残る。高松城編年（佐藤2003）のⅢＡⅤ形式に相当する。355は深手で，坏形を呈する。胎土は鈍い黄橙色を呈し，底部に回転糸切り痕が残る。356は丸瓦で，凹面にコビキ痕が残る。Ｍ６は鉄釘である。

SXN009（第64図参照）

北調査区第４トレンチ中央部，標高0.80ｍで検出した性格不明遺構。東西方向に調査範囲外へと延び，幅1.48ｍの規模をもつ。平面は直線的でN-100°-E前後の方位を示し，東部はSK012に切られる。深度0.20ｍで断面は舟底形，埋土は炭・焼土粒を含む褐灰色シルトである。底面は標高0.61～0.74ｍを測り，東へと下っている。出土遺物はコンテナ1/4箱程度で，肥前系磁器細片，施釉陶器土鍋，瓦，釘がある。詳細な時期は不明だが，出土遺物及び遺構の前後関係から18世紀前半を中心とした埋没時期が考えられる。

SXN010（第64図参照）

北調査区第５トレンチ東端部，標高0.99ｍで検出した性格不明遺構。西部は調査範囲外へと延び，東部はSXN009に壊されている。肩部に沿い，人頭大の角礫が石列状に認められる。出土遺物は皆無で，詳細な時期は不明だが，層序及び遺構の前後関係から17世紀後半を中心とした埋没時期が考えられる。

SKN012（第64図参照）

北調査区第４トレンチ中央部，標高0.79ｍで検出した土坑。調査範囲外へと広がるが，概ね径0.9ｍの円形を呈して認められる。深度0.47ｍを測り，SXN008・009，SKN025を壊す。断面は箱形を呈し，埋土は炭を含む鈍い黄色のシルト質極細砂である。出土遺物はコンテナ１箱程度で，図化したものの他，瀬戸・美濃系陶器腰錆碗，京・信楽系陶器色絵碗，備前系陶器鉢，堺・明石系陶器擂鉢，土師質土器皿・焙烙，軟質施釉陶器土鍋，瓦片がある。出土遺物から18世紀後半の埋没時期が考えられる。

SKN012出土遺物（第64図参照）

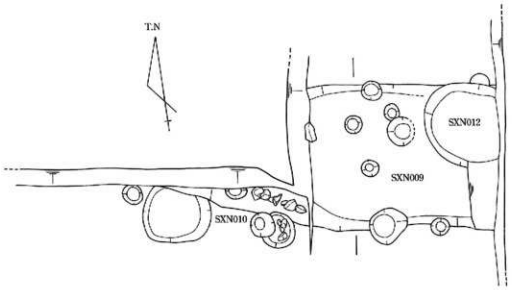
357・358は肥前系磁器で，見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施すくらわんか手の碗・皿。359は備前系陶器灯明皿。360～362は，土師質製の玩具。360は亀乗り童子。胎土は精良で，灰白色を呈する。中空で，型押しによる陽刻をもつ。底部には，草花を描いた墨書が認められる。361は鳥形。362は飯事セットの羽釜。361・362ともに，器面にキラコの塗布が認められる。

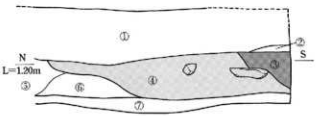
SKN006（第65図参照）

北調査区第３トレンチ北部，標高0.78ｍで検出した土坑。平面は北部が幅広になる隅丸方形を呈し，南北方向に1.79ｍ，東西方向に1.15ｍを測る。深度0.47ｍを測り，断面は台形を呈する。埋土は大半部を瓦礫層が占め，下端部に砂層の堆積が認められる。出土遺物はコンテナ1/2箱程度で，図化したものの他，漳州窯系青花皿，肥前系陶器皿，信楽系陶器甕，土師質土器焙烙がある。出土遺物から18世紀後半の埋没時期が考えられる。

SKN006（第65図参照）

363・364は肥前系磁器碗。364は青磁染付で，見込みにコンニャク印判の五弁花が認められる。365は肥前系磁器で，色絵の猪口。口錆と赤色の上絵を施す。366・367は肥前系陶器で，京焼風の碗。各々高台内に，「小□松□」，「木下弥」の刻印をもつ。368は肥前系陶器で，明黄褐色の釉を施す碗。371は土師質土器で，輪積の焼塩壺蓋。369・370は備前系陶器で，灯明受皿と擂鉢。370は，器面に塗土と火襷痕が認められる。372・373は，土師質土器皿。何れも胎土は灰白色を呈し，器形及び法量から各々高松城編年（佐藤2003）のⅢＡＸ・Ⅴ形式に相当する。374・375は，軒丸瓦及び丸瓦である。





第5トレンチ北壁土層図

① A層

② B層

③1 0YR4/1褐灰色砂質シルト(炭・焼土粒を含む)－SXN009埋土

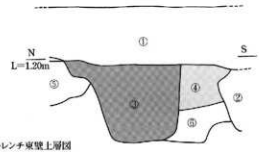
④ 5Y6/1灰色砂混じりシルト(淡黄色粘土塊を含む)－SXN010埋土

⑤ 2.5Y5/1黄灰色砂礫混じりシルト－D層

⑥ 7.5YR4/1褐灰色シルト(鉄分沈着)

⑦ 2.5Y7/1灰白色シルト(褐鉄鋼が認められる)

⑤⑦－E層



第4トレンチ東壁土層図

① A層

② 5Y5/1灰色シルト(黄色粘土を塊状に含む)－SPN180埋土

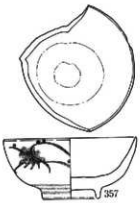
③ 2.5Y6/4鈍い黄色シルト質極細砂(炭を疎らに含む)－SKN012埋土

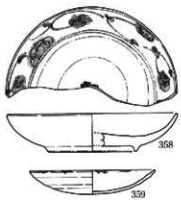
④ 10YR4/1褐灰色シルト(炭・焼土粒を含む)－SXN009埋土

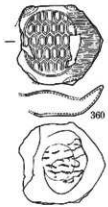
⑤ SXN008埋土

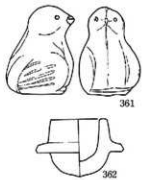
⑥ 2.5Y6/1黄灰色シルト－SKN025埋土

0 2m









0 10cm

0 5m

第64図　SXN009・010，SKN012平・断面図（1/40），SKN012出土遺物（1/3，1/2）

第65図　SKN006平・断面図（1/40），出土遺物（1/3，1/4）

SKN003（第66図参照）

北調査区第２トレンチ北部，標高0.70ｍで検出した土坑。西部が調査範囲外に掛かるが，平面は長軸方向で0.88ｍを測る楕円形と推定される。深度0.13ｍを測り，断面は船底形を呈する。埋土は炭及び地山を塊状に含む黄灰色砂質シルトである。出土遺物は少量で，図化した土師質土器皿のみである。所属時期は層序及び出土遺物から，17世紀後半を中心としたものと考えられる。

SKN003出土遺物（第66図参照）

376は土師質土器皿。胎土は鈍い黄橙色を呈し，底部に回転糸切り痕を残す。高松城編年（佐藤2003）の皿Ａⅵ形式に相当する。

SKN009・010（第66図参照）

北調査区第４トレンチ北端部，標高0.83ｍで検出した土坑。ともに北部が調査範囲外に掛かるが，平面は径0.6～0.7ｍ程の円形と推定される。深度はSKN009が0.18ｍ，SKN010が0.25ｍを測り，SKN009がSKN010西部を切り込む。またSKN009においては，石積みに用いるような大振りの河原石及び角礫が認められる。埋土はSKN009が基本層序Ｂ層より連続するもので，SKN010は粘土塊を含む暗灰黄色シルトである。出土遺物は共に少量で，SKN009から陶磁器細片，SKN010から瓦片があるのみである。所属時期は層序からSKN009が19世紀中葉，SKN010については不詳だが，17世紀中葉以降で19世紀中葉までの所産と考えられる。

SKN011・026，SPN051・055（第66図参照）

北調査区第４トレンチ北端部，標高0.81～0.85ｍで検出した土坑及び柱穴で，位置関係及び遺構の規模から門跡と想定されるもの。柱穴SPN051・055は，径約0.4ｍの円形を呈し，何れにも根巻き石とみられる角礫が掘り方の肩部に認められ，SPN051には人頭大の扁平な根石が残る。一方，SPN055に南接して，南北方向に0.82ｍ，東西方向に0.46ｍを測る隅丸方形のSKN011が確認されている。深度は0.43ｍを測り，底面の南よりに根石をもつ。SPN051の南隣にも，SKN011と同規模・同形態と推定されるSKN026が認められ，トレンチ東壁の土層により同時期に廃棄されたと考えられる。確認範囲が狭いことから明白ではないが，SPN051・055の柱間から１間相当の門が推定される。加えてSPN055とSKN011の根石との間隔は半間相当になっており，控柱をもつ構造も考えられる。しかしながら，SKN011がより規模が大きく見られる点と北方向が敷地境と考えられる点から，SPN051・055を東西方向の境となる塀基礎とし，SKN011・026を門柱とする２本柱の構造が現状では想定しやすい。出土遺物は何れも少量だが，図化したものの他，SKN011から肥前系磁器，肥前系陶器溝縁皿の細片，瓦片，SPN055からは肥前系磁器，土師質土器，瓦の細片がある。所属時期については，層序及び出土遺物から17世紀中葉以降で19世紀中葉までの所産と考えられる。

SKN026出土遺物（第66図参照）

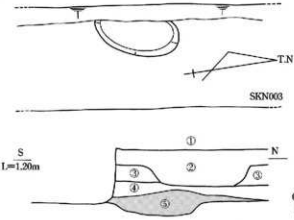
Ｍ７は，金具。鋲製で，先端部がやや尖る。上半部は歪に変形し下半は鍵形に折れ曲がっている。

SKN013（第67図参照）

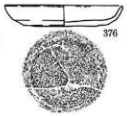
北調査区第４トレンチ中央部，標高0.86ｍで検出した土坑。平面は東西方向で0.93ｍ，南北方向に0.85ｍを測るやや歪な隅丸方形を呈する。深度0.10ｍを測り，断面は船底形を呈する。埋土は炭及び焼土粒を含む灰黄褐色シルト質細砂である。出土遺物はコンテナ1/4箱程度で，図化したものの他，肥前系磁器紅猪口，備前系陶器鉢，土師質土器焙烙，瓦細片がある。所属時期は，出土遺物から18世紀後半頃の埋没時期が考えられる。

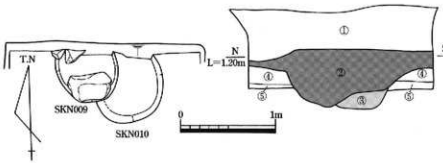
SKN013出土遺物（第67図参照）

Ｍ８は寛永通宝。377は肥前系磁器で，蛇ノ目凹形高台をもつ火入れ。378は肥前系陶器鉢で，底面に置かれた状態で確認された。象嵌文様をもつ三島手で，見込みに８箇所の砂目痕が残る。

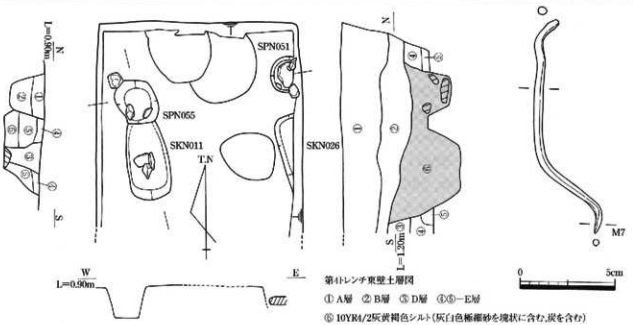


第2トレンチ西壁土層図
① A層
② B層
③ 2.5Y6/2灰黄色シルト質極細砂(炭を若干含む)
④ 10YR4/1褐灰色シルト(炭・焼土塊を含む)
⑤ 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト(灰白色極細砂を塊状に含む,炭を若干含む)－SKN003埋土





第4トレンチ北壁土層図
① A層
② B層－SKN009埋土
③ 2.5Y5/2暗灰黄色シルト(黄色粘土を塊状に含む)－SKN010埋土
④ 7.5YR4/1褐灰色シルト(鉄分沈着)
⑤ 2.5Y7/1灰白色シルト(褐鉄鋼が認められる)④⑤－E層



第4トレンチ東壁土層図
① A層 ② B層 ③ D層 ④⑤－E層
⑥ 10YR4/2灰黄褐色シルト(灰白色極細砂を塊状に含む,炭を含む)
－SPN051・SKN026埋土

SPN055・SKN011断面
① 5Y7/1灰白色細砂+5Y6/1灰色シルト質細砂
② 2.5Y6/2灰黄色+2.5Y7/1灰白色シルト質細砂
－①②SPN055埋土
③ 10YR6/1褐灰色シルト質極細砂+2.5Y7/2灰白色シルト質細砂
④ 2.5Y7/2灰白色シルト質細砂
⑤ 5YR/2灰白色細砂
⑥ 2.5Y7/1灰白色+2.5Y6/2黄灰色シルト質細砂－⑤－⑥SKN011埋土

第66図　SKN003・009・010・011・026，SPN051・055半・断面図（1/40），
SKN003・026出土遺物（1/3，1/2）

SKN016（第67図参照）

北調査区第５トレンチ中央部，標高0.83ｍで検出した土坑。平面は東西方向で1.70ｍ，南北方向に1.10ｍを測る隅丸方形を呈し，主軸はN-100°-E前後の方位を示す。深度0.30ｍを測り，断面は船底形を呈する。埋土の中位には，炭・焼土の薄層が認められる。出土遺物はコンテナ1/2箱程度で，図化したものの他，瀬戸・美濃系陶器碗・ヒダ皿，京・信楽系陶器碗，堺・明石系陶器擂鉢，須恵器片，瓦片がある。所属時期は，出土遺物から19世紀中葉頃の埋没時期が考えられる。

SKN016出土遺物（第67図参照）

379は肥前系磁器碗蓋。380は肥前系磁器広東碗。381は・瀬戸・美濃系磁器端反碗。382は備前系陶器灯明皿。口縁端部に小さな摘みが付く。383は京・信楽系陶器端反碗。384は，産地不詳の（壺）底部。内外の一部に鉄泥を塗布し，外面に透明色の釉を施す。碁笥底の底部に「リツ」と読める墨書が認められる。385は有溝土錘で，両面に２条の溝状になる押圧痕が認められる。

SKN014（第68図参照）

北調査区第４トレンチ南部，標高0.83ｍで検出した土坑。東部が調査範囲外に広がるが，平面は南北方向で0.83ｍ，東西方向に0.39ｍ以上の隅丸方形と推定される。深度0.25ｍを測り，断面は船底形を呈する。埋土は，上位の整地層から連続する炭・焼土塊を含む褐灰色シルトである。出土遺物は少量で，肥前系磁器細片，堺・明石系陶器擂鉢，土師質土器甕，瓦，釘がある。詳細な時期は不明であるが，層序及び出土遺物から18世紀前半以降で19世紀中葉までの所産と考えられる。

SKN021（第68図参照）

北調査区第６トレンチ北部，標高0.71ｍで検出した土坑。平面は南北方向で1.80ｍ，東西方向に1.08ｍを測る隅丸方形を呈し，主軸はN-4°-E前後の方位を示す。深度0.33ｍを測り，断面は船底形を呈する。埋土は３分割され，上位に地山を含む浅黄色～淡黄色シルト質細砂で，下位に灰オリーブ色シルト質細砂と地山を含んだ細～粗砂の堆積が認められる。出土遺物は少量で，弥生土器，黒色土器，土師器細片のみである。所属時期は不詳だが，埋土の特徴及び第６トレンチの層序から判断すれば，17世紀中葉頃の所産と推定される。

SKN025（第68図参照）

北調査区第４トレンチ中央部，SXN009・SKN012の下位となる標高0.79ｍで検出した土坑。東部が調査範囲外に広がるが，平面は南北方向で1.47ｍ，東西方向に1.12ｍ以上を測る方形と推定される。深度0.35ｍ，断面は台形を呈し，埋土は黄灰色シルトの単層である。出土遺物は少量で，図化したものの他は土師質土器細片，瓦片のみである。所属時期は，出土遺物から17世紀初頭を中心に考えられる。

SKN025出土遺物（第68図参照）

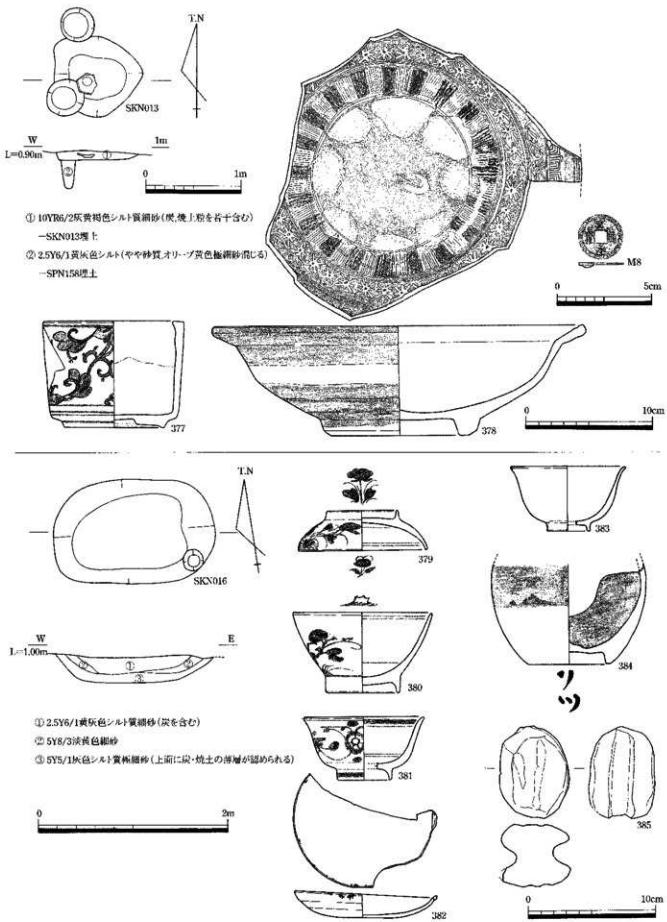
386は肥前系陶器で，灰釉の皿。波状のＬ口縁部をもつ。

SDN001（第69図参照）

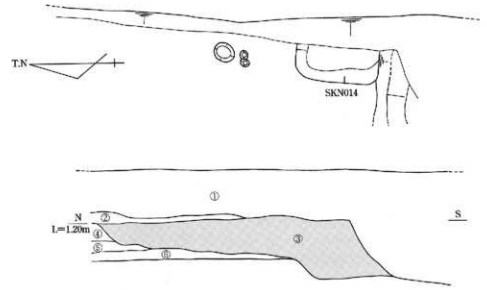
北調査区第５トレンチ西端部，標高1.06ｍで検出した石組み溝。石組みの遺存は悪いが，N-5°-E前後の方位を示す。規模は内法で幅0.24ｍ，底面は標高0.98～1.01ｍを測り，北方向へ下り気味になる。平面では確認できなかったがトレンチ壁の土層によると，石組みは断面で箱形を呈し，上部に蓋石の可能性がある板石が認められる。埋土にはラミナ状の堆積が認められ，石組みの裏は黄灰色シルト質粘土で充填されている。確認できる規模及び延長距離から，雨落ち等の小規模な排水溝と考えられる。出土遺物は少量で図化したものの他，石組み内の埋土から土師質土器細片，鉄滓，瓦片がある。所属時期の詳細は不詳だが，層序及び出土遺物から17世紀前半を中心とした時期が考えられる。

SDN001出土遺物（第69図参照）

387・388はSDN001石組みの裏土の出土遺物で，土師質土器把手付鍋及び，擂鉢の口縁部である。



第67図　SKN013・016平・断面図（1/40），出土遺物（1/3，1/2）

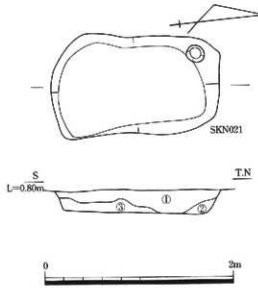


第4トレンチ東壁土層図

①A層　②B層　③10YR4/1褐灰色シルト(炭,焼土塊を含む,灰白色極細砂を斑状に含む)－SKN014埋土

④2.5Y6/1黄灰色シルト(やや砂質,淡黄色極細砂混じる)－D層　⑤7.5YR4/1褐灰色シルト(鉄分沈着)

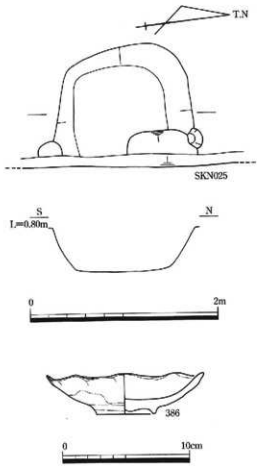
⑥2.5Y7/1灰白色シルト(褐鉄漸が認められる)⑤⑥－E層



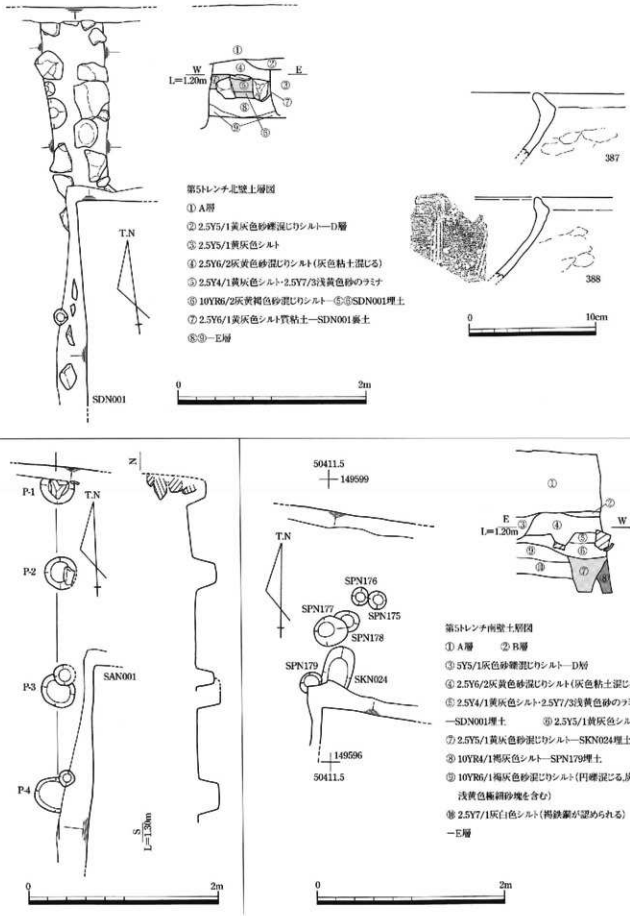
①5Y7/3浅黄色~5Y8/3浅黄色シルト質細砂(灰白色細砂を含む)

②5Y6/2灰オリーブ色シルト質細砂

③7.5Y7/1灰白色礫~粗砂(浅黄色シルト質細砂を含む)



第68図　SKN014・021・025平・断面図（1/40），SKN025出土遺物（1/3）



第69図　SDN001，SAN001，SDN001下層検出遺構平・断面図（1/40），SDN001出土遺物（1/3）

SAN001（第69図参照）

北調査区第６トレンチ，SDN001に併走して検出した柵列状遺構。検出高は，標高0.72～0.82ｍを測る。検出長は3.5ｍ，３間分相当で主軸方位はN-5°-Eを示す。柱穴は円形を呈し径0.35ｍ前後の規模に揃い，深度は0.2～0.32ｍを測る。柱穴P-1は，トレンチ北壁の上層から拳～人頭大の角礫を詰めた状況が確認され，礎石設置に伴う根石と考えられる。一方，他の柱穴については，P-2について根石あるいは根巻き石らしきものを認めるが，何れも礎石立ちか掘立構造かの判断はできない。加えて柱間が0.9ｍと1.2ｍを測り，P-1・2の柱間が他に比べ狭くなることから，P-1については遺構を構成する柱穴にならない可能性もある。出土遺物は少量で，P-2より肥前系陶器碗と瓦がある。所属時期については不詳だが，P-1の北壁上層で確認できる層序によると，17世紀中葉以降で概ね19世紀中葉までの所産と考えられる。

SDN001下層検出遺構（第69図参照）

北調査区第５トレンチ西端部，SDN001の下層になる標高0.70ｍ前後で検出した柱穴及び土坑。柱穴は何れも円形を呈し，灰黄褐色シルトの埋土をもつ。規模は径0.2～0.3ｍ，深度0.2ｍ前後で認められる。土坑SKN024は，南北方向0.42ｍ，東西方向0.30ｍ程の隅丸方形状を呈する。深度は0.20ｍを測り，黄灰色の砂混じりシルトを埋土にもつ。出土遺物はSPN177に若干量の土師質土器が認められる他，SKN024に肥前系陶器碗がある。詳細な時期は不明だが，層序及び出土遺物から概ね17世紀初頭を中心としたものと考えられる。

SPN163（第70図参照）

北調査区第６トレンチ南端部，標高0.81ｍで検出した柱穴。平面は径0.4ｍ前後の規模をもつ円形を呈し，深度は0.52ｍを測る。埋土は灰黄褐色シルトの地山で，底部の下端に柱材が残る。南部には地山の混じる黄灰色シルトの埋土を持つSPN164が取り付いており，SPN164が柱掘り方，SPN163が柱抜き取り痕に相当するものと考えられる。掘立構造をもつ建物等を構成するものと考えられるが，調査範囲の制限もあり対応するものを見出し難い。出土遺物は柱材以外には無く，詳細な時期は不明だが周囲の状況から17世紀中葉以降で19世紀中葉の間の所産と推定される。

SPN163出土遺物（第70図参照）

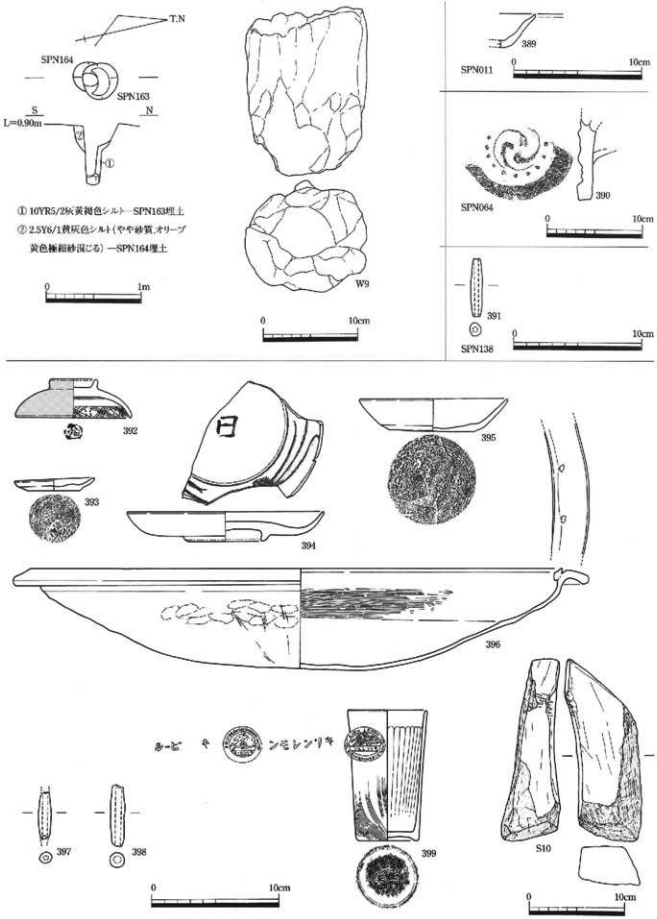
Ｗ９はSPN163の底面に遺存していた柱材。径12cm程の丸太材で，下端に加工痕が認められる。

SPN011・064・138出土遺物（第70図参照）

北調査区で確認された柱穴は，南調査区の調査結果により16世紀末から19世紀中葉までの所産と推定される。とりわけ第３トレンチ以西で確認される柱穴の密度が高く，南調査区第２面までの時期で，柱穴の分布に大きな偏りが見られないことから，第１面に相当する時期のものが主体となるものと推定される。柱穴は第４トレンチ南半，第５・６トレンチで規模が大きいものが目立ち，根石等の基礎部を据付けた痕跡を残すものも認められる。389はSPN011の出土遺物で，備前系陶器坏。390はSPN064の出土遺物で，軒丸瓦。391はSPN138の出土遺物で，管状土錘である。

北調査区遺構外出土遺物（第70図参照）

392～399，S10は，南調査区で機械掘削時等において遺構外より出土した遺物である。392は第１トレンチの出土遺物で，肥前系磁器の青磁染付碗蓋。393は第２トレンチの出土遺物で，土師質土器皿。高松城編年（佐藤2003）の皿Ａⅲ形式に相当する。394は第５トレンチの出土遺物で，日字鳳風文の肥前系磁器皿。395は第６トレンチの出土遺物で，底部回転糸切りの土師質土器皿。396は第３トレンチの出土遺物で，土師質土器焙烙。397・398は第６トレンチの出土遺物で，管状土錘。399は第１トレンチの出土遺物で，キリンビール社の商標をもったガラス製コップ。S10は第４トレンチ出土遺物で，砥石である。



第70図　SPN163・164平・断面図（1/40），SPN163・011・064・138出土遺物（1/3，1/4）
北調査区遺構外出土遺物（1/3，1/4）

第4章　まとめ

以下，各期の遺構変遷を概観するとともに，周辺の区画の検討及び調査地について屋敷経営者の比定を行い，まとめとする。

第1節　遺構の変遷（第71・72図参照）

遺構の変遷については，高松城築城期（16世紀末葉・17世紀初頭），生駒期（17世紀前半），松平期（17世紀中葉～19世紀中葉）の3期に分割した。調査結果を端的に示すものとして，敷地を東西に2分割する遺構が挙げられるが，既に築城期の段階で境に相当するものが想定でき，以後も同地点において認められることから，近世を通じ，境として存在していたことが窺われる。

＜高松城築城期＞

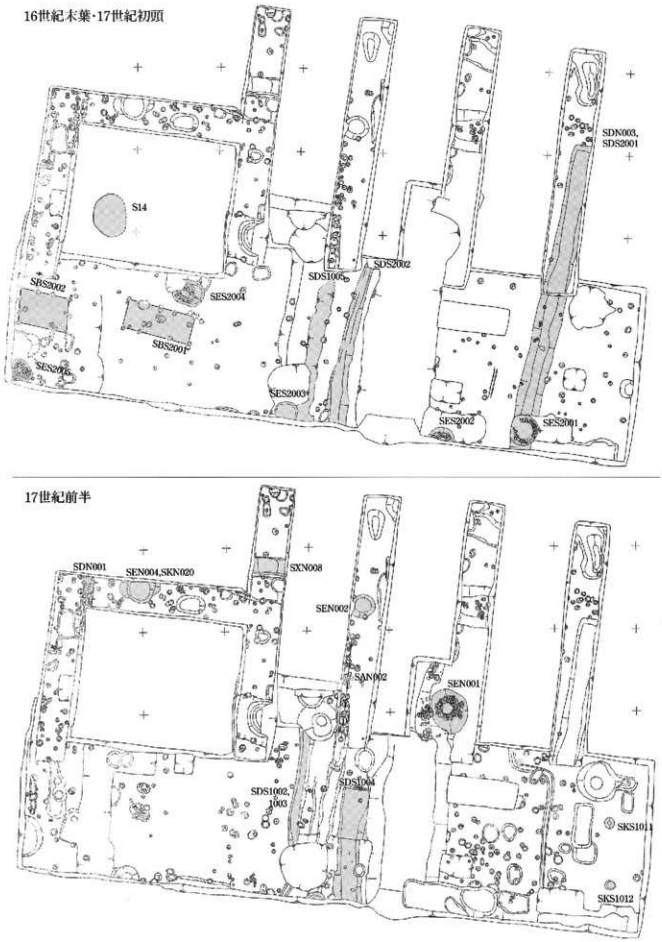
最も古い様相を示すSDN003・SDS2001が，調査地の東部で認められる。素掘りの溝であるが規模及び極めて直線的に延びる点で，以後の屋敷境に認められる溝状遺構とは異なる。詳細な時期は不明であるが，近隣での無量壽院跡SD1302，片原町遺跡SD01が同様相を示し，何れも当該期の範疇に収まるものとなっている。一方，調査地中央部の2条の溝状遺構（SDS2002・1005）は，近隣の丸の内地区における調査事例からも屋敷境を示す遺構と判断され，以後生駒期を通じて踏襲される。丸の内地区と同様，以後の段階のものも含めて西と東で溝底面の傾斜方向が異なり，流路方向の違いが考えられるものの，検出状況では排水溝として連続するようには見られない。この他，南半部において井戸跡が集中し，西部では小規模であるが掘立柱建物跡2棟を復元できることから，南側を生活空間とした可能性が考えられる。また東西の敷地において，調査地の南端部に井戸が並んで認められ，区画の存在等，何らかの制約が存在したことも推測される。なお，南調査区で中世の所産と推定される白磁仏像が出土しているが，遺構に関連せずその由来についての判断は難しい。ただ近隣の無量壽院をはじめ，野原郷に所在した中世寺院との関連を示唆する。

＜生駒期＞

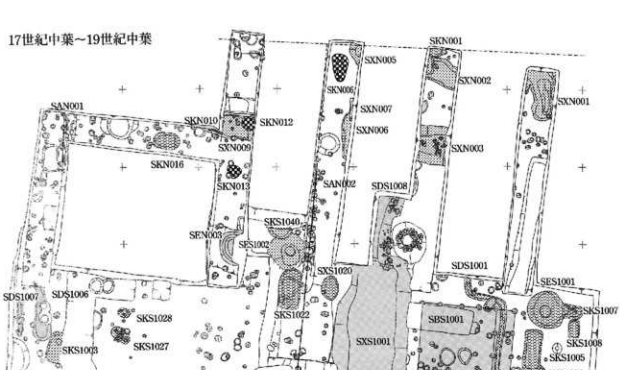
17世紀中葉頃に廃絶したと考えられるものであるが，松平期との間を明確に隔てるような遺構・整地は認められない。敷地を東西に画する溝状遺構が前段階とほぼ同時期に認められるが，東側のSDS1004は明らかに途切れており，西側のSDS1002・1003については南端が西方向に折れるように見られる。SDS1004の北端付近で途切れる柵列SAN002については，南部で削平されたことも考えられるが，SDS1004の有様から境施設が東方向へ小さく突出していた可能性が考えられる。井戸跡については，前段階に比べて東西双方の敷地とも北寄りに分布していることが分かる。また西側の敷地において，東西方向の主軸をもつSXN008は，続く松平期にもほぼ同地点で同様相を呈するSXN009があり，敷地の利用状況に共通箇所があったことが推測される。

＜松平期＞

詳細な時期決定が困難なものもあるが，全体として18世紀前半に廃絶するものと，19世紀中葉に廃絶するものの2時期に大別される。前者については明瞭な被災の痕跡は認められないものの，焼土を伴うものも散見されることから，高松大火（1718年）との関連が推定される。後者についても遺構埋土及び被覆する整地に焼土粒及び炭化物を伴うが，被災に該当する記録は確認できない。屋敷境の遺構については，掘立構造のSAN002のみとなり，前段階のような溝状遺構は認められなくなる。遺構は東側の敷地を中心に，SXS1001をはじめ大型のものが目立つ。SXS1001については，SDS1008より下る排水を兼ねた水溜施設とみられ，SDS1008についても試掘調査の結果からSXN003付近で収束する可能性が高いことから，同敷地内での排水を担っていたものと推察される。北部では東西方向へと延びる大型のSXN001・002・005，SXN003・006，SXN009が存在するが，屋敷境を越えない状況が認められ，各々の屋敷に属する遺構と判断される。これらの遺構の性格については不詳だが，調査地の北面が敷地の出口に推定されることから，門及びこれより進入する主屋と連動して存在する可能性が考えられる。一方，屋敷地の奥まった箇所では，西と東の屋敷で遺構の有り方が異なり，東側の屋敷ではSBS1001及びこれを取り巻い



第71図　遺構変遷図①（1/250）



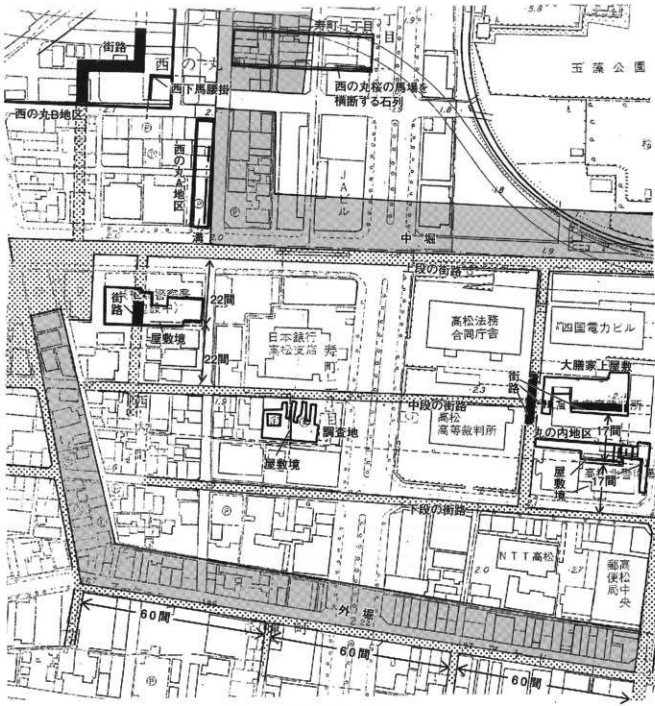
第72図　遺構変遷図②（1/250）

て認められる遺構の存在が大きい。SBS1001は掘立構造のものであるが，一定規模を有し，周囲の廃棄土坑の生活用具から使用人の居住部屋が想定される。また排水溝とみられるSDS1001の位置関係等から東面を拡張した可能性が考えられる。西側の敷地では空閑地に見られるが，礎石大の石を廃棄した土坑も散見されることから，礎石建物が存在した可能性も残る。このように建物については礎石が遺存する状況にはなく，掘立柱建物跡SBS1001のみの確認となったが，柱穴・井戸・廃棄土坑等の分布から考えると東側の敷地では第１トレンチ以東に，西側の敷地では未調査箇所を残す第４～６トレンチ周辺部にそれぞれ主屋となる建物が想定される。

第２節　区画の検討（第73図参照）

高松城外曲輪内の地図上での位置関係は，堀等の現状に残る地割と絵地図との照合により把握されるが，これに随所で行われた発掘調査の結果を加え，外曲輪西部での街路及び屋敷境による区画の検討を行う。

まず絵地図では外曲輪に東西方向に３つの街路が存在し，これらの街路により３つの街区が形成され，役・用途に相応するような屋敷名が記される。中段の街路については大膳家上屋敷で確認されており，西部の現道へと繋がることが分かる。下段の街路についても，大膳家中屋敷・丸の内地区で確認された東西方向の屋敷境を基点に，中段の街路と同尺間で南方の現道上に設定される。また中段の街区を更に南北に画する屋敷境についても，大膳家中屋敷・丸の内地区で認められるライン上に，現有の地割を見出すことができる。上段，堀端の街路については，北警察署地点で確認された東西方向の屋敷境を基点とし，中段の街路と同尺間でその南端が求められる。



第73図　調査地周辺地割図(1/2,500)

但し，当該遺構は17世紀中葉までの所産と推定されることに加え，「小神野夜話」にみえる，お城火よけのため屋敷の並びを５間南に寄せた，との記述内容や享保期の絵図（第77図）から，高松大火（1718年）以降については，街路の幅が10ｍ程度南側へ広がることが想定される。また街路の北端については，生駒時代（第75図参照）及び松平時代（高松城内図：鎌田共済会郷土博物館所蔵）の絵図に見られる堀幅11間の記載から，現在も残る桜の馬場南面を起点とし，ほぼ現道上に定まる。

南北方向の街路については，中堀大手に繋がるものと街区の西限に相当するものが，大勝家上屋敷，北警察署地点において確認されている。なお中堀大手に繋がる街路は，詳細な位置については不明だが，18世紀前半以前の段階で中段の街路より鍵形に折れることが確認されている。

堀幅については上記のように11間を基本とするが，松平期の所産である外曲輪から西の丸・桜の馬場へ入る西御門付近が広くなることが，絵図及び寿町一丁目地区，西の丸地区の調査結果から窺われる。また外堀西面については，生駒期の絵図によると幅広で南面に直行して描かれており本来は鋭角で，規模の大きいものであった可

能性が考えられる。一方で松平期の絵図には，曲輪末端の上塁及び対岸の堀端について当時の維持管理や利用状況を反映した表現も見られ，各街区が三角地となったものが多いことから，西の角地については暫定的な可能性がある。この他，外堀南の堀端に面する兵庫町では，現状の地割に丸亀町筋までの間，条里方向で東西60間（1町）単位の区画が見出される。

このような検討は今後とも資料の蓄積により精査されなければならないが，以上のような位置関係から当調査地は外曲輪中段の街路に面し，中堀大手筋から街区の西端までの間で中央部に設定できる。

第3節　調査地における屋敷拝領者の比定（第74～77図参照）

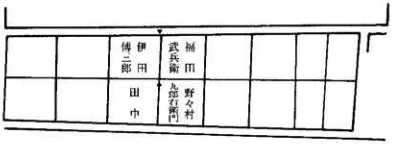
屋敷拝領者の比定については，当調査結果の所見と絵図・文献資料との照合により行うが，調査地の特徴として，東西の敷地を隔てる境が生駒時代以降一貫として認められる点が挙げられる。更に調査地南端の状況から，17世紀中葉までのSDS1002・1003とSDS1004が示す方位，またこれ以降の所産SXS1001の規模を考慮すると，西側の敷地は調査範囲がほぼ南限と推定されるのに対し，東側の敷地については，暫時，更に南側へと延びる可能性を示唆している。

これに相応するものとして，絵図②，④，⑧が挙げられる。各期において南北方向の屋敷境が固定されることから，これを先述の街区に当てはめると概ね第74図で示すような区敷割が考えられる。絵図③・⑧では屋敷の間口は上段の街区を含め，街路から得られた屋敷の奥行きと同様となる17間及び22間を基本に設定される。一方で絵図①・②の段階では，大手筋の街路が縦形となり，また屋敷の間口が様々に表現されることから街区の屋敷割については不確定なところが多い。但し，調査地における屋敷境の設定については，以下のように比定される拝領屋敷の変遷から現状で大きな違和感はない。

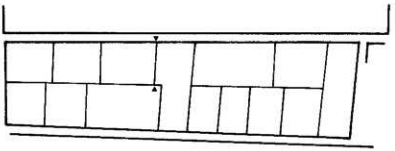
絵図③に記される「篤又蔵」，絵図⑧の「佐野茂乃進」の名を手がかりに，拝領者の変遷をみてみる。「篤」の名は『生駒家騒乱記』にある「篤善右衛門」（鞆重水戸時代からの御荷，350石の旗奉行）が初見で，これによると生駒改易後に，その鉄砲組（30人預），「野々村九郎右衛門」（知行700石）の屋敷跡地を拝領していたことが窺われる。「野々村九郎右衛門」は絵図①で下段の街路に面した屋敷地に見え，以後松平期の絵図②に見られる屋敷地の形態と絵図③の「篤又蔵」の名から，善右衛門及びその子「篤善右衛門（知行250石）」を経て拝領されたと推察される。この後は，元文5年の絵図④と宝暦7年の『讃州高松地図（国立公文書館所蔵）』に見える「篤新十郎」，絵図⑤の「篤又蔵」までその名が認められる。19世紀に入ると文化年間の絵図⑥に「佐野友次郎」，天保15年の絵図⑦に「佐野官八」と「佐野」の姓に替わり，幕末・明治期の絵図⑧・⑨でも，その姓が認められる。安政4年の絵図⑧に記された「佐野茂乃進」は，『安政5年高松藩分限録』によると知行150石の横目役となっている。

一方の西側の屋敷地については，絵図①に見られる「伊田傳一郎」が拝領者の初見となる。この人物は『生駒家騒乱記』によれば，生駒藩より286石の知行を拝し前野助左衛門組に属していたとされる鞘　重人封時の拝領者は不明であるが，後の絵図③・④に「渡辺少三郎」の名が見られる。渡辺少三郎については，貞享3年に惣領組に召し出され70俵4人扶持の軍用役（『高松藩士由緒録』）とされる。宝暦7年の『讃州高松地図』では「中村彦三」となっており，『高松藩士由緒録』及び『宝暦10年分限帳』に見える「中村彦三郎」と考えられる。元祖彦三郎は元文2年に召し出され20人扶持中寄合儒者，後100俵5人扶持使番格となっており，その子彦三郎は20人扶持中寄合，更にその子彦蔵は7人扶持小寄合とされる。続く絵図⑤では，20人扶持中寄合で山鹿流軍学者の「深井喜兵衛」（『高松藩士由緒録』）とみられる人物名が記されている。この後，絵図⑥では拝領者の記載がなく，空地であったことが推察される。幕末期の絵図⑦・⑧では，「沼田勝之進」の名が記されており，同名は『嘉永年間分限録』及び『安政5年分限録』にも見え，知行100石の既別当となっている。絵図⑨でも「沼田」の姓が認められ，同拝領屋敷において明治維新を迎えたと考えられる。東側の屋敷拝領者と比較すると大幅では，知行が少なく役料のみの者が見られる等，家格が低かったことが窺われる。調査結果から小規模な棟門等が想定される他，確認された遺構・遺物数はこれに相応すると考えられる。

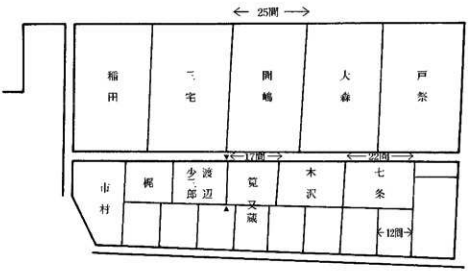
生駒家時代讃岐高松城屋敷割図
（中段の街区）



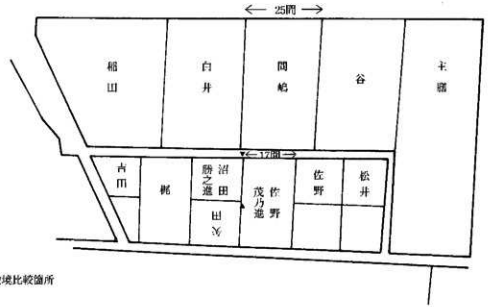
高松城下図屏風
（中段の街区）



享保年間高松城下図
（上・中段の街区）



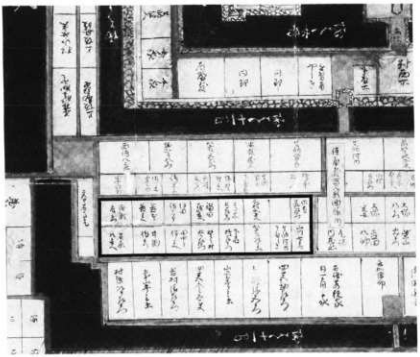
安政4未年高松之図
（上・中段の街区）



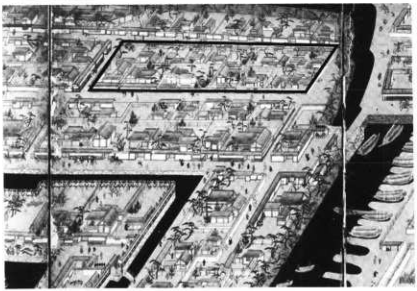
※Ⅹの印は、南北方向の屋敷境比較箇所

第74図　調査地周辺屋敷地割図(1/2,500)

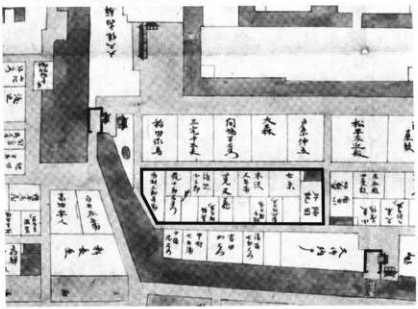
第75図
『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』絵図①



第76図
『高松城下図屏風』絵図②



第77図
『享保年間高松城下図』絵図③



※太線枠内が中段の街区